香川県埋蔵文化財発掘調査報告

－平成５年度 香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集－

五　条　遺　跡
八　丁　地　遺　跡
仲　善　寺　遺　跡
（　西　尾　遺　跡　）

1994.3

香川県埋蔵文化財研究会

五　条　遺　跡

例　言

1．本書は県道善通寺府中線道路局部改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本遺跡は香川県善通寺市原田町下五条1025に所在する。

3．調査は香川県土木部道路保全課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。

4．調査は文化行政課主任技師森下英治が担当した。

5．本書挿図中のレベル高はすべて海抜、方位は磁北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図「善通寺」を使用した。

6．発掘調査、整理作業を通じて香川県善通寺土木事務所、龍川駐在所、寿賀崎建設、善通寺市教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センターその他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。

7．本書の執筆、編集は森下が行った。

目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の立地と環境 …… 3

第３章　調査成果

１）Ａ地区

【遺構】 …… 9

【遺物】 …… 15

２）Ｂ地区 …… 38

第４章　まとめ

周辺地形と五条遺跡の広がり …… 39

石器組成の特徴と生業活動について …… 43

挿図目次

第１図　五条遺跡の位置 …… 1

第２図　平成５年度の工事範囲と調査対象地 …… 2

第３図　周辺遺跡分布図 …… 5

第４図　Ａ地区遺構配置図 …… 11

第５図　大溝１・３断面図 …… 12

第６図　竪穴住居跡・掘立柱建物跡実測図 …… 13

第７図　大溝２出土土器実測図 …… 13

第８図　Ａ地区土坑出土土器実測図 …… 13

第９図　大溝３下層出土土器実測図 …… 14

第10図　大溝１下層出土土器実測図 …… 14

第11図　大溝１上層出土土器実測図 …… 17

第12図　大溝１中層出土土器実測図 …… 18

第13図　大溝３上～中層出土土器実測図 …… 19

第14図　Ａ地区土坑・大溝１上層出土石器実測図(1) …… 23

第15図　大溝１上層出土石器実測図(2) …… 24

第16図　大溝１上層出土石器実測図(3) …… 25
第17図　大溝１上層出土石器実測図(4) …… 26
第18図　大溝１上層出土石器実測図(5) …… 27
第19図　大溝１上層出土石器実測図(6) …… 28
第20図　大溝１上層出土石器実測図(7) …… 29
第21図　大溝１上層出土石器実測図(8) …… 30
第22図　大溝１上層出土石器実測図(9) …… 31
第23図　大溝１中層出土石器実測図(1) …… 32
第24図　大溝１中層出土石器実測図(2) …… 33
第25図　大溝１中層出土石器実測図(3) …… 34
第26図　大溝１中層出土石器実測図(4) …… 35
第27図　大溝１中層出土石器実測図(5) …… 36
第28図　Ｂ地区遺構配置図 …… 38
第29図　五条遺跡既往調査地および旧地形復元図 …… 40
第30図　縄文時代～弥生時代 石器組成の変化 …… 44

図版目次

図版１－１　調査前状況
図版２－１　大溝１上層
図版３－１　大溝１中層紡錘車出土状況
図版４－１　大溝３断面
図版５－１　竪穴住居跡・掘立柱建物跡
図版６－１　Ｂ地区全景
図版７－１　大溝３出土土器
図版８－１　大溝１上層出土土器
図版９－１　大溝１出土石器
図版10－１　大溝１出土石器
図版11－１　大溝１出土石器
図版12－１　大溝１出土石器
図版１－２　Ａ地区調査地全景
図版２－２　大溝３中層遺物出土状況
図版３－２　大溝３
図版４－２　Ａ地区東側
図版５－２　作業風景
図版６－２　Ｂ地区土坑
図版７－２　大溝３出土土器
図版８－２　大溝１中層出土土器
図版９－２　大溝１出土石器
図版10－２　大溝１出土石器
図版11－２　大溝１出土石器
図版12－２　大溝１出土石器

第１章　　調査に至る経緯と調査の経過

県道善通寺府中線は中讃地域の主要地方道として、現在重要な役割を果たしている。古代の南海道もこれに近い位置に推定されており、歴史的由緒ある道路として、“府中線”という愛称のもと、広く県民に親しまれている。

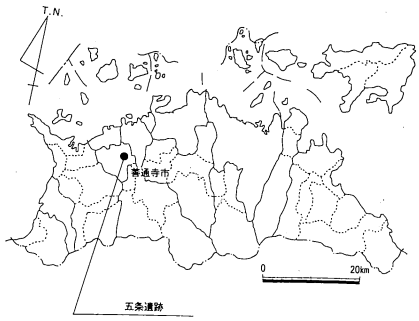
善通寺市原田町付近の当該路線は四国横断自動車道善通寺インターチェンジに近く、昭和63年同自動車道善通寺豊浜間の開通以来交通量が増加し交差点付近の混雑が目立つようになった。県善通寺土木事務所は混雑の解消を計るため、当該交差点の右折レーン増設等を目的とする部分拡幅工事を計画し工事を施工するに至ったものである。

平成５年５月、工事施工中に土器片等が出土したことから土木事務所と県教委の間で協議がもたれた。当該地は弥生時代前期の遺跡である五条遺跡に近接する箇所で、出土した土器もそれと同時期のものであることから、五条遺跡の一部であると判断された。その段階では工事の施工見通しが十分に固まっておらず、当面の工事範囲である370㎡（第２図Ａ地区）についての保護措置が必要とのことで合意し、遺跡発見の通知（57条の６）を経て、６月から７月に実働10日間で県教委が事前調査を実施することとなった。発掘調査は度重なる降雨に悩まされながらも土木事務所や工事施工者、また調査地に隣接する龍川駐在所等の協力を得て、無事終了した。

その後西側地区（Ｂ地区）の工事についての協議が改めてもたれた。その結果、①Ｂ地区の工事については水田耕作土を除去するに止め、床土上に盛土をして遺構面を保護する。②アスファルト舗装は施工するが、道路として使用せず、将来東方に拡幅工事を延長する場合は、改めてＢ地区を含めた保護協議を行う。③遺構面付近まで掘削が及ぶ恐れのある暗渠埋設箇所については工事中に県教委職員が立会する。以上の内容で合意に至った。

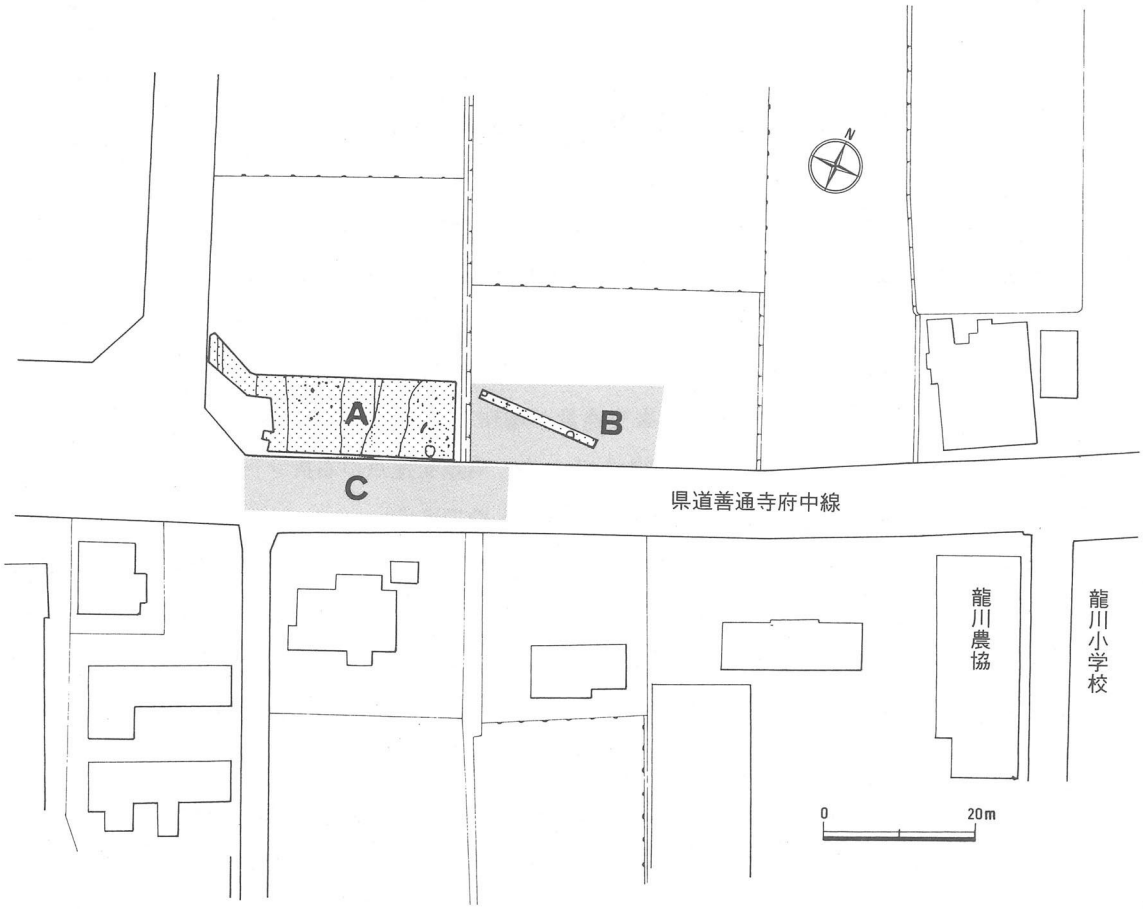
これにより善通寺土木事務所は周知の埋蔵文化財包蔵地内の土木工事等に関する通知（57条の３）を行い、県教委は9月に工事立会を行った。立会の結果、幅１ｍ、延長17ｍについて遺構等が露出したため、業者等の協力を得て緊急的に調査を実施し、記録を行った。

なお、現有道路部のＣ地区については当初路盤補強等による掘削が計画されていたが、アスファルト舗装の補修程度の工事に変更されたため、地下遺構等に影響を及ぼさないよう慎重に工事すべき旨の通知を行った。



第１図　五条遺跡の位置

調査の結果、従来から土器の出土が知られながら実態



第２図　平成５年度の工事範囲と調査対象地

が不明瞭であった五条遺跡の一部が明らかになり、貴重な資料が得られた。特に五条遺跡の広がりを推定する手がかりが得られたのは重要な成果といえる。出土遺物は28ℓ入りコンテナにして約30箱に及ぶ。

以下、Ａ地区で事前調査を実施した範囲をＡ調査区、Ｂ地区で立会調査を実施した範囲をＢ調査区として各々の調査成果を報告する。

なお整理作業は調査終了後、断続的に香川県埋蔵文化財センター等で実施した。現地調査、整理作業にあたってつぎの方々のご協力、ご教示を得た。記して謝意を表する次第である。
石村　守、井原康夫、井原義春、杉本　勝、笹川龍一、國木健司、木下晴一、森下友子
（敬称略）

第２章　　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

五条遺跡は善通寺市原田町下五条1025番地に所在し、県内最大規模である丸亀平野の西部にあって、金倉川の東岸に立地している。遺跡周辺は近年高速道路等の公共整備の充実が図られ、開発が進んでいるが、依然として田園風景が広がり、那珂郡条里の地割を田地として良く留めた箇所である。

阿讃山地に端を発し、満濃池を経て丸亀平野にいたる金倉川は、平野の西側を北流し、善通寺・丸亀を経て瀬戸内海に注ぐ。丸亀平野西側の地形は金倉川によってもたらされた扇状地堆積物によって形成されたもので、地表下0.5～5mに扇状地形成段階の礫層が認められる。礫層の出現層位は場所によって様相が異なり、現在の水田耕作土の直下等きわめて浅い層位で出現する箇所もあれば、深い層位に認められることもあり、過去の段丘面として把握できる箇所もある。礫層の上面は主として黄色系の粘土層で覆われ、ときにＡＴ火山灰層や旧石器包含層が確認できることがある。それらの多くは地表下１ｍ内外で確認できることが多く、平野の形成（平坦地化）時期は相当に古いことがわかっている。段丘は黄色系粘土層の堆積によりほとんどが埋没し、現在緩やかに北に傾斜する平坦な地形が広がって、条里型地割を良好に残している。

金倉川は、善通寺市与北町から原田町までの延長約３㎞の間において比高差約２ｍの段丘崖を伴う。当遺跡周辺の段丘崖は東岸に特に顕著で、崖下には氾濫源が広く認められる。崖から東700ｍには旧流路を示す低地域が北走することから、その間が細長い微高地となる。微高地の傾斜は１㎞で約５ｍ下降する緩やかなもので、丸亀市の旧海岸線近くまでその様相がたどれる。

五条遺跡はこの微高地上の平坦面に存在するものと考えられ、現標高は約22ｍである。

2．歴史的環境

旧石器時代

近年の調査で旧石器時代の遺構遺物が見つかっている。三条黒島遺跡では140点からなる石器ブロックが検出され、瀬戸内技法を反映した接合資料が抽出された。また、郡家田代遺跡ではナイフ形石器を中心とした石器群が出土た。これらは地表下50～80cmの弥生時代以降の基盤層である黄色粘質シルト層中に包含されるもので、当該丸亀平野の形成を考察する上で重要な資料であると共に、一括資料が少ない当県の状況にあっては旧石器文化研究において極めて重要な資料であるといえる。

縄文時代

当該五条遺跡において過去に黄色系シルト層中に縄文土器が包含されていることが知られていた。今回の調査では確認されなかったが、当該期の遺構遺物が周辺に埋没している可能性は高い。

周辺の状況としては、三条番ノ原遺跡で当該期と推定される石鏃製作跡が見つかっているほか、龍川四条遺跡では晩期後半凸帯文期の旧河道が検出されている。金倉川西岸では永井遺跡や弘田川西岸遺跡で後期の旧河道より多数の土器・石器が出土している。永井遺跡の打製石斧を主体とする石器組成は低地部集団の生業活動を示す興味深い資料である。

弥生時代

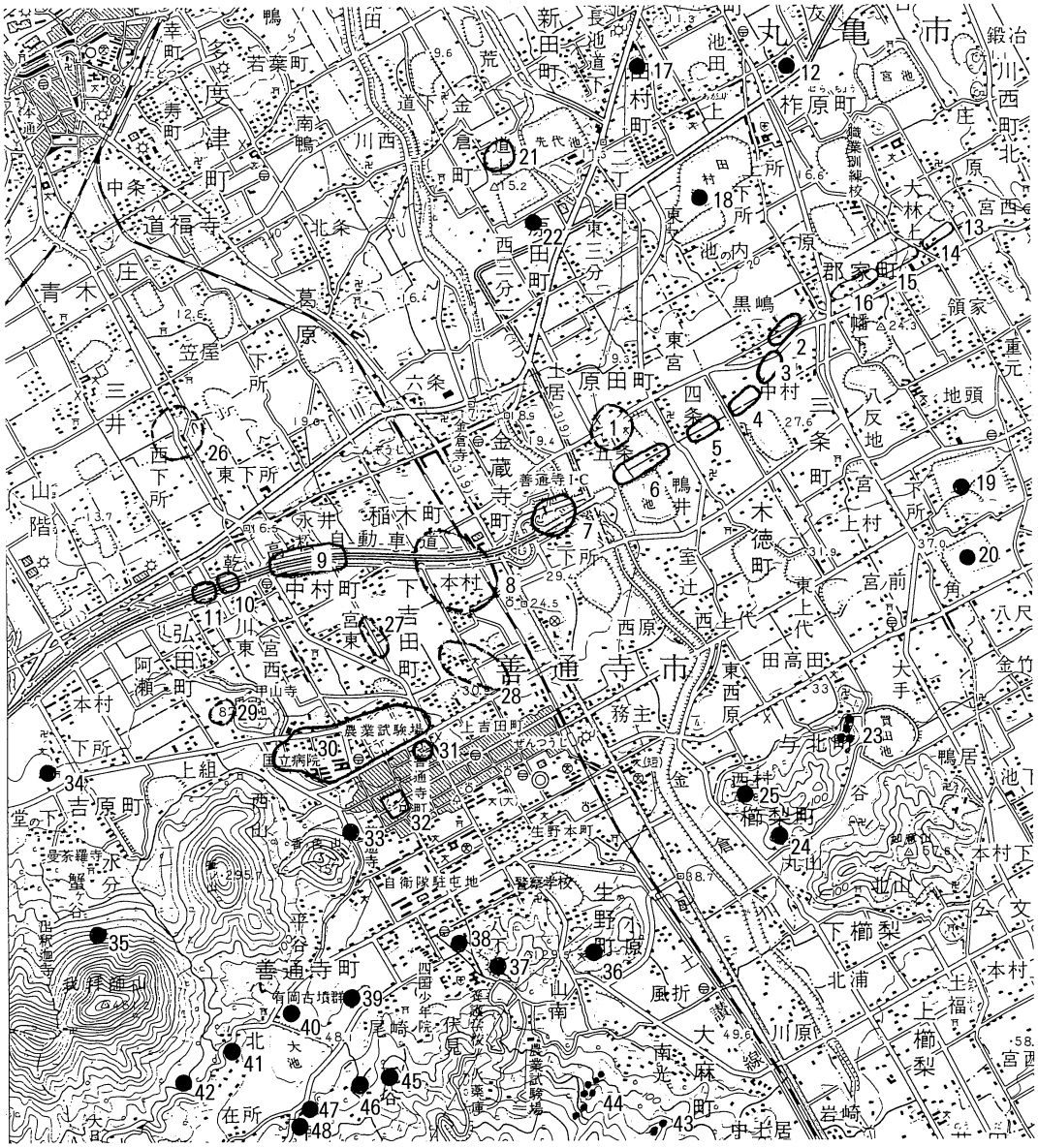
弥生時代の周辺の遺跡は遺跡数が多いこともさることながら、集落、墓、青銅器出土地等多様な様相を見せる。

（前期）

土器様相として多条沈線による文様帯を付属しない前期前半段階の遺跡としては、稲木遺跡A地区の旧河道、永井遺跡の旧河道上層より出土した土器群が相当し、外彎刃タイプの磨製石庖丁等が出土している。坂出市下川津遺跡では同時期の竪穴住居跡などが出土しており、今後周辺地区における集落遺構の出土が期待される。

多条沈線および複帯構成の櫛描直線文の甕形土器を特徴とする前期後半～中期初頭段階の遺跡は各所で確認できている。この段階の特徴としては、環濠を伴う集落の存在が指摘される。当該遺跡の南500mの地点で高速道路建設によって調査が実施された龍川五条遺跡では、南北60m、東西90mの二重の環濠を持つ集落のほぼ全容が明らかとなった。今回調査を実施した五条遺跡と時期的に重複し、近接した箇所に複数の集落が存在する状況は集落間の関係等を検討する上で重要である。また、周溝墓や木棺墓等の墳墓が出土しており、詳細については本報告を待つ必要があるが、今後注目される遺跡である。

丸亀市中の池遺跡は、金倉川東岸に立地する当遺跡と良く似た立地条件をもち、三重の環濠を持つ集落として著名である。なお東岸地区では他に三条番ノ原遺跡、三条黒島遺跡、郡家田



1	五条遺跡	（集落跡、弥生）	17	田村廃寺	（寺跡　、古代）	33	善通寺西遺跡	（包含地、古墳）
2	郡家原遺跡	（集落跡、弥生）	18	田村池遺跡	（包含地、弥生）	34	青龍古墳	（古墳）
3	三条黒島遺跡	（集落跡、旧石器）	19	宝憧寺跡	（寺跡　、古代）	35	大窪経塚古墳	（古墳）
4	三条番ノ原遺跡	（集落跡、弥生）	20	枡池遺跡	（包含地、弥生）	36	磨臼山古墳	（古墳）
5	龍川四条遺跡	（集落跡、中世）	21	中の池遺跡	（集落跡、弥生）	37	鶴ヶ峰４号墳	（古墳）
6	龍川五条遺跡	（集落跡、弥生）	22	平池南遺跡	（集落跡、縄文・弥生）	38	若宮八幡古墳	（古墳）
7	金蔵寺下所遺跡	（集落跡、古代）	23	鉢伏山古墳町	（古墳）	39	王墓山古墳	（古墳）
8	稲木遺跡	（集落跡、弥生）	24	陣山遺跡	（青銅器、弥生）	40	菊塚古墳	（古墳）
9	永井遺跡	（集落跡、弥生）	25	和雲神社古墳	（古墳　、古墳）	41	北原古墳	（古墳）
10	中村遺跡	（集落跡、中世）	26	三井遺跡	（集落跡、弥生）	42	北原シンエバエ古墳	（青銅器、弥生）
11	乾遺跡	（包含地、弥生）	27	九頭神遺跡	（集落跡、弥生）	43	寺田古墳群	（古墳）
12	西村遺跡	（包含地、中世）	28	石川遺跡	（包含地、弥生）	44	岡古墳群	（古墳）
13	川西北原遺跡	（集落跡、中世）	29	甲山北遺跡	（包含地、弥生）	45	瓦谷遺跡	（青銅器、弥生）
14	郡家田代遺跡	（集落跡、中世）	30	旧練兵場遺跡	（集落跡、弥生・古墳）	46	瓦谷１号墳	（古墳）
15	郡家大林上遺跡	（集落跡、近世）	31	仲村廃寺	（寺跡　、古代）	47	御館古墳	（古墳）
16	郡家一里屋遺跡	（集落跡、古代）	32	善通寺跡	（寺跡　、古代）	48	宮ヶ尾古墳	（古墳）

第３図　周辺遺跡分布図

代遺跡等で土器の出土が知られるが、いずれも散発的であり、集落を確認するまでには至っていない。

西岸地区においては環濠が確認された集落跡はまだ見つかっていないものの、遺構・遺物は各所で確認されている。多度津町三井遺跡では過去に多数の土器の出土が知られていたが、平成4年度の確認調査で3条の溝が検出され多数の遺物が出土していることから、居住域に近接した溝であることが推定され、集落に伴う環濠である可能性は高いものと考えられる。また、旧練兵場遺跡は弥生時代全般にわたる集落遺跡で当該地域の拠点的集落と考えられるが、平成5年度の発掘調査で当該期の袋状土坑が検出された。そのほか、甲山北遺跡、乾遺跡などで土器の出土が知られる。

なおこれらは前期後半に始まる集落が多い中でそのほとんどが前期末～中期初頭段階で終焉し、中期前半に継続しないという特徴がある。中期前半の遺跡の分布が今一つ明らかでないが、この段階の画期をどのように把握するか今後の課題である。

ちなみに、周辺の出土青銅器中には細形形式の武器形祭器あるいは外縁付紐より古い形式の銅鐸は今のところ知られていない。

（中期前半）

土器様相における凹線文出現以前の中期前半段階の遺構・遺物が確認されているのは旧練兵場遺跡の彼ノ宗地区で、土坑6基が調査されている。このほか矢ノ塚遺跡で集落形成が始まる。矢ノ塚遺跡出土の武器形土製品は当該期に所属する可能性が高い。また、天霧山南麓斜面に立地する月信遺跡は平成3年度に発掘調査が行われ、当該期の遺構・遺物が出土した。打製石剣や環状石斧の採集資料も紹介されている。この段階の遺跡は旧練兵場遺跡のように低地部の遺跡も存在するが、月信のように丘陵斜面部に立地する遺跡が出現していることは、中期後半の丘陵地を指向する集落立地に向かう萌芽的要素と考えられる。

青銅器関連遺跡として瓦谷遺跡で中細形銅剣4口、中細形銅矛1口、中広形銅剣1口、平形銅剣1口の一括埋納が知られている。また、我拝師山C遺跡出土の外縁付紐式流水文銅鐸は大阪府茨木市東奈良遺跡出土の2号鋳型で製作されたもので、大阪府豊中市桜塚銅鐸と同笵関係にある。

（中期後半）

土器様相として凹線文が文様の主体を占める中期後半段階の遺跡は先に触れたように、また、過去に指摘されたように丘陵地のものが多い。矢ノ塚遺跡、西碑殿遺跡、吉原火上山遺跡等の立地は当該地に限らず、県内各地域に共通する傾向である。矢ノ塚遺跡では方形掘り形の柱穴をもつ掘立柱建物が多数確認され、同じ傾向が近接する西碑殿遺跡でも確認できることから、この時期の特徴として把握できる。反面、低地部に立地する旧練兵場遺跡では依然として集落形成がなされていることも明らかになっている。なお、荘内半島の先端に近い詫間町紫雲出山

遺跡は標高350mの丘陵山頂部に立地しており、同様な立地を示す遺跡は県内で多数知られている。低地遺跡、丘陵斜面地遺跡、山頂部遺跡の3つの類型がどのような差異を持つものか、発掘調査事例が増加した現在、改めて検討する必要があろう。

青銅器関連遺跡としては、扁平紐式銅鐸一口が北原シンネバエで出土している。

（後期）

後期前半の遺跡は今のところ数が少ない。旧練兵場遺跡で竪穴住居跡が確認されているほか、矢ノ塚遺跡はこの段階まで集落が継続する。

後期後半にいたり、遺跡数が急激に増える。この段階に成立した遺跡は古墳時代初頭段階まで継続する傾向がある。

旧練兵場遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が40棟以上出土しており、周辺の石川遺跡、九頭神遺跡、稲木遺跡など周辺に推定される微高地の多くに集落が形成された様子がうかがえる。当該五条遺跡周辺においては、龍川五条遺跡で竪穴住居跡が検出されているほか、郡家原遺跡、龍川四条遺跡、田村遺跡等この段階から集落形成が始まる遺跡が多い。

これらの遺跡から出土する土器は、組成の上で供膳形態の比率が増加する汎西日本的な傾向に共通するものの、鉢形土器がその主体であることはこの地域の特徴である。また、後期前半までの土器の様相は瀬戸内海を挟んで対峙する吉備地方との共通性を各所に指摘することが出来るが、この段階に至るとその傾向が払拭され、吉備の上東系列とは相容れない単口縁の広口壷、甕等が主体を占めるようになる。同じ時期、高松平野を中心にいわゆる『讃岐系』と呼称された土器群が成立する。角閃石を含み茶褐色を呈する独特の胎土をもった、きわめて画一化された土器様式で、県内のみならず播磨・阿波地方などに多数搬出されており、注目されている。これらを含めて、当該期は讃岐地方の弥生文化の独自性がもっとも強く認められる段階である。

なお、青銅器関連遺跡として陣山遺跡、我拝師山遺跡A、同遺跡B、鶴ヶ峰西麓遺跡などで平形銅剣の一括埋納が知られる。いずれも形式的には新相を示す。平形銅剣は伊予、讃岐の両地方で全国出土量の8割方を占め当地域の特徴を示しており、先の土器様相の独自性の成立と同一歩調をとる点で興味深い。

墓制の上では、稲木遺跡で前方後方形周溝墓が出土しているほか、旧練兵場遺跡仙遊地区で人面線刻を持つ箱式石棺が出土し、王墓山古墳周辺に当該期の箱式石棺墓、小竪穴式石室などが出土している。また、稲木遺跡では後の古墳時代初頭段階で認められる積石塚の萌芽的形態と推定される積石墓が出土している。高松平野以東では円形周溝墓等の検出も近年相次いでおり、墓制は多彩である。

古墳時代

（古墳の分布）

前期に所属する古墳としては、大麻山中腹の標高405mという高所に位置する野田院古墳が全長46mの前方後円墳でこの地域の有力な勢力と考えられる。大麻山東麓にはこの他に大麻山経塚、大麻山椀貸塚、丸山１号など30～35mクラスの前方後円墳が集中する。これらは積石塚である点、埴輪を保持しない点等から在地的色彩の強い古式墳の一群といえる。

大麻山北方の独立丘陵周辺には鷲ノ山産石材による石棺が出土した磨臼山古墳をはじめ、北向八幡社古墳、鶴ヶ峰４号墳等の前方後円墳が所在する。いずれも盛土墳で、墳形等から考えると、先の積石塚前方後円墳に後出するものといえる。４世紀後半～５世紀前半代と推定されるが、この段階でも埴輪を持たない点で特異である。

中期大形円墳は吉原町青龍古墳、生野町生野鑵子塚古墳などが知られるが、詳細は明らかでない。弘田川を遡り、有岡の谷筋周辺には王墓山、菊塚、宮ヶ尾、北原などの有力墳が分布する。６世紀前葉の王墓山古墳は全長４３mの前方後円墳で、小口石積みの古式横穴式石室内に石屋形を造作し、金銅装の馬具や冠帽などが出土している。宮ヶ尾は６世紀末～７世紀の横穴式石室墳で、玄室奥壁に線刻壁画をもつ。

（集落）

善通寺西遺跡で５世紀前半代の流路から多数の土師器や木製品が出土しているほか、当遺跡仲村廃寺調査区や稲木遺跡において竪穴住居・掘立柱建物が見つかっている。これらは、６世紀後半代に所属し竪穴住居は竈を付設しているものが多く見られる。

歴史時代

（寺院）

白鳳期は周辺に宝幢寺跡、田村廃寺等の古代寺院が知られる。田村廃寺は、那珂郡柞原郷に所属し、標高10mの平地に立地、河原寺式、石川寺式鋸歯文縁複弁軒丸瓦、15葉素弁軒丸瓦などが採集されている。

（条里制）

平野に残る条里区割については高速道路建設等の発掘調査で成果が見られた。これによると、区割に伴う溝状遺構はもっとも古いもので９世紀ごろに相当し、この地域では律令後、やや遅れて条里制が施行された可能性が指摘されている。

ただし、善通寺市街地の南側、善通寺西高校付近の生野本町遺跡では白鳳期から奈良前期にかけての方画地割と建物跡等が出土している。後の条里区割の方向性と一致し、大形の建物が想定される点において、今後注目すべき遺跡と思われる。

第3章　調 査 成 果

今回調査対象となったのは事前調査A地区370㎡、立会調査B地区20㎡である。調査の結果弥生時代前期後半から中期初頭段階の溝、建物等の集落の一部を検出することができた。出土遺物は土器および石器でコンテナ約30箱を数える。

以下地区ごとにその詳細を報告する。なお遺構の記述を先行し、遺物については後にまとめて記述する。

1）A地区

大溝3条、溝2条、土坑1基、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物1棟、他柱穴20個ほどを検出した。出土遺物はほとんどが大溝より出土したものである。

【遺構】

大溝1（第5図の網目部分）

幅約5m、深さ0.6mの段面逆台形状の溝である。概ね北方向に走行しやや東にカーブしながら、弧状にめぐる様子が窺われる。埋土の上部と調査区内の南側については大溝2との重複によって切られる。

埋没状況は、上層に細かい土器片やサヌカイト小形剝片等を濃密に包含する灰色系のシルト層（第5図13）が存在し、細砂がラミナー状に観察できるなど、流水による堆積状況を示している。大溝2が掘削される前に泥沼状となった当該溝の窪地に断続的に水が流れ、新たに竣せつされないまま放置され、次第に埋没した状況が推定される。この層位に含まれる上記の遺物は中層の土器と時期差はなく、本来、中層に包含されていたもののうち、動きやすい大きさのものが、流水によって遊離し再堆積したものと考えられる。中層は大形の土器片が多く含まれる黒色系の粘質土層（第5図14）である。石器の主要器種が揃う点、礫・炭化物等を多く含む点から居住域に近い位置にあり、廃棄場として機能したものであろう。

下層は遺物をほとんど含まず壷形土器片を1点図化できたにすぎないが、腹部に4条沈線を施す形態のものは中層出土の壷形土器に比べ、やや古相を示す。埋土は灰色系の粘土層（第5図16）で、周辺基盤層の黄色系シルトのブロックを多量に含んでおり、人工的に埋めた様子が窺える。また、左右両側に特に顕著に基盤層ブロック（第5図15）があり、掘削後間もない段階に両肩の崩落があったかあるいは、土堤状の遺構が存在したか、いずれかの状況が想像される。

以上、大溝1の変遷としては、溝の掘削後、溝の機能する期間は土器等の投入が行われず、溝の機能は意図的に埋め戻すことにより停止する。しかし完全に埋没したものでなく、

窪地として残った溝跡はその後近接して設けられた居住遺構に伴う形で廃物場として機能したものと推定できる。

大溝 2（第 5 図）

幅約 4 mの溝である。N30°Wで概ね北方向に直線的に走行する。埋土は灰色系の砂層で全体的にラミナー状の堆積状況が見られ、流水状態にあったことが窺われる。特に、下面は流水による浸食で凹凸が激しい。大溝 1 を切り込んで掘削されており、調査区北側では大溝 1 と方向を違えるが、大溝 1 の上部にはこの溝と同様の砂層が堆積しており、この方向への流水もあったものと推定できる。

出土遺物は、大溝 1 より混入した土器が大勢をを占めるが、埋土の上層では古墳時代前期の高杯脚部が 1 点出土していることから、溝の所属時期は弥生時代前期以降、古墳時代前期までの間にある。

大溝 3（第 5 図）

幅 4 m、深さ0.5mの溝である。概ね北方向に走行するが、大溝 1 とは35°ほど西に振れる。埋土は上層と下層に分かれ、上層は基盤層ブロックを大量に含む意図的に埋積された土層で、遺物はほとんど出土しない。上層を除去した段階で下層との層界付近に大形の土器片が多く見られた。調査区南側で一部窪地があり、その箇所では特に土器の集中が見られた。

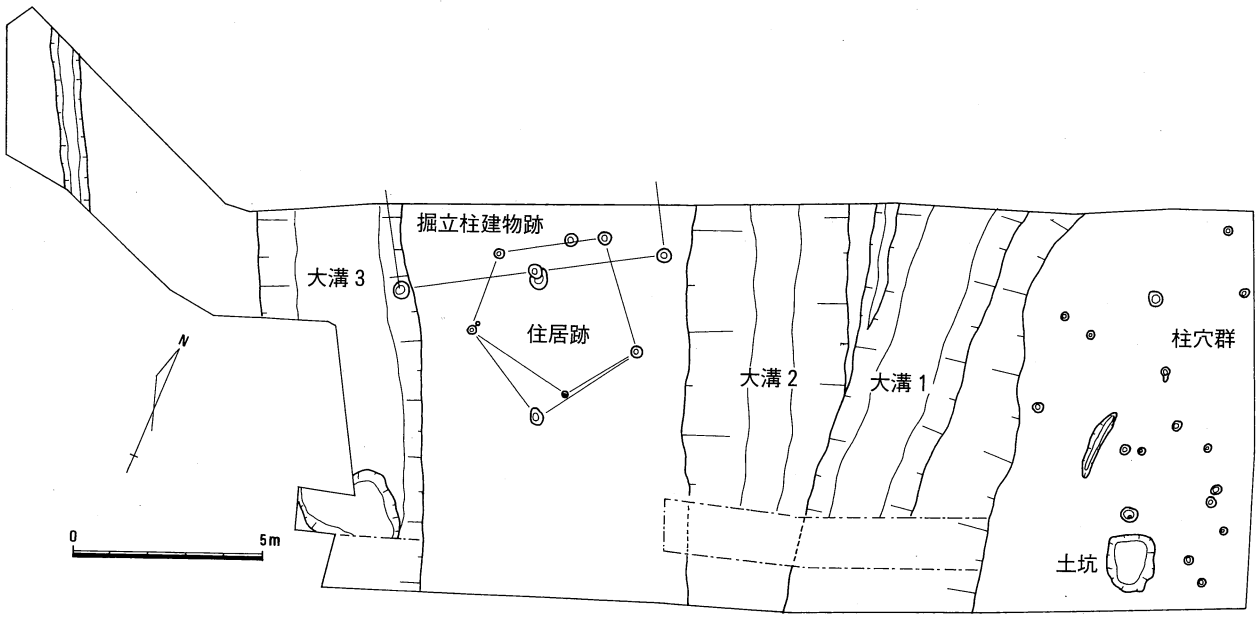
大溝 3 は大溝 1 と異なり、確認した遺構面までは少なくとも完全に埋め戻されている。遺構面自体がかなり削平されていることを考慮する必要はあるが、掘立柱建物の柱穴が大溝 3 の埋土を切り込んで掘開されていることから、溝の機能停止段階で完全に埋め戻された可能性が高い。

住居跡（第 6 図）

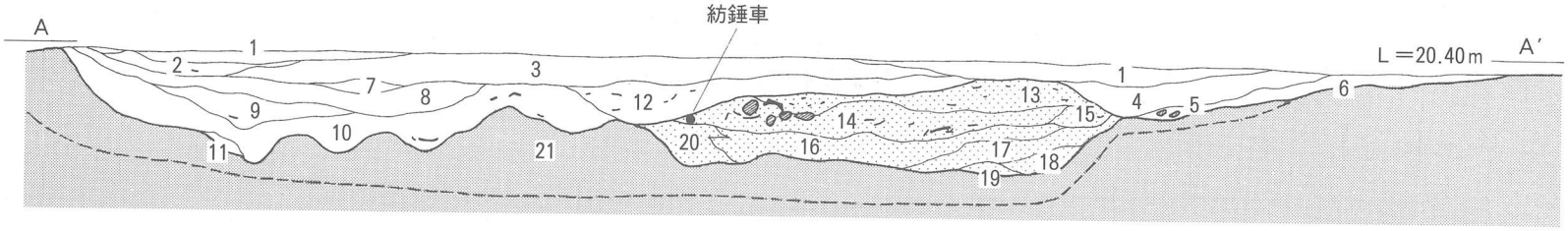
大溝 2 と大溝 3 の間に位置する柱穴群である。P22～P27が相当する。いずれの柱穴も20cm未満と浅く、上面をかなり削平された状況である。図化できる土器は出土していないが、暗褐色系の埋土を有すること、大形砂粒を含む土器片が出土していることなどから、弥生前期に所属する可能性が高い。

各柱穴の間隔、角度は次の通りである。

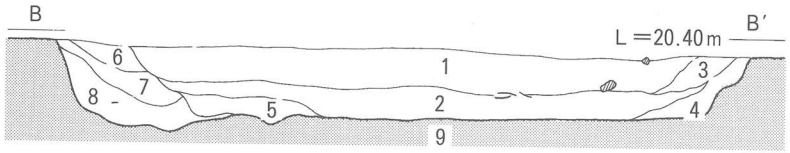
	距離		角度	
P－22	2.8m	P－23	120°	P－24
P－23	2.2m	P－24	105°・125°	P－25・P－26
P－24	3.0m	P－25・P－26	110°・95°	P－26
(P－25	2.2m	P－27	105°	P－22)
P－26	3.0m	P－27	110°	P－22
P－27	3.0m	P－22	100°	P－23



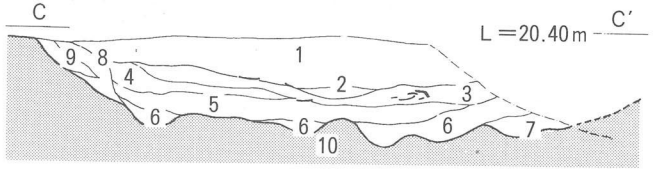
第 4 図　A 地区遺構配置図



1	暗灰色粘土	（1㎝粒の黄色土ブロック混）	大溝2
2	灰色粗砂	（土器片少量）	大溝2
3	灰橙色砂質シルト	（鉄分多量沈着）	大溝2
4	灰色シルト質粗砂	（鉄分沈着）	大溝2
5	灰色砂質シルト	（礫・土器片含む）	大溝2
6	灰黒色粘質シルト	（黄色土ブロック混）	大溝2
7	灰色粗砂	（黄色土ブロック多混）	大溝2
8	灰色砂質シルト	（鉄分沈着）	大溝2
9	灰白色中～粗砂	（ラミナー状の堆積）	大溝2
10	灰黄色粗砂混じりシルト	（鉄分沈着）	大溝2
11	灰色粘土		大溝1
12	灰色砂質シルト	（鉄分沈着土器片多）	大溝1
13	灰黒色粗砂	（土器片多）	大溝1
14	灰黒色粗砂ブロック混じり粘質シルト	（粘性強・大形土器片含）	大溝1
15	14に同じ	（黄色土ブロック混）	大溝1
16	淡灰黒色粘土	（黄色土大型ブロック混）	大溝1
17	灰色粘土	（黄色土ブロック混）	大溝1
18	灰黄褐色粘土	（黄色土・褐色土ブロック混）	大溝1
19	灰黄褐色粘土	（黄色土ブロック混）	大溝1
20	暗灰黄色粘土	（黄色土・褐色土ブロック混）	大溝1
21	黄灰色砂質シルト	（基盤層）	大溝1



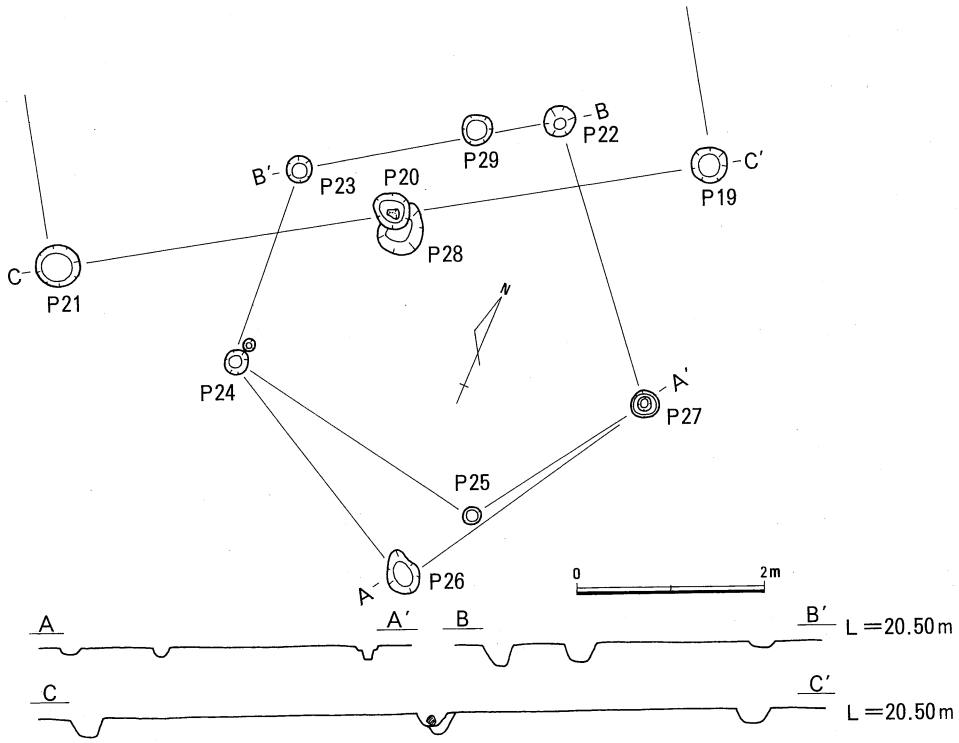
1	淡灰茶褐色砂質シルト	（黄色土ブロック混）
2	暗灰色砂質シルト	（粘性強・黄色土ブロック混）
3	濁黄灰色砂質シルト	（黄色土大型ブロック混）
4	淡灰色砂質シルト	（黄色土・灰色土ブロック混）
5	灰色砂質シルト	（黄色土小型ブロック混）
6	濁黄灰色砂質シルト	（褐色土塊少量混）
7	黒褐色粘質シルト	（黄色土小型ブロック混）
8	淡灰黄白色砂質シルト	（少量の灰色ブロック混）
9	明黄色砂質シルト	（基盤層）



1	淡茶褐色砂質シルト	（黄色土ブロック多混）
2	濁茶褐色砂質シルト	
3	暗灰色砂質シルト	（粘性強・土器片多）
4	灰色砂質シルト	（黄橙色土ブロック少量混）
5	灰色シルト質中砂	（黄色土小型ブロック混）
6	灰色中砂～粗砂	（ブロック状シルト混）
7	暗灰色砂質シルト	（黄色土ブロック混・炭混）
8	濁黄橙色粘質シルト	（鉄分沈着・黄色土ブロック多）
9	濁黄灰色粘質シルト	（黄色土ブロック多混）
10	明黄橙色中～粗砂	（基盤層・湧水あり）

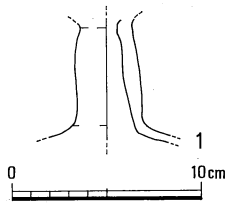
0　1m

第5図　大溝1～3断面図



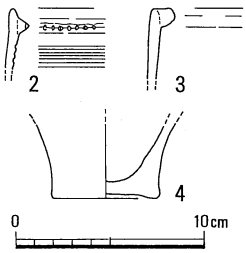
第6図　竪穴住居跡・掘立柱建物跡実測図

これらは概ね五角形状に配列されており、住居を構成する主柱穴である可能性が考えられる。P－25・P－26は近接した箇所にあり、いずれかは建て替え等によって新たに掘開された柱穴であろう。P－29も同様である。



第7図　大溝2出土土器実測図

住居の構造として竪穴住居、平地式住居のいずれかを判断するのは難しいが、柱穴群の中央やや北寄りに不定形土坑（P28）があり、掘立柱建物の柱穴に切られている。埋土中には少量の炭化物が含まれていた。位置的にみて当該柱穴列に関連するものと考えられるので、これが炉跡と考えると、竪穴住居の可能性が高い。しかし、P－28は、掘立柱建物のP－20の据え換え等による柱穴の可能性あり、厳密な意味で構造を判断するのは難かしい。



第8図　A地区土坑出土土器実測図

掘立柱建物（第6図）

住居跡に一部重複する3個の柱穴列である。P－19～21が相当する。柱穴間隔はいずれも3.5mと等しい。P－21は大溝3が埋没した後、その埋土を切り込んで掘開される。深さは20～25cmである。図化できるものはないが、弥生土器小片が出土している。埋土は褐色系。

調査区外の北側にさらに広がっているものと推定され全体の規模は確認できない。しかし、香川県内においてこれまでに確認された弥生期の掘立柱建物の規模と構造を検討すると、

・梁間が４ｍを大きく越えるものはない。

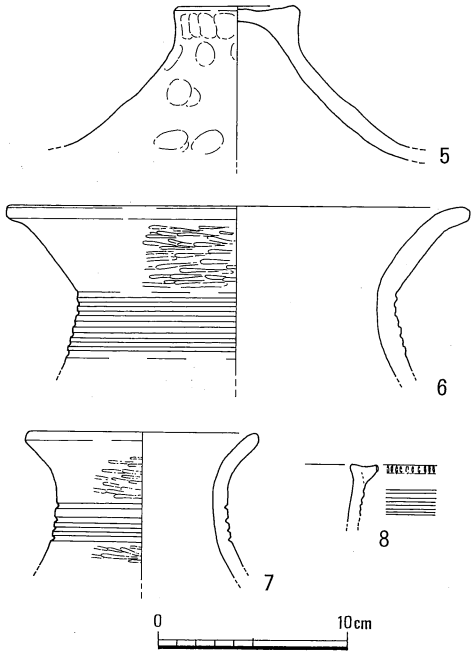
・桁行は２ｍから７ｍに収まる。

・梁間に対して桁行の長い、細長形状のものが多い。

・梁間１間、桁行２間のものが最も多い。

などの特徴を挙げることができる。

したがって、当該遺構についてはこれまでの確認例を参考にして類推すると、桁行２間（７ｍ）で梁間１間（２～４ｍ）の掘立柱建物である可能性が最も高いと言えよう。

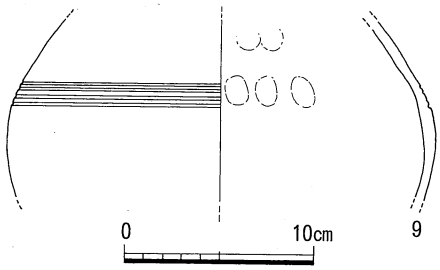


第９図　大溝３下層出土土器実測図

土坑、柱穴群（第４図参照）

大溝１の東側に多くの柱穴および土坑１基が所在する。柱穴は直径20cmほど、深さ25cmほどのものが多い。埋土は暗褐色系の粘質シルトでマンガン粒が沈着する。埋土中には弥生土器小片が包含される。また、石鏃を出土したものもある。これらは幾つかのものが組み合って竪穴住居なり掘立柱建物なりを構成するものであろうが、前項のものと異なり、一カ所に複数が重複している状況であり、抽出して把握するのは困難である。

土坑はやや乱れた形状の方形土坑で一辺約130cmをはかる。深さは約15cmで断面は浅い皿状を呈す。埋土中には焼土・炭化物等が含まれており、住居等に伴う炉跡の可能性が高い。埋土中より土器片が出土しており、甕形土器口縁部１点がある。



第10図　大溝１下層出土土器実測図

【遺物】

1．土器

土器はいずれも器表が剝落し、器面調整を確認できるものは少量である。沈線文等の文様自体も、剝落により不明のものが少なくない。

大溝１（第10～12図）

土器は上層出土のものと中層出土のものに分けて取り上げている。遺構埋土の観察による埋没状況の復元から見ても、また、土器の様相から見ても両者に大きな違いは見いだせない。しかし、下層出土の壷形土器胴部片は４条の沈線文をもつもので、単体では判断しにくいが、中層より古い時期のものである可能性がある。

壷形土器

口縁部から頸部にかけての破片が上層で21点、中層で２点出土している。胴部破片は上層で10点、中層で2点出土している。甕形土器に比べて残りが悪く、文様構成が十分に確認できないが、沈線、削出凸帯、貼付凸帯、櫛描のいずれの文様も観察できた。

数量の多い上層では、口縁で沈線文が８点と最も多く、次いで貼付凸帯が４点、そして削出凸帯が少量存在する。沈線は４条以上のものが大勢を占める。貼付凸帯は多条のものがあまり確認できないが、胴部片を参考にすると本来存在した可能性が高い。削出凸帯は。Ⅰ種、Ⅱ種ともに確認でき、Ⅱ種は3条以上の多条沈線を伴う。

胴部片では貼付凸帯が多数を占め、多条化するものが多い。櫛描文は直線文と波状文が交互に組み合わさるもので、１点のみ出土している。

甕形土器

口縁部の破片が上層で79点、中層で25点出土している。口縁部形状に基づき次の５類に分類した。

如意状	口縁部が緩やかなカーブを描いて外反するもの
凸帯１	直口の口縁端部に断面三角形の凸帯を貼付るもので、凸帯の先端が水平か、やや下向きのもの
凸帯２	直口の口縁端部に断面三角形の凸帯を貼付るもので、凸帯の先端が上向きのもの
凸帯３	直口の口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼付るもの
Ｌ字	端部付近で強く折り曲げ、水平もしくは下向きに収めるもので、器壁の肥厚を伴わないもの

このうち凸帯１、凸帯２については、分類しづらい中間的様相のものも存在する。基本的な両者の違いとして凸帯の下側を強く横ナデし、凸帯下側の粘土接合痕を消し去るか否か、という貼付技法に関わるものと判断できる。すなわち、凸帯２は凸帯下側を丁寧に仕上げることに

より、自ずと凸帯が上向きになる。

上層出土のものは圧倒的に凸帯1が多く、60点を確認した。如意状（15）の比率は約1割である。口縁部下に施される文様は沈線文（19・24）、櫛描文（16・17・18）がある。沈線は10～11条が多く、また文様帯の下位に刺突文を施すもの（18・19）が目立っている。

中層出土のものは凸帯2が多く約5割、次いで凸帯1が約3割である。文様は上層と変わりなく、多条沈線（27）や複帯構成の櫛描文（26・28）がある。

鉢形土器

（21・22）は口縁部の形状等は甕形土器と変わるところはないが、口径と胴部のカーブから鉢形土器の可能性が高い。甕形土器と分類したもののうち幾らかは鉢形土器である可能性はある。

高坏形土器

（25）は中実の高坏形土器脚部片で、高坏形土器はこれ1点のみである。

甕形土器蓋

（32）は形状から甕形土器蓋と考える。外面に縦方向の篦磨きが残る。

甑

（37）は甕形土器の底部に焼成後穿孔を加えた甑。

底部

非常に多くの底部片が出土している。安定した大形の平底が圧倒的に多い。そのうち（33～36）はやや上底気味の器形を呈す特異な一群である。（36・38）は蓋の可能性はあるが、（33・34）は甕形土器の底部と考えてよい。

大溝3（第9・13図）

壷形土器

口縁部～頸部の文様は沈線2点、削出凸帯。Ⅰ種1点、削出凸帯Ⅱ種少条1点、貼付凸帯1条1点である。胴部は沈線2点、削出凸帯Ⅱ種少条1点。櫛描文は見られない。

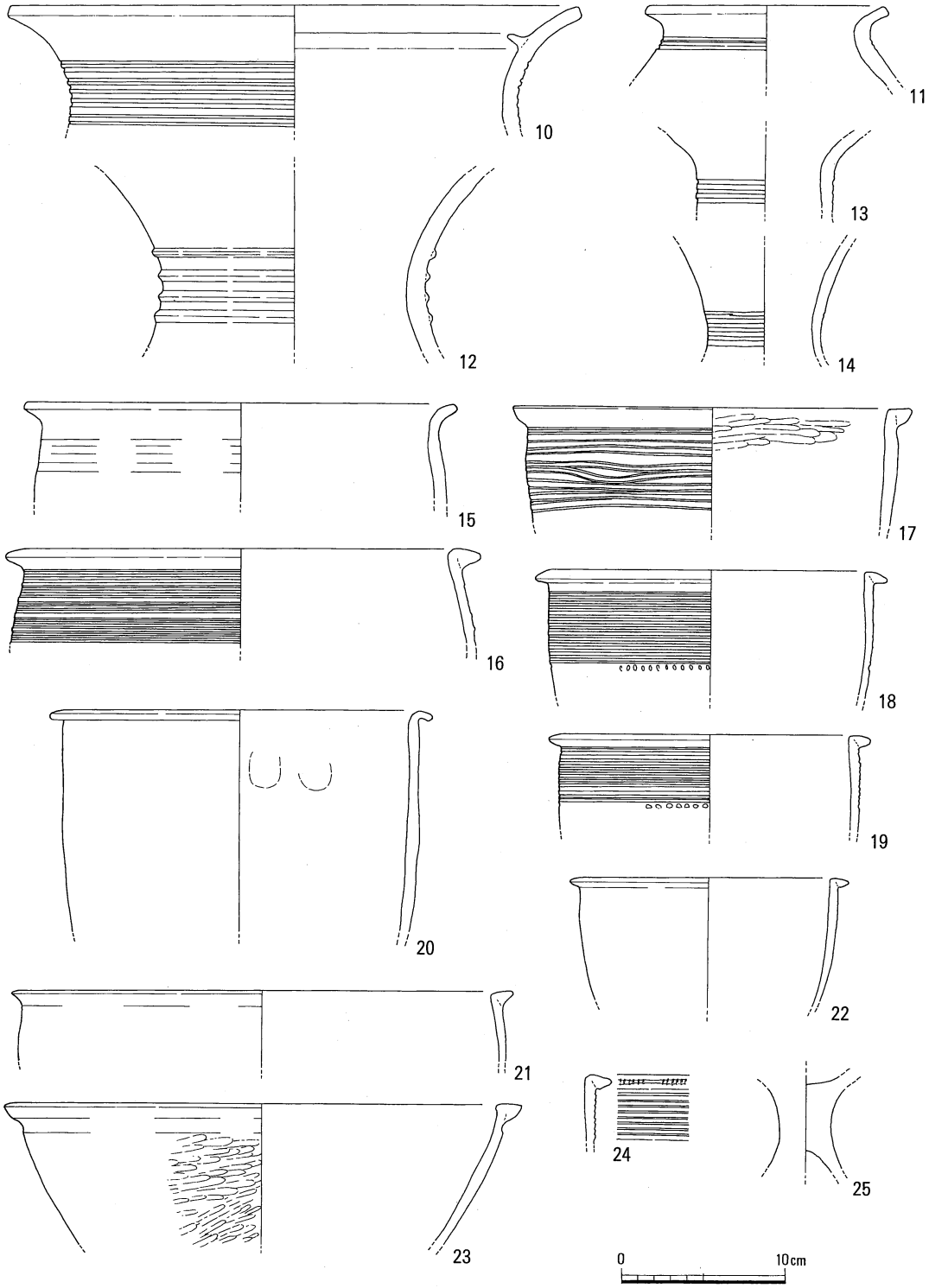
（39・40）は口縁の外反が弱い。（50）は胴部が球形大形のもので、頸部に1条の貼付凸帯を持つ。

甕形土器

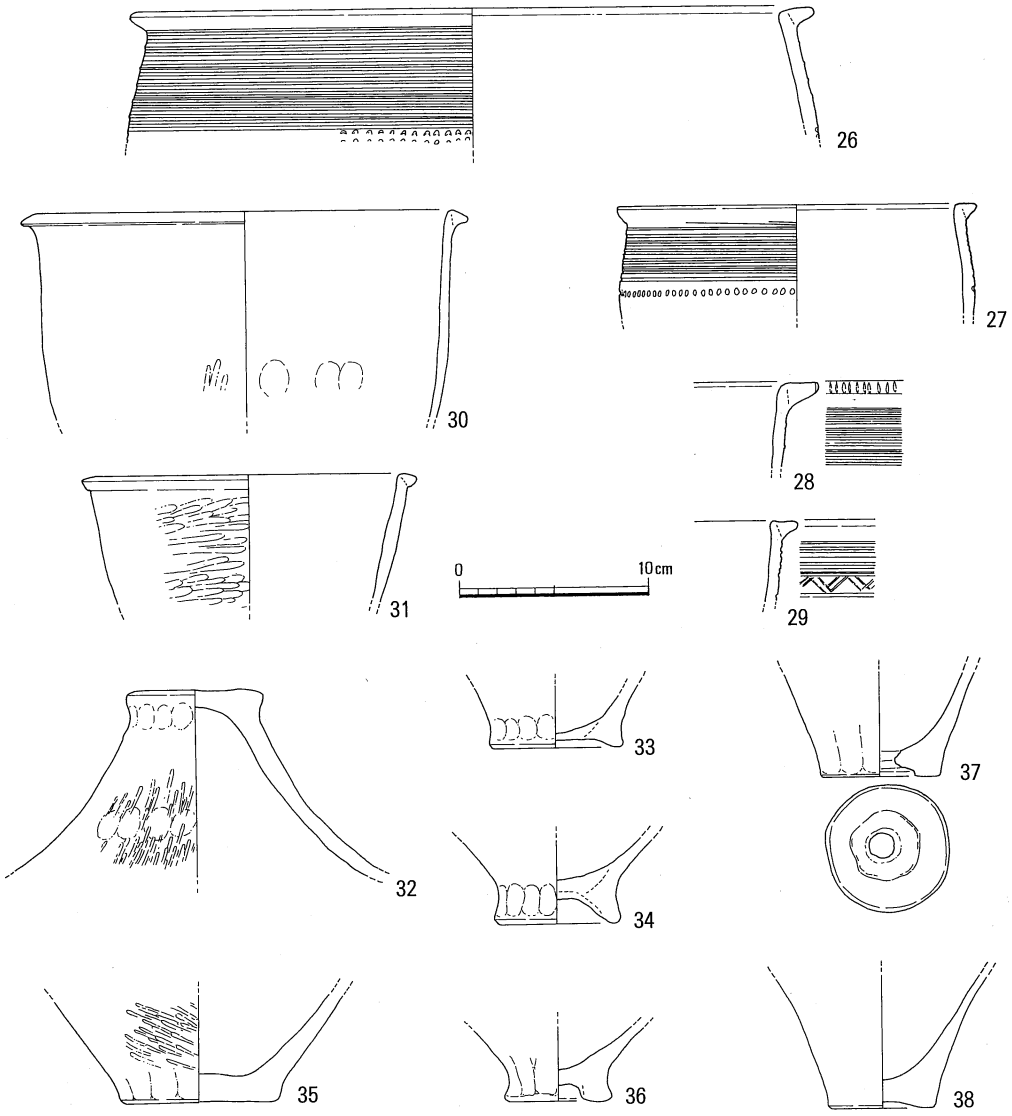
口縁部は如意状が多数派で12点中8点を占める。文様は5～11条のものが半数を占め、そのうちほとんどが、5ないし6条であり、大溝1と対照をなす。櫛描文は見られない。

蓋

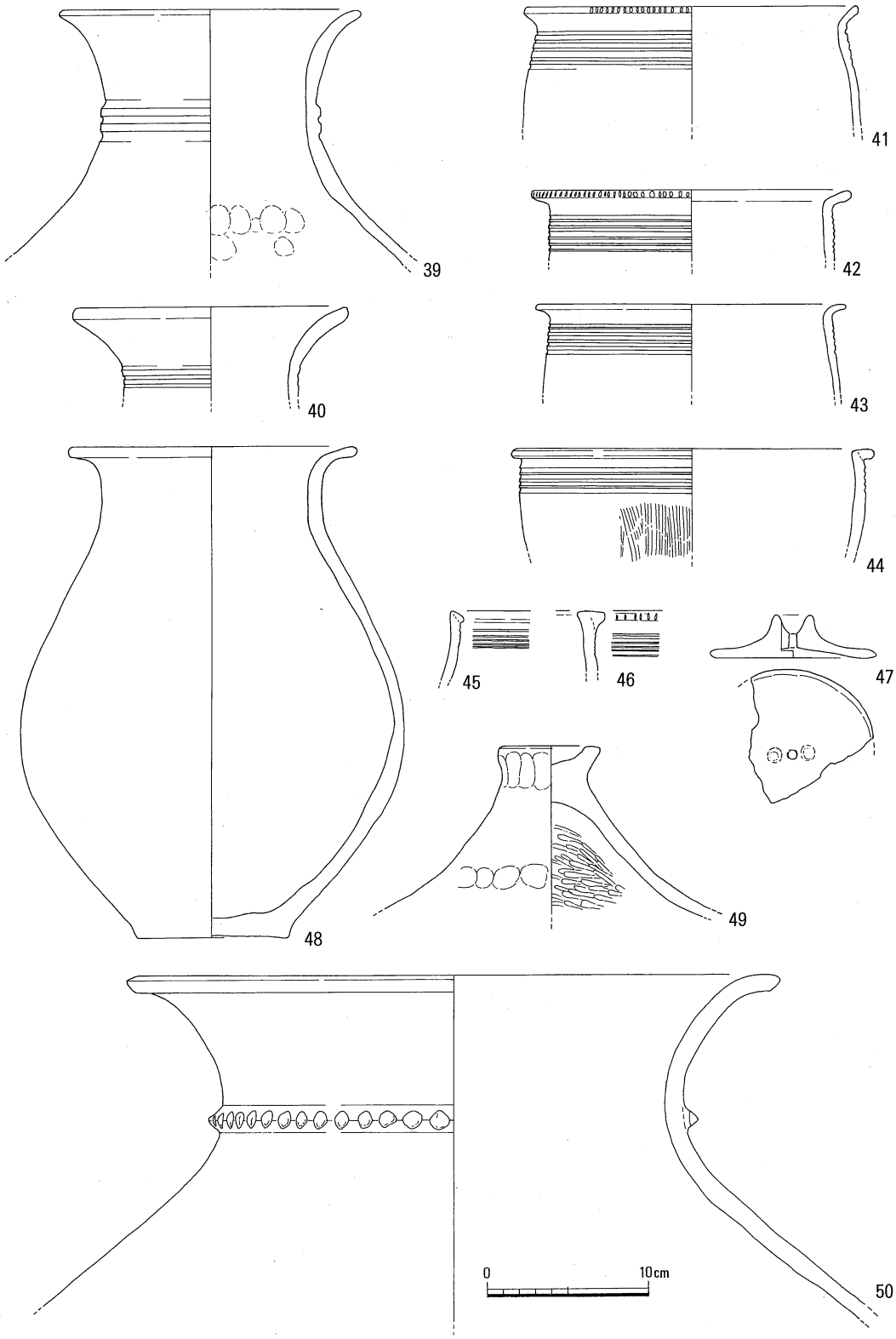
甕形土器蓋（49）、壷形土器蓋（47）がある。



第11図　大溝１上層出土土器実測図



第12図　大溝１中層出土土器実測図



第13図　大溝３上～中層出土土器実測図

2．石器（第14～27図）

当遺跡より出土した石器、剝片類は、コンテナ（28 l 入り）約 3 箱に及ぶ。調査面積が狭い割に多くの石器・剝片類が出土している。ただし、その多くは大溝 1 より出土したもので、その他の遺構から出土した製品としてはA地区土坑の石鏃が 1 点あるのみである。大溝 3 は、前期後半古相の土器が比較的多く出土したものの、石器類に関しては、剝片類が少量出土したのだけで、製品が 1 つも含まれないことは、特筆すべき点である。

大溝 1 より出土した石器は、土器と同様に上層出土のものと中層出土のものに分けて取り上げている。ここでは便宜上、それらを分割して報告するが、遺構説明において述べたように、本来同じ時期に堆積したものが、後の流水等によって上下に分離したものと考えられるため、一括して把握するのが適当と考える。

石器の組成上の特徴としては、スクレーパー類が多い点、石斧類が少ない点等があげられる。また、打製石斧が一定量存在している点は縄文的組成の残存形態として興味深い。

以下、器種ごとにその説明を述べる。

石鏃

上層で20点、中層で3点が出土している。形態は、凹基がほとんどで、凸基は 1 点を数えるにすぎない。サイズは土坑出土を含めた完形15点で検討すると、11点が長さ 2 cm以内に収まり、2 cmをこえるものとしては柳葉形の凸基のもの（79）および土坑出土の凹基（51）があり、その他は未成品と判断できるものである。概して小形である点を特徴とする。

石錐

上層で 5 点、中層で 1 点を確認した。錐部と頭部の形態に注目すると、頭部と錐部の境が明瞭で錐部が細長い形態と推定されるもの（85）、全体が涙滴形を呈しその尖端に錐部が作り出されるもの（57・82）、頭部と錐部の境が明瞭でなく、ほぼ一定の幅をもつ棒状のもの（83・84・155）などに分けられる。サイズは長さ 3 cm前後のもの（57・82・83・155）と 5 cmを越えると推定されるものがある。

楔形石器

平行する上下 2 辺に階段状剝離が観察でき、幅が 5 cm以内のものを対象とした。これらは左右いずれかに裁断面をもつものが多い。また、使用によって剝離された剝片は多数認められるが、製品としては素材の表裏両面が残存したものに限定している。

厚さが 1 cmを越える厚手のもの（87・88・158）と、1 cm未満の薄手のものがある。

石庖丁

合計17点確認した。そのうち磨製品が1点、半磨製品が1点含まれる。(63) は結晶片岩を素材とする磨製石庖丁で、細長の長方形状を呈す。裏面が剝落するが、遺存部の厚さからみて両刃と考えられる。穿孔部の残りは悪いが、直径約0.5cmと推定される。表面の研磨は粗雑である。(97) は風化が進行した安山岩を素材とし、粗割によって形状を整えたのちに刃部のみ研磨して付刃する半磨製品と評価されるもので、一端に抉りを認める。

打製石庖丁は杏仁形（曲背曲刃)、直線刃半月形（曲背直刃)、長方形（直背直刃）に分けられ、外湾刃半月形（直背曲刃）は認められない。一端に抉りを入れるものが多いが、抉りを持たないものは、杏仁形に2点（61・96)、直線刃半月形に1点（157)、長方形に1点（159）認める。刃部に摩滅痕をもつものが8点ある。背部はいずれも敲打による刃潰しを認める

スクレーパー

楔形石器、石庖丁のいずれにも該当しない加工されたサヌカイト製剝片石器を一括してスクレーパーとして報告する。なお、楔形石器同様素材の表裏両面が遺存するものに限定している。これらは形状・大きさともに多様である。形状と調整加工により次のように分類したが、必ずしも合理的分類とは言いがたく、再検討の余地を残す。

類型	形状	調整加工	遺物番号
A	対向する辺が平行しない	刃部と背部の区別が明瞭	99～110・165・191
B	対向する辺が平行	刃部と背部の区別が明瞭	111～124・164・166
C	不定形	折損した剝片、調整剝片の再利用	125～137・167～175

調整加工において背部は敲打による刃潰しを認めるものが多い。また、刃部の一部あるいは側縁の一部に抉りをいれるもの（133・173・174）がある

打製石斧（石鍬）

サヌカイト製のもの3点、安山岩製のもの5点がある。長さ10～15cm大のものが多く、ほとんど短冊形である。(179) のみバチ形を呈する。

(176) は幅10cm以上で、半折するが全長は20cmをこえるものと推定される。サヌカイト製大形石鍬である。

磨製石斧類

太形蛤刃石斧は3点あり、そのうち（143・182）は薄手、(181) は厚手である。

柱状片刃石斧は刃部が遺存するもの2点（146・183）と基部の破片1点（147）がある。(147)

は非常に不明瞭な抉りが確認できる。

扁平片刃石斧は存在しない。

磨石・凹石・石皿

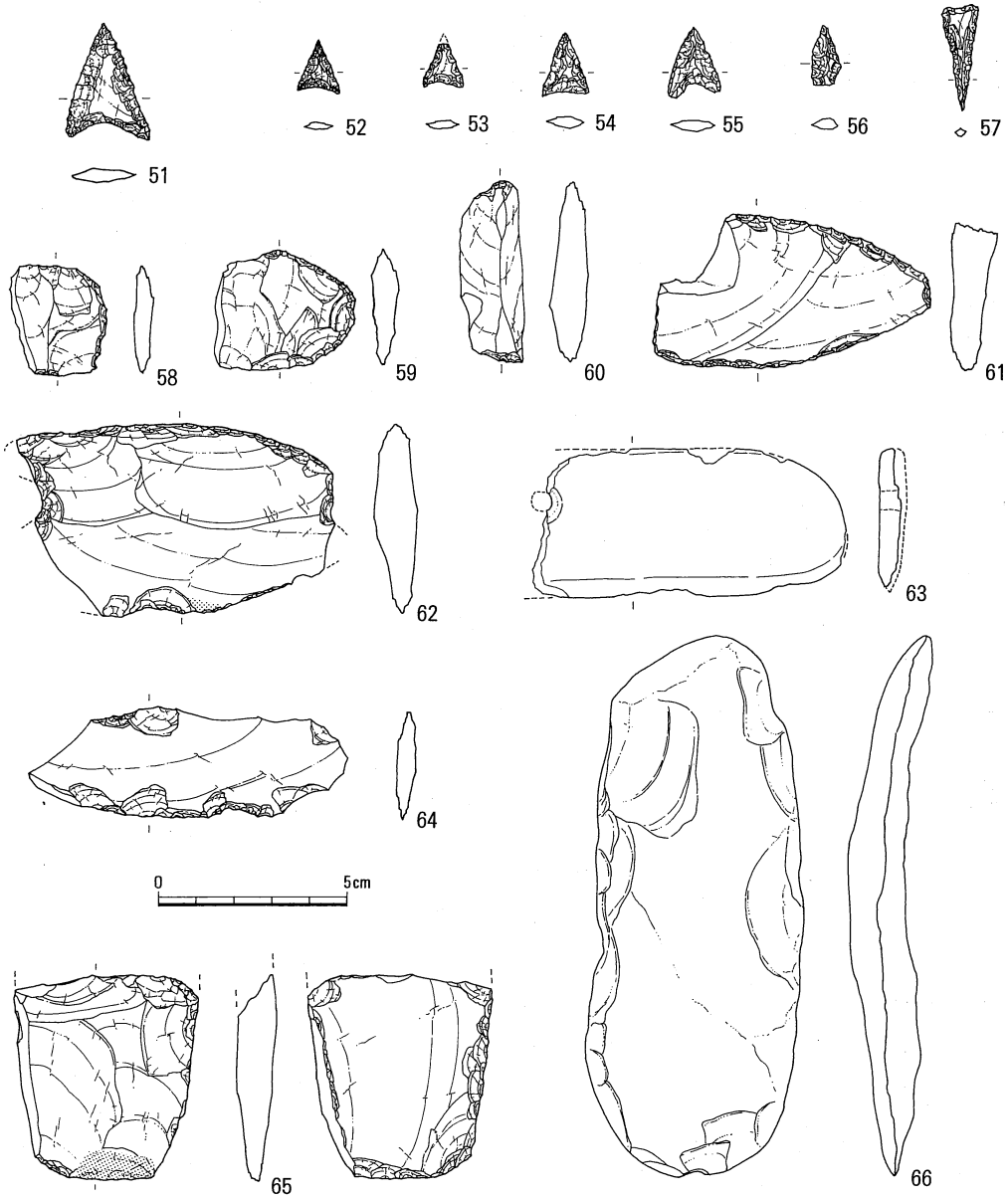
目の粗い砂岩を利用した調理具類である。直径10～15cmの円形・楕円形で厚さ5cm前後のものが多く、表裏両面に直径3～4cm程度の凹みをもつ。これらは凹石と分類できる。周縁には例外なく敲打痕があり、磨痕は見られない。なお、凹みの形状として半円球状に凹むものと、数条の条線を留めながら凹むものの2種類がある。

このほか5cm程の角丸のサイコロ状を呈する敲き石や長さ30cmを越える石皿、さらに凹石と同様のサイズで敲打痕がなく全体が摩耗する磨石がある。

その他

方柱状の砥石（硬質砂岩）、石核（サヌカイト）などがある。

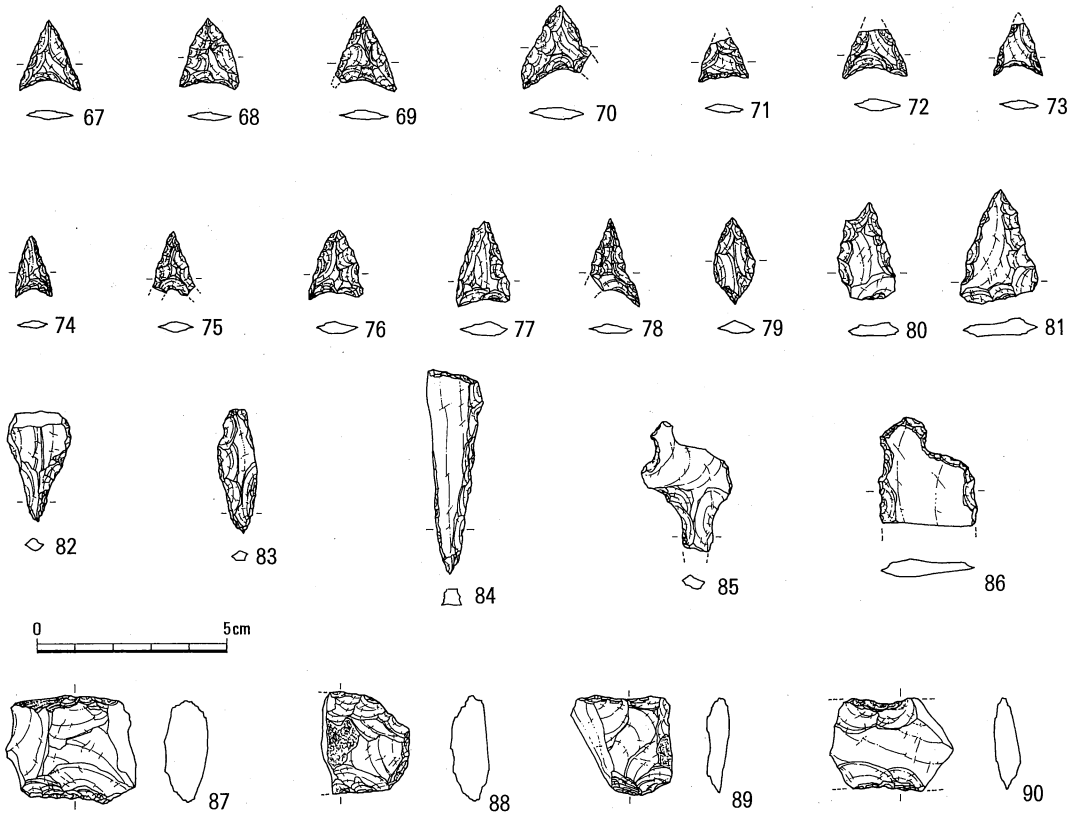
石製紡錘車が1点出土している。直径5.5cm、厚さ0.6cmの薄手のもので安山岩製である。



第14図　A地区土坑・大溝1上層出土石器実測図(1)

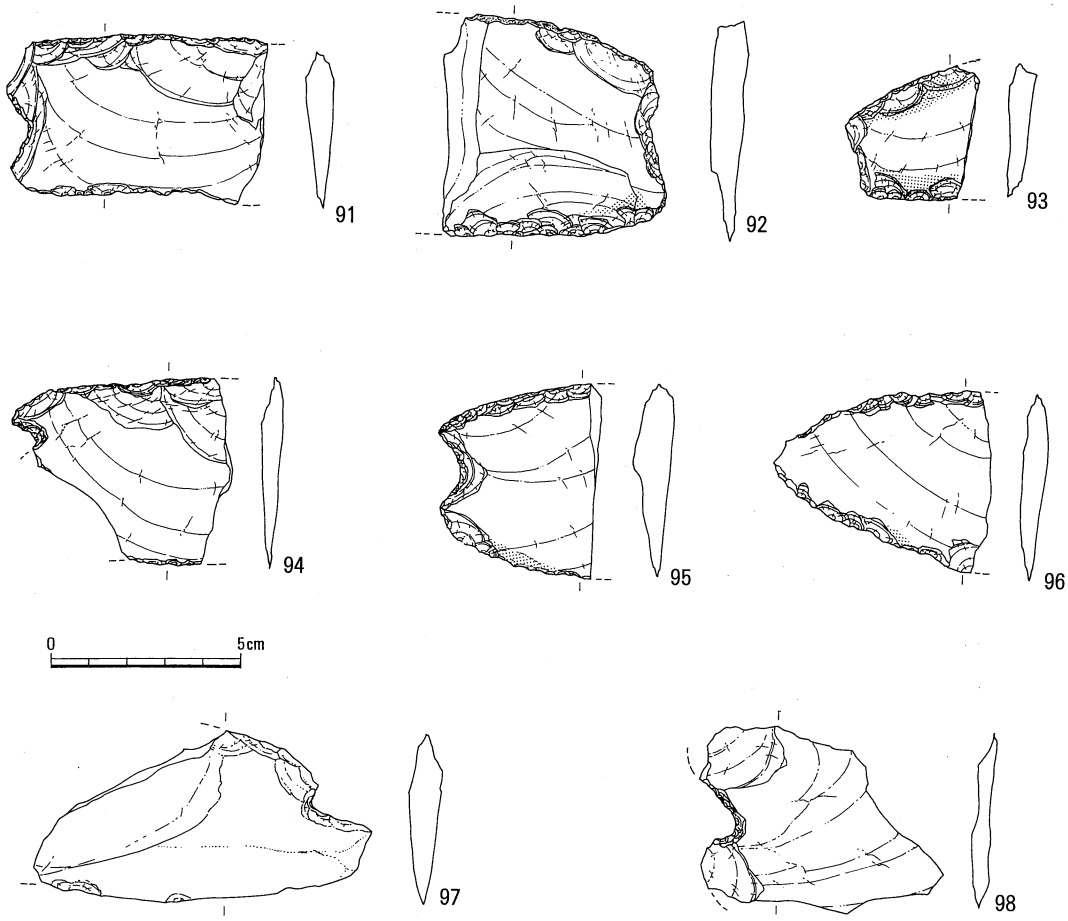
石器観察表

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
51	9－1	石鏃	土坑1	31.0	22.5	3.0	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
52	9－1	石鏃	大溝1上層	14.2	11.3	1.8	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
53	9－1	石鏃	大溝1上層	(11.5)	11.0	1.8	凹基無茎式	先端部欠	灰	サヌカイト	
54	9－1	石鏃	大溝1上層	16.5	12.5	3.0	平基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
55	9－1	石鏃	大溝1上層	19.2	14.0	2.8	凹基無茎式	完形	灰白	サヌカイト	
56	9－1	石鏃	大溝1上層	(16.0)	8.0	2.8		先端部・基部欠	灰	サヌカイト	石錐の可能性あり



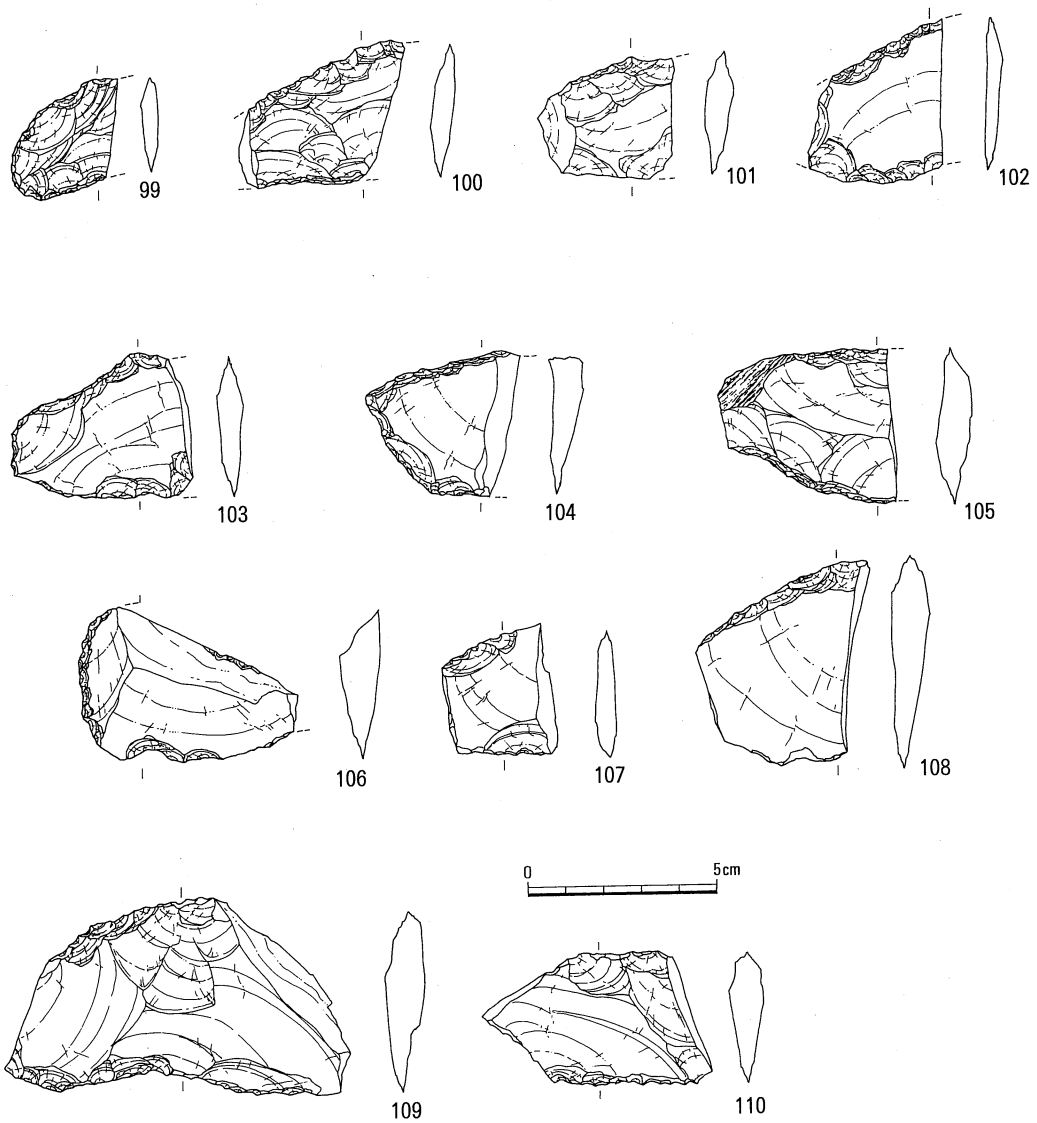
第15図　大溝１上層出土石器実測図(2)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
57	9－2	石錐	大溝１上層	28.5	10.0	3.1		完形	灰	サヌカイト	
58	9	楔形石器	大溝１上層	30.0	(26.0)	6.0	左側縁に裁断面　他縁に潰れ痕	一部欠	灰	サヌカイト	
59		楔形石器	大溝１上層	31.5	(39.0)	6.9	上下縁に潰れ痕	一部欠	灰	サヌカイト	
60		楔形石器	大溝１上層	48.5	(17.0)	10.1	右縁に裁断面　上下縁に潰れ痕	一部欠	灰	サヌカイト	
61		楔形石器	大溝１上層	51.5	(72.5)	14.8	上下縁に潰れ痕	一部欠	灰	サヌカイト	
62	10－1	打製石庖丁	大溝１上層	52.0	(86.5)	12.0	直背曲刃　左右両縁に抉り　磨耗あり	一部欠	灰	サヌカイト	
63	9－2	磨製石庖丁	大溝１上層	41.0	(83.0)	6.0	直背直刃　研磨粗い	半欠	灰	結晶片岩	
64		スクレーパー	大溝１上層	30.0	85.0	4.9	下縁に両面より刃部調整	一部欠	灰	サヌカイト	
65		打製石斧	大溝１上層	(55.0)	50.0	10.6	左右面に潰れ痕　刃部先端磨滅	一部欠	灰	サヌカイト	
66		打製石斧	大溝１上層	144.6	55.0	14.0	表は風化面　裏は荒割面	完形	灰白	安山岩	
67	9－1	石鏃	大溝１上層	19.0	17.0	2.4	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
68	9－1	石鏃	大溝１上層	19.0	16.0	2.8	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
69	9－1	石鏃	大溝１上層	20.6	17.0	1.9	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
70	9－1	石鏃	大溝１上層	22.1	(18.5)	2.6	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	
71	9－1	石鏃	大溝１上層	(12.5)	13.0	1.6	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	
72	9－1	石鏃	大溝１上層	(13.1)	17.5	2.0	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	
73	9－1	石鏃	大溝１上層	(14.0)	13.0	2.0	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	



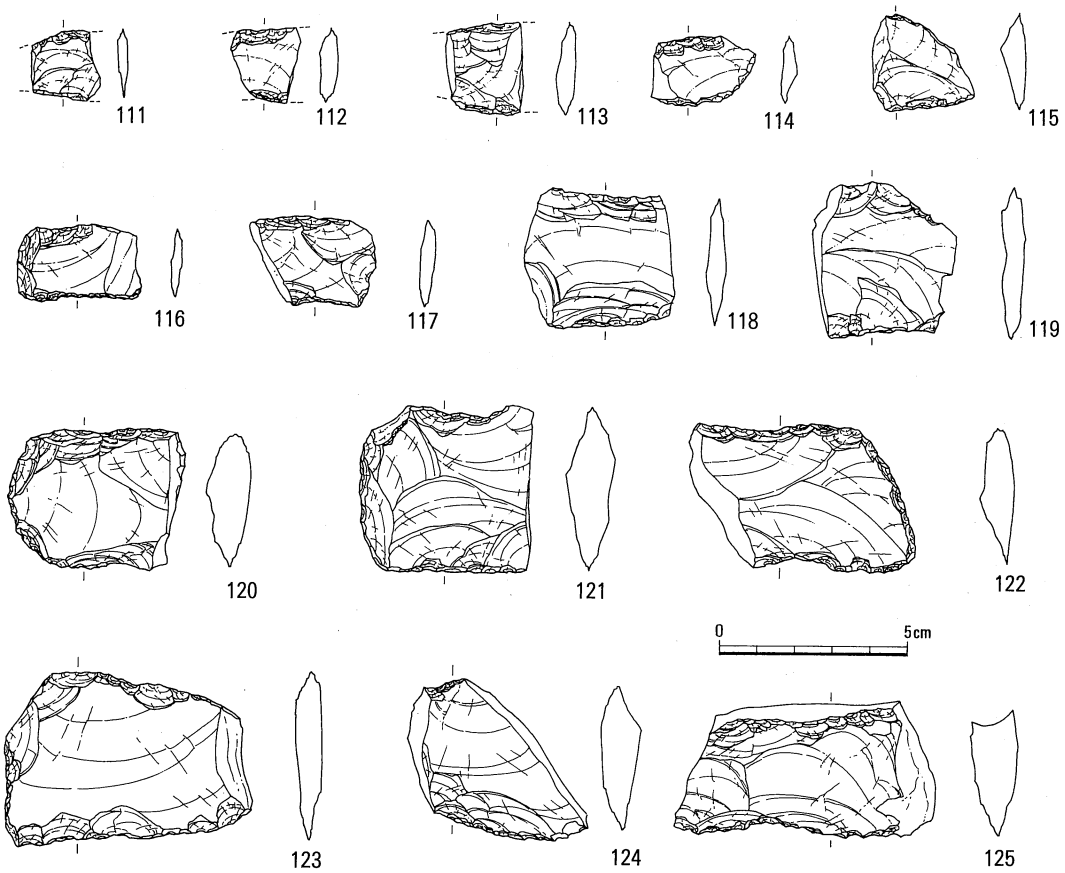
第16図　大溝１上層出土石器実測図(3)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
74	9－1	石鏃	大溝１上層	16.0	10.0	2.1	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
75	9－1	石鏃	大溝１上層	(16.5)	11.5	2.1	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	
76	9－1	石鏃	大溝１上層	18.4	15.0	3.0	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
77	9－1	石鏃	大溝１上層	22.2	14.5	4.0	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
78	9－1	石鏃	大溝１上層	23.1	(13.5)	2.8	凹基無茎式	一部欠	灰	サヌカイト	
79	9－1	石鏃	大溝１上層	23.0	11.0	2.4	凸基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
80	9－1	石鏃	大溝１上層	26.0	15.0	2.8	未製品		灰	サヌカイト	
81	9－1	石鏃	大溝１上層	30.5	20.5	4.5	未製品		灰	サヌカイト	
82	9－2	石錐	大溝１上層	(30.0)	17.0	5.9	尖端に磨痕あり	一部欠	灰	サヌカイト	
83	9－2	石錐	大溝１上層	33.5	10.0	4.0	右側縁は折損部から加工	完形	灰	サヌカイト	
84	9－2	石錐	大溝１上層	54.2	14.5	7.0	両側縁とも折損部から加工 基部に礫面	完形	灰	サヌカイト	
85	9－2	石錐	大溝１上層	(35.0)	24.5	5.5	基部につまみを作出	尖端部欠	灰	サヌカイト	



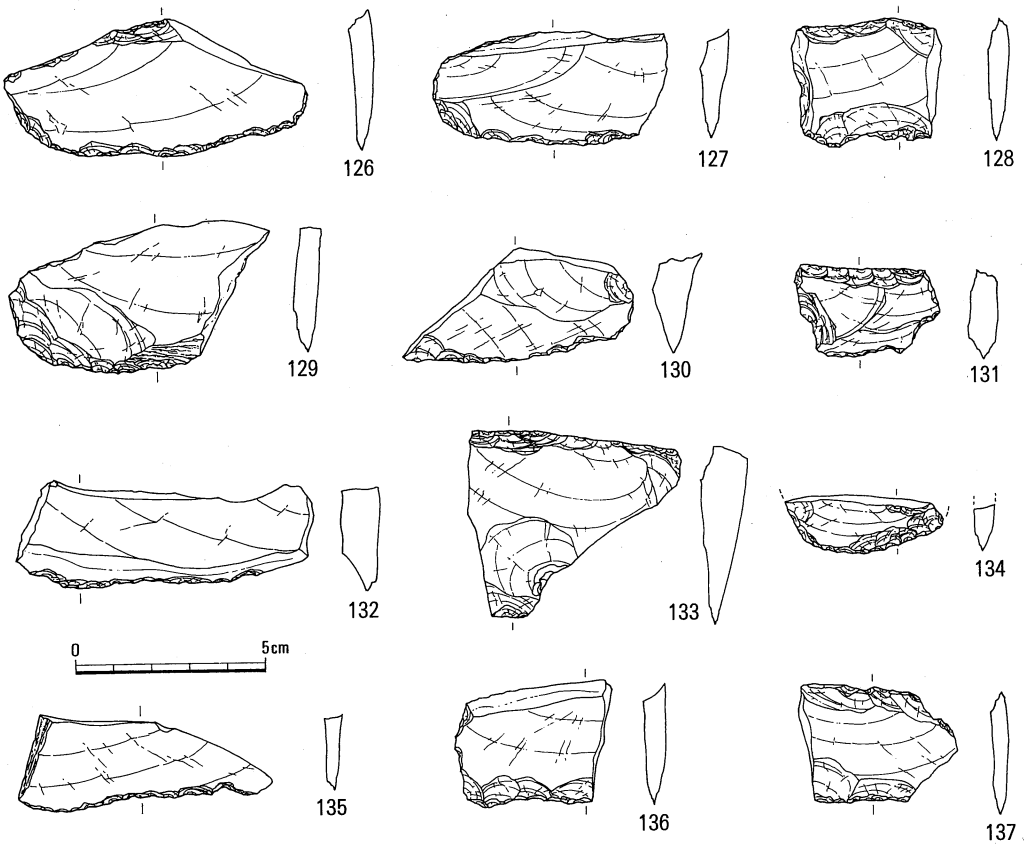
第17図　大溝１上層出土石器実測図(4)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
86	9－2	石匙	大溝１上層	(29.8)	26.0	4.2	縦長形状	半欠	灰	サヌカイト	
87		楔形石器	大溝１上層	29.4	(35.0)	14.1	右縁に裁断面 上縁の一部礫面		濃灰	サヌカイト	
88		楔形石器	大溝１上層	28.0	(23.5)	10.0	左縁に裁断面 表面の一部礫面		灰	サヌカイト	
89		楔形石器	大溝１上層	27.0	(27.0)	7.2	左縁に裁断面 右辺の一部礫面		灰	サヌカイト	
90		楔形石器	大溝１上層	24.0	(32.5)	7.7	左縁に裁断面		灰	サヌカイト	
91	10－1	打製石庖丁	大溝１上層	46.0	(69.0)	8.4	直背直刃　左縁に抉り	半欠	灰	サヌカイト	
92	10－1	打製石庖丁	大溝１上層	58.5	(60.0)	9.9	曲背直刃　下縁に磨耗あり	半欠	灰	サヌカイト	
93	10－1	打製石庖丁	大溝１上層	(35.6)	(35.0)	7.1	曲背直刃　上縁折損部から加工　磨耗あり	半欠	濃灰	サヌカイト	



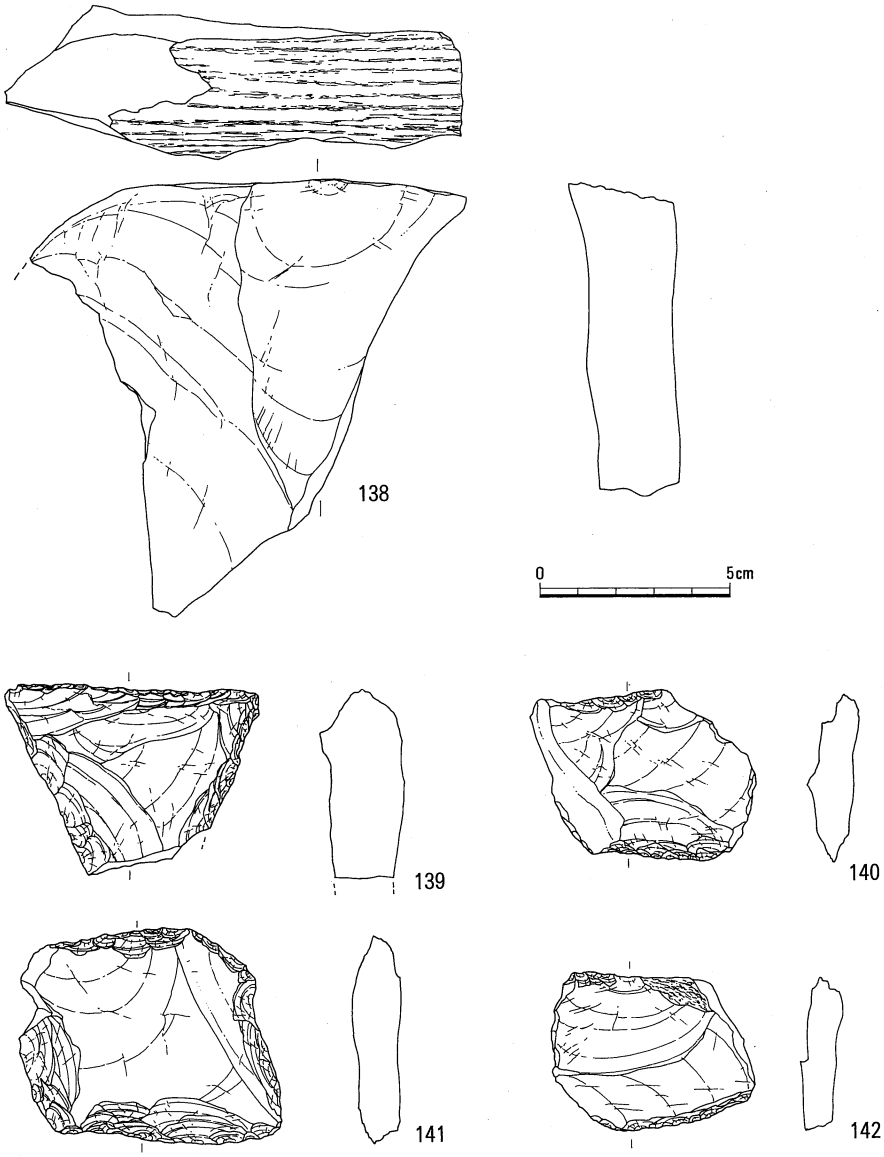
第18図　大溝１上層出土石器実測図(5)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
94	10－2	打製石庖丁	大溝１上層	50.0	(60.0)	8.0	直背直刃　左縁に抉り	半欠	灰	サヌカイト	
95	10－2	打製石庖丁	大溝１上層	53.0	(43.0)	9.0	曲背曲刃　下縁磨耗 左縁に抉り	半欠	灰	サヌカイト	
96	10－2	打製石庖丁	大溝１上層	(49.0)	(57.5)	5.5	曲背曲刃　下縁磨耗 抉りなし	半欠	灰	サヌカイト	
97	10－2	半磨製石庖丁	大溝１上層	(46.5)	(89.5)	8.5	荒割整形後、刃部のみ研磨 右縁に抉り	半欠	灰白	安山岩	
98	10－2	打製石庖丁	大溝１上層	(49.5)	(65.0)	6.2	左縁に抉り	抉部のみ遺存	灰	サヌカイト	
99	11－1	スクレーパー	大溝１上層	(32.5)	(26.0)	5.9	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
100	11－1	スクレーパー	大溝１上層	(40.0)	(42.5)	6.1	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
101	11－1	スクレーパー	大溝１上層	33.2	(37.5)	7.1	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
102	11－1	スクレーパー	大溝１上層	42.0	(36.0)	5.1	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
103	11－1	スクレーパー	大溝１上層	39.0	(48.0)	6.0	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
104	11－1	スクレーパー	大溝１上層	40.0	(41.5)	8.1	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
105	11－1	スクレーパー	大溝１上層	41.5	(49.0)	7.7	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
106		スクレーパー	大溝１上層	(42.0)	(57.5)	12.6	A類型	半欠	灰	サヌカイト	



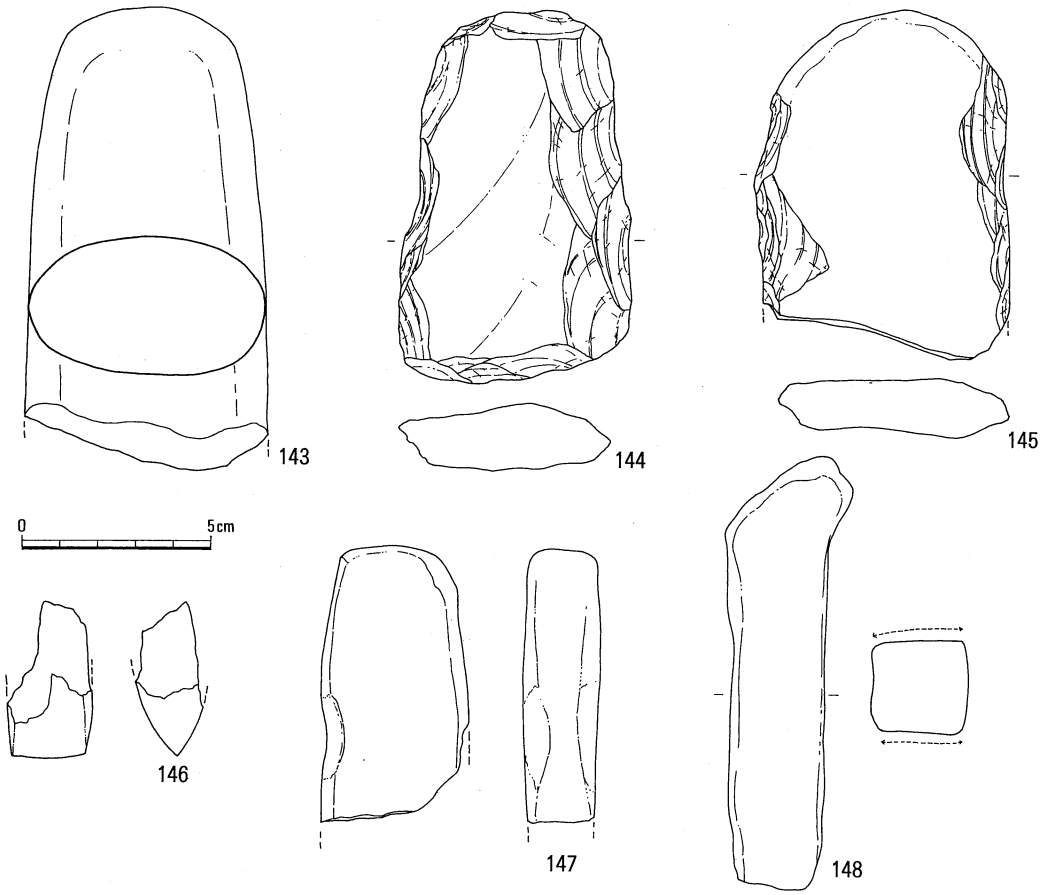
第19図　大溝１上層出土石器実測図(6)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
107		スクレーパー	大溝１上層	(35.5)	(31.5)	6.1	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
108		スクレーパー	大溝１上層	55.0	(45.5)	10.0	A類型	半欠	灰白	サヌカイト	
109		スクレーパー	大溝１上層	53.2	(92.0)	12.0	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
110		スクレーパー	大溝１上層	36.0	(62.0)	11.0	A類型	半欠	灰	サヌカイト	
111		スクレーパー	大溝１上層	19.0	(19.0)	3.2	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
112		スクレーパー	大溝１上層	20.2	(18.5)	3.9	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
113		スクレーパー	大溝１上層	24.5	(21.5)	5.2	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
114		スクレーパー	大溝１上層	19.5	(28.5)	4.1	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
115		スクレーパー	大溝１上層	26.0	(27.0)	6.3	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
116		スクレーパー	大溝１上層	20.5	(34.0)	4.0	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
117		スクレーパー	大溝１上層	25.0	(34.0)	4.5	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
118		スクレーパー	大溝１上層	37.0	(49.0)	5.4	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
119		スクレーパー	大溝１上層	42.0	(38.5)	6.9	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
120	11－2	スクレーパー	大溝１上層	38.5	(47.5)	11.1	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
121	11－2	スクレーパー	大溝１上層	45.0	(46.0)	12.3	B類型	半欠	灰	サヌカイト	



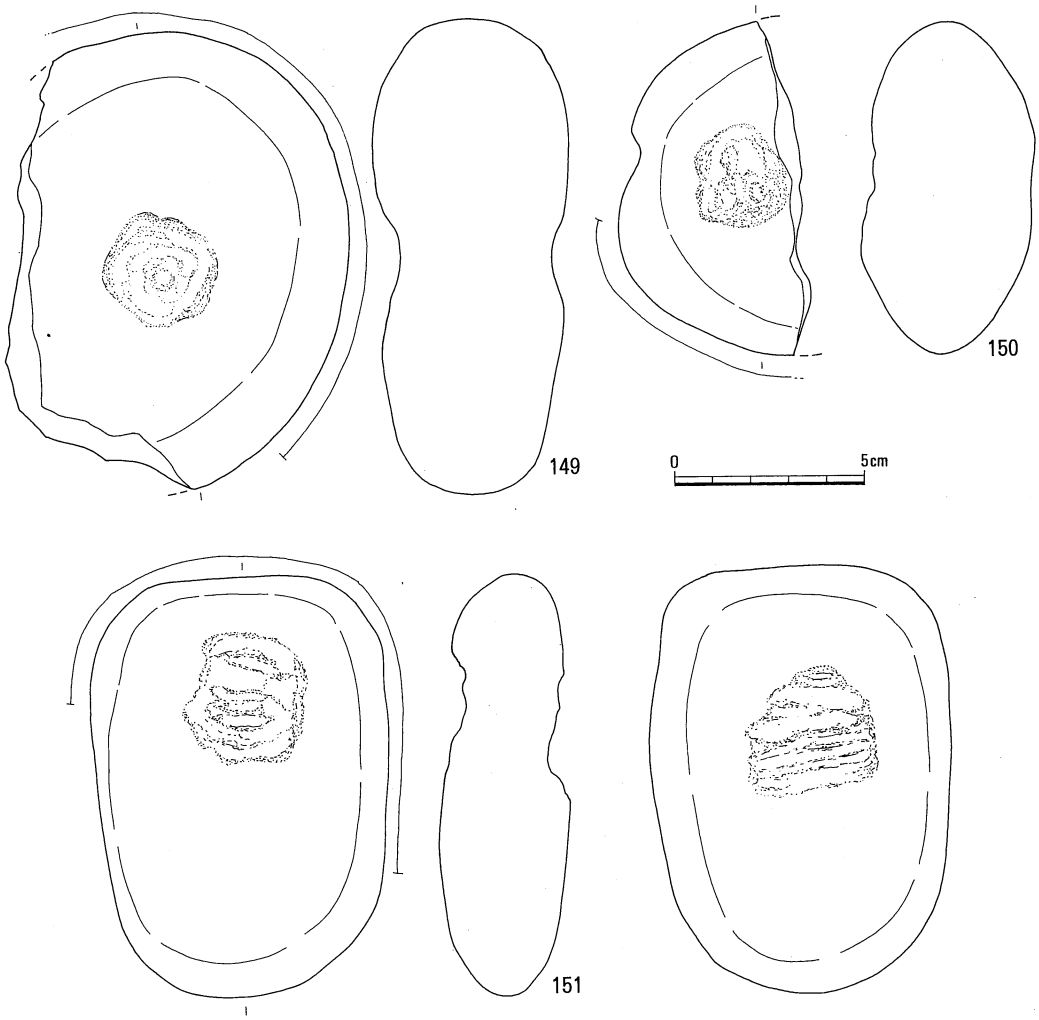
第20図　大溝１上層出土石器実測図(7)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
122	11－2	スクレーパー	大溝１上層	39.0	(61.5)	10.0	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
123	11－2	スクレーパー	大溝１上層	46.5	(67.0)	7.6	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
124	11－2	スクレーパー	大溝１上層	43.0	(48.5)	10.3	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
125	11－2	スクレーパー	大溝１上層	36.5	(68.5)	14.9	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
126		スクレーパー	大溝１上層	37.2	(81.5)	5.9	C類型	半欠	灰	サヌカイト	



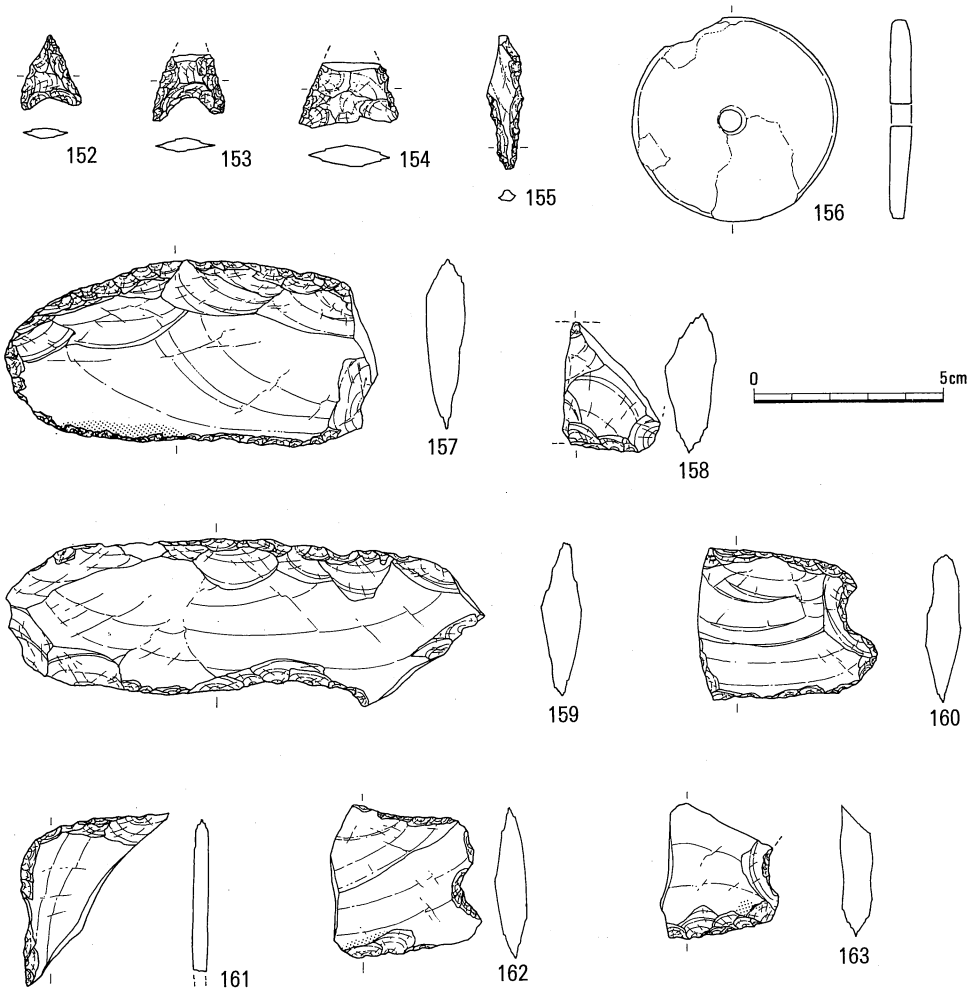
第21図　大溝１上層出土石器実測図(8)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
127		スクレーパー	大溝１上層	30.3	(62.5)	6.8	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
128		スクレーパー	大溝１上層	33.5	(40.0)	5.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
129		スクレーパー	大溝１上層	39.0	(69.0)	5.9	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
130		スクレーパー	大溝１上層	30.0	(61.5)	12.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
131		スクレーパー	大溝１上層	25.0	(40.0)	8.2	C類型		灰	サヌカイト	
132		スクレーパー	大溝１上層	29.0	(78.0)	10.5	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
133		スクレーパー	大溝１上層	50.0	(58.5)	15.3	C類型　右縁に抉りあり	半欠	灰白	サヌカイト	
134		スクレーパー	大溝１上層	16.0	(42.5)	6.2	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
135		スクレーパー	大溝１上層	26.5	(68.5)	5.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
136		スクレーパー	大溝１上層	34.0	(42.5)	7.8	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
137		スクレーパー	大溝１上層	32.0	(42.5)	4.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
138		石核	大溝１上層	116.0	(117.5)	31.1	上面の礫面を打面とし縦長剥片剥取	半欠	灰	サヌカイト	
139		石核	大溝１上層	51.0	(67.0)	24.2	上面の礫面を打面とし横長剥片剥取	半欠	灰	サヌカイト	



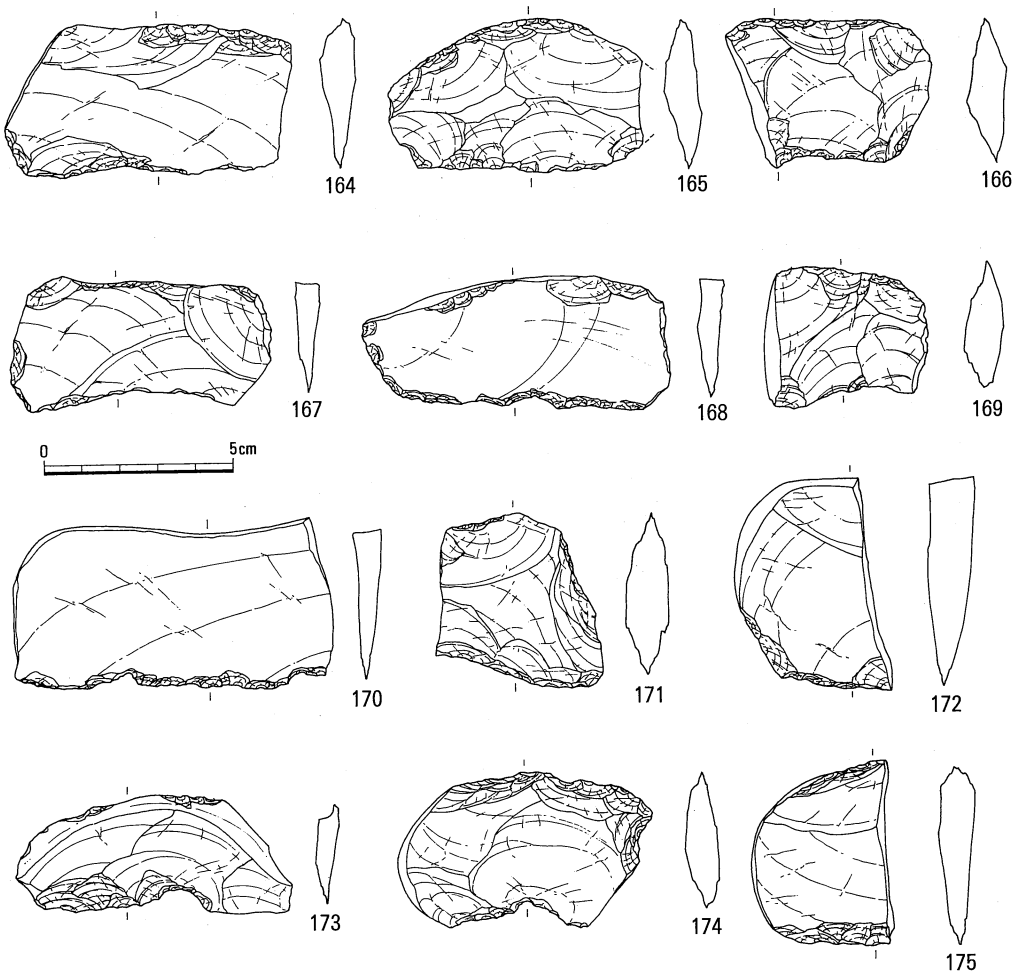
第22図　大溝１上層出土石器実測図(9)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
140		スクレーパー	大溝１上層	46.0	(61.0)	12.0	上下両縁に階段状剝離 右縁刃部調整	半欠	灰	サヌカイト	
141		スクレーパー	大溝１上層	57.0	71.5	15.1	左縁刃部調整	完形	灰白	サヌカイト	
142		スクレーパー	大溝１上層	42.0	(55.5)	16.0	下縁折損部より刃部調整	半欠	灰白	サヌカイト	
143		磨製石斧	大溝１上層	(124.0)	(64.0)	45.0	研磨は粗雑	半欠	灰緑	緑泥片岩	敲石に転用
144		打製石斧	大溝１上層	(100.0)	(61.5)	24.0	表面風化面　裏面荒割面	半欠	灰白	安山岩	
145		打製石斧	大溝１上層	(93.0)	(66.0)	14.6	表裏とも風化面	半欠	灰白	安山岩	
146		柱状片刃石斧	大溝１上層	(42.0)	(23.0)		研磨は丁寧　稜線鋭い	半欠	淡灰緑	緑泥片岩	
147		柱状片刃石斧	大溝１上層	(75.0)	(40.0)		一方に不明瞭な抉り	半欠	淡灰緑	緑泥片岩	
148		砥石	大溝１上層	115.8	27.0		表裏に砥面	完形	灰白	安山岩	
149	12－2	凹石	大溝１上層	122.0	(88.0)		表裏に敲打痕　周縁にも敲打痕あり	一部欠	灰	砂岩	



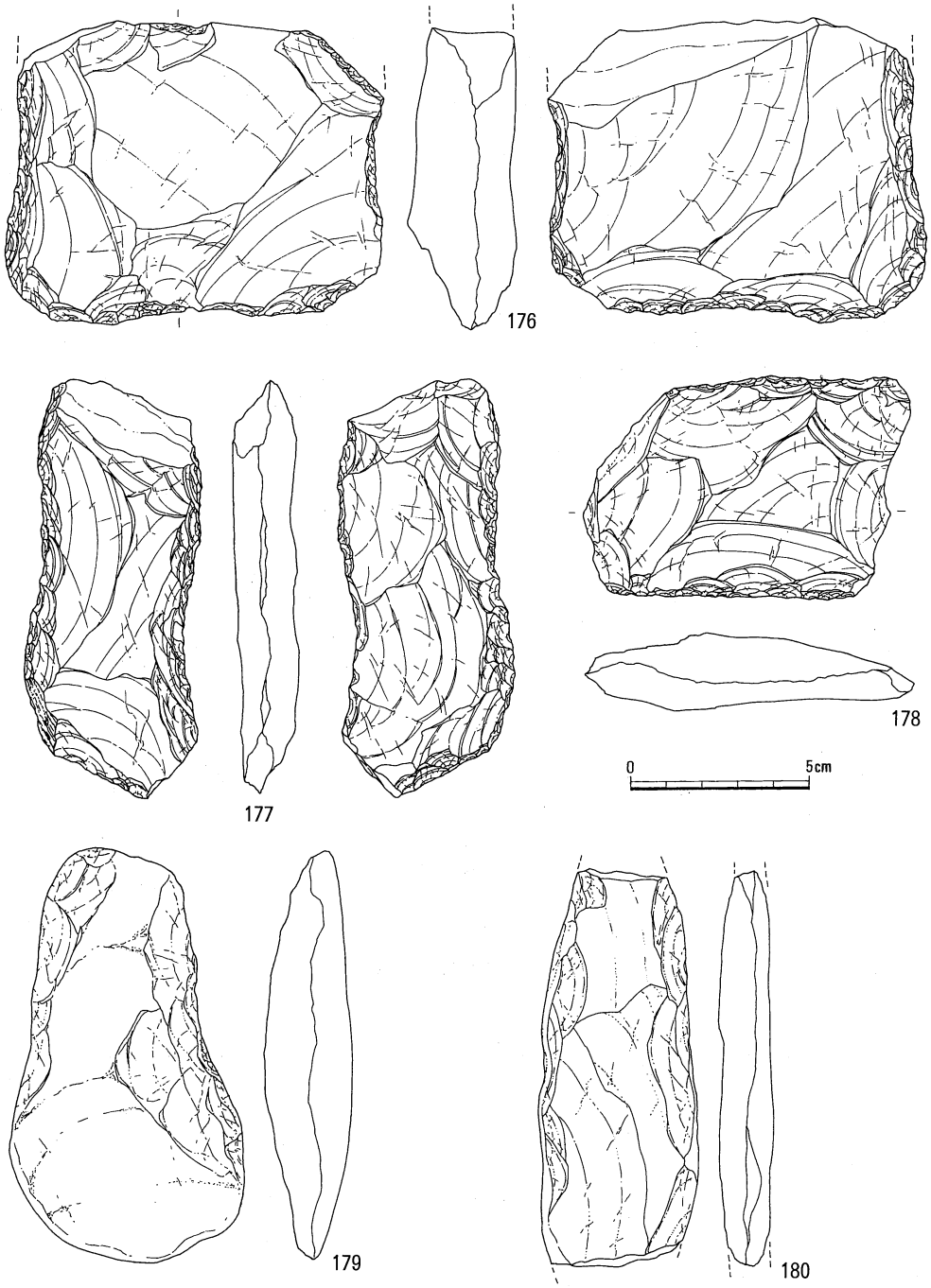
第23図　大溝１中層出土石器実測図(1)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
150	12－2	凹石	大溝１上層	88.5	(50.0)		表裏に敲打痕　周縁にも敲打痕あり	半欠	灰緑	砂岩	
151	12－2	凹石	大溝１上層	113.0	(80.0)		表裏に敲打痕(線状痕)	完形	灰	砂岩	
152		石鏃	大溝１中層	20.0	16.5	2.0	凹基無茎式	完形	灰	サヌカイト	
153		石鏃	大溝１中層	(18.0)	20.0	4.2	凹基無茎式	先端欠	濃灰	サヌカイト	
154		石鏃	大溝１中層	(18.0)	26.0	5.0	未製品	半欠	濃灰	サヌカイト	
155		石錐	大溝１中層	36.0	10.0			完形	灰	サヌカイト	
156		紡錘車	大溝１中層	55.0	54.5		表面が一部剝落	完形	淡灰緑	緑泥片岩	
157		打製石庖丁	大溝１中層	50.0	(99.9)	10.0	曲背直刃　抉りなし　磨耗あり	一部欠	灰	サヌカイト	
158		楔形石器	大溝１中層	45.0	(26.2)	11.8			濃灰	サヌカイト	
159		打製石庖丁	大溝１中層	43.0	(127.0)	9.9	直背直刃　抉りなし	一部欠	灰	サヌカイト	
160		打製石庖丁	大溝１中層	41.5	(48.0)	7.2	直背直刃　右縁抉り	半欠	灰	サヌカイト	

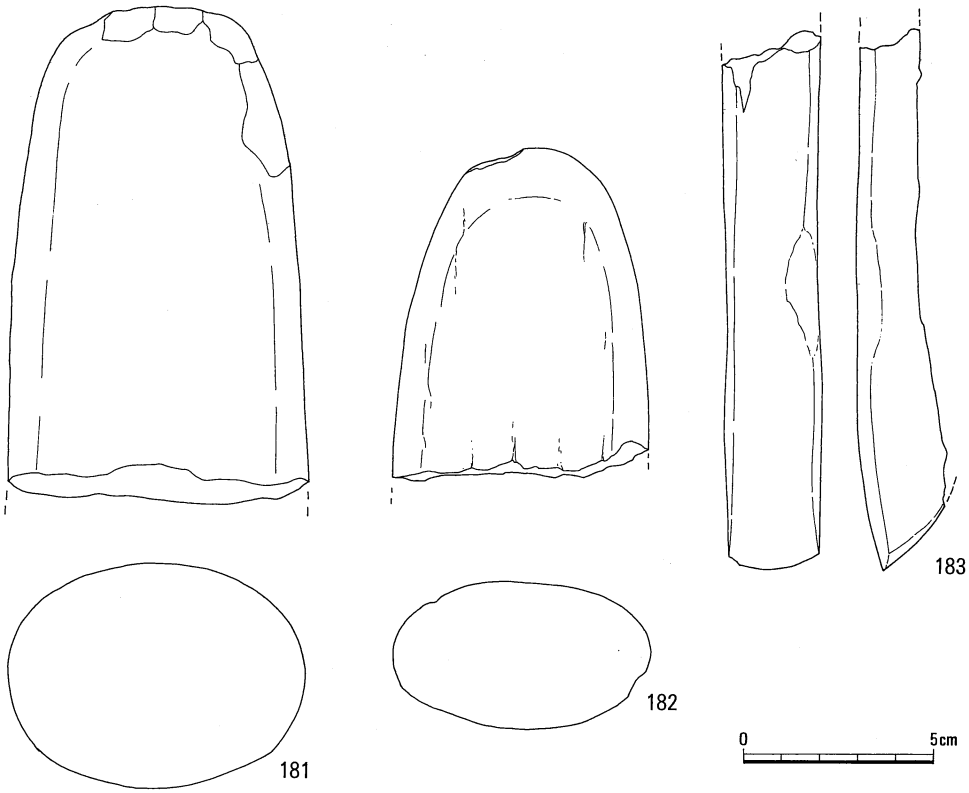


第24図　大溝１中層出土石器実測図(2)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
161		打製石庖丁	大溝１中層	(46.5)	(40.0)	5.8	左縁抉り	半欠	淡灰	サヌカイト	
162		打製石庖丁	大溝１中層	41.0	(42.0)	8.5	右縁抉り　磨滅あり	半欠	灰	サヌカイト	
163		打製石庖丁	大溝１中層	(36.5)	(33.0)	8.8	右縁抉り　磨滅あり	半欠	灰	サヌカイト	
164		スクレーパー	大溝１中層	40.0	(77.0)	8.2	B類型	一部欠	灰	サヌカイト	
165		スクレーパー	大溝１中層	41.0	(68.0)	7.8	A類型	一部欠	灰	サヌカイト	
166		スクレーパー	大溝１中層	39.5	(55.0)	9.6	B類型	半欠	灰	サヌカイト	
167		スクレーパー	大溝１中層	36.0	70.1	7.4	C類型	完形	灰	サヌカイト	
168		スクレーパー	大溝１中層	36.0	82.0	7.9	C類型	完形	灰	サヌカイト	
169		スクレーパー	大溝１中層	38.5	(44.0)	10.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
170		スクレーパー	大溝１中層	43.0	85.0	10.1	C類型	完形	灰	サヌカイト	
171		スクレーパー	大溝１中層	46.0	(45.0)	11.8	C類型	半欠	濃灰	サヌカイト	
172		スクレーパー	大溝１中層	56.5	(42.0)	15.8	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
173		スクレーパー	大溝１中層	30.0	72.0	5.9	C類型　下縁に抉り	完形	灰	サヌカイト	

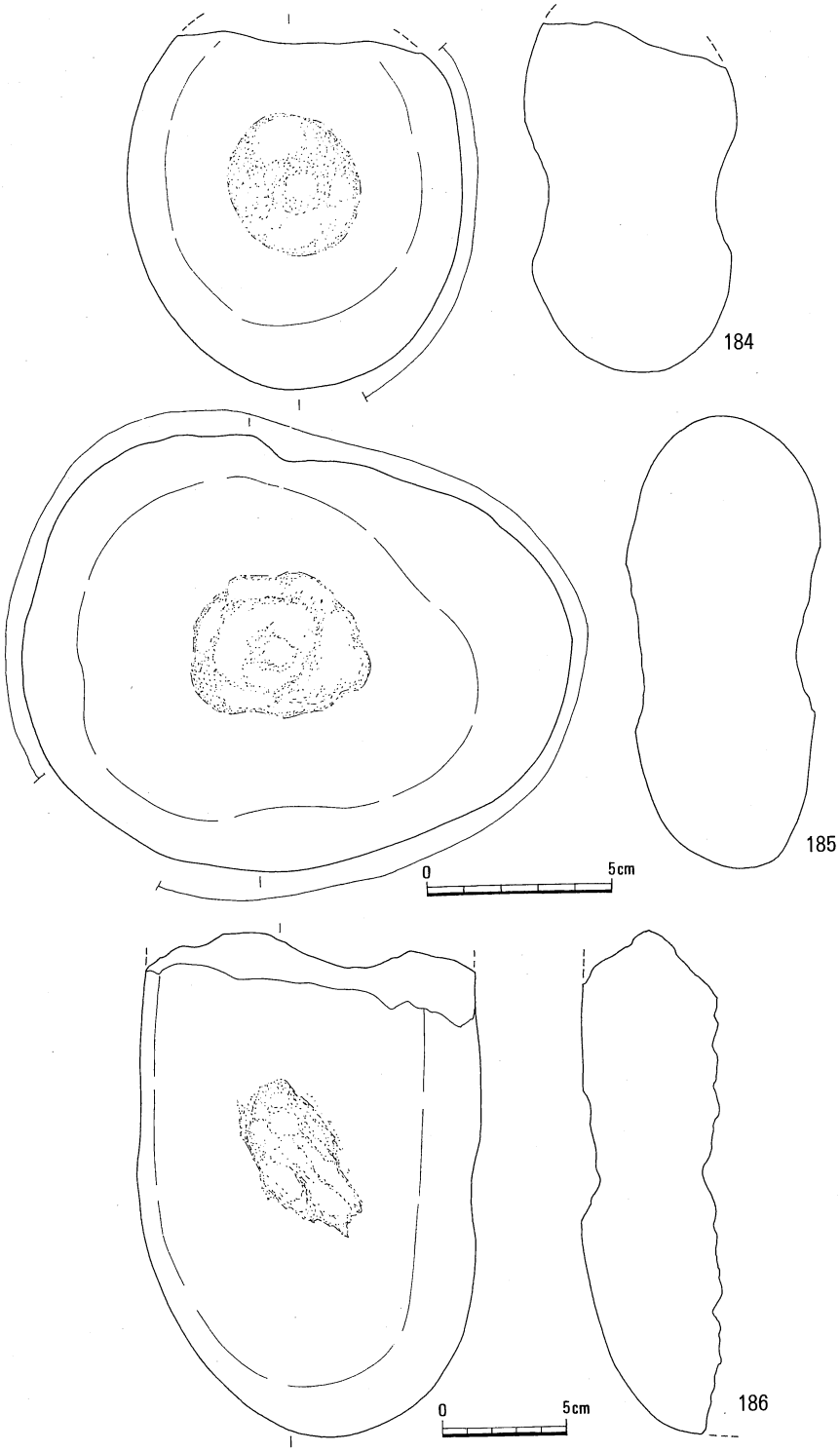


第25図　大溝１中層出土石器実測図(3)



第26図　大溝１中層出土石器実測図(4)

挿図	図版	器　種	出土位置	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	特　徴	遺　存	色調	石質	備　考
174		スクレーパー	大溝１中層	41.5	68.5	12.9	C類型　下縁に抉り	完形	淡灰	サヌカイト	
175		スクレーパー	大溝１中層	50.0	(36.5)	9.0	C類型	半欠	灰	サヌカイト	
176		打製石斧	大溝１中層	(86.5)	105.5	29.5	大形の短冊形	半欠	灰	サヌカイト	
177	12－1	打製石斧	大溝１中層	(117.0)	48.0	7.1	短冊形	一部欠	灰	サヌカイト	
178		スクレーパー	大溝１中層	63.5	93.0	19.5	下縁は丁寧な刃部調整	完形	淡灰	サヌカイト	
179	12－1	打製石斧	大溝１中層	115.0	65.5	23.6	バチ形	完形	淡黄灰	安山岩	
180	12－1	打製石斧	大溝１中層	(111.0)	45.5	13.6	短冊形	一部欠	濃灰	安山岩	
181		磨製石斧	大溝１中層	(133.0)	79.0	60.0	太形蛤刃石斧	半欠	淡灰	安山岩	
182		磨製石斧	大溝１中層	(90.0)	68.5	39.0	太形蛤刃石斧	半欠	淡灰	結晶片岩	
183		柱状片刃石斧	大溝１中層	(143.5)	25.5		稜線鋭い	基部欠	緑	緑泥片岩	
184		凹石	大溝１中層	(97.0)	91.0	55.0	表裏に敲打痕　周縁にも敲打痕あり	一部欠	灰	砂岩	
185		凹石	大溝１中層	123.0	149.0	51.0	表裏に敲打痕　周縁にも敲打痕あり	完形	灰	砂岩	
186		石皿	大溝１中層	(208.0)	140.0		上面に敲打痕(線状痕)	半欠	灰	砂岩	



第27図　大溝１中層出土石器実測図(5)

第1表　壷形土器頭部文様集計

壷形土器　　口縁部～頸部

遺構・層位	沈　線	削凸Ⅰ	削凸Ⅱ	貼　凸	沈線＋貼凸	無　文	不　明	合　計
大溝1上層	8	1	1	4	1	1	5	21
大溝1中層				1			1	2
大溝3上層	1		1					2
大溝3中下層	2	1		1		1		5

第2表　壷形土器胴部文様集計

壷形土器　　胴部

遺構・層位	沈　線	削凸Ⅱ	貼　凸	櫛　描	合　計
大溝1上層		1	8	1	10
大溝1中層	2				2
大溝3上層	1	1			2
大溝3中下層	1				1

第3表　甕形土器口縁部文様集計

甕形土器　　口縁部

口縁部形状	如意状	凸帯1	凸帯2	凸帯3	L　字	合　計
大溝1上層	8	60	8	0	3	79
大溝1中層	1	8	12	0	4	25
大溝3上層	8	2	1	1	0	12

第4表　甕形土器文様集計

甕形土器　　文様

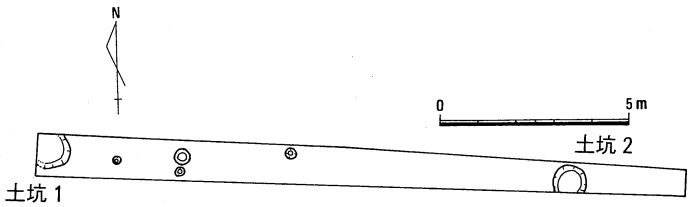
遺　構	沈線文 1～4条	沈線文 5～11条	沈線文 12～条	櫛描文	無　文	不　明	合　計
大溝1上層	0	8	2	7	39	23	79
大溝1中層	0	3	2	4	5	11	25
大溝3上層	2	6	1			3	12

第5表　石器組成の比較

遺跡名		永井			林坊城	下川津	五条	浴長池	矢ノ塚	平岡	紫雲出山	久米池南	郡家原
時期		縄文時代			凸帯文期	弥生時代							
		後期中葉	後期後葉	晩期前半		前期前半	前期末～中期初	中期前半	中期中～後期初	中期中葉	中期後半	中期末	後期後半
武器	石鏃	53 (13%)	33 (21%)	48 (11%)	12 (27%)	37 (4%)	23 (17%)	5 (9%)	230 (37%)	77 (72%)	284 (75%)	66 (49%)	18 (47%)
	石槍					3 (0.3%)		6 (11%)	6 (1%)	1 (1%)	9 (2%)		2 (5%)
漁労具	石錘	3 (1%)		1 (0.2%)		2 (0.2%)			9 (1%)		9 (2%)		
土掘具	石鍬	74 (19%)	43 (28%)	206 (46%)	21 (48%)	79 (9%)	8 (6%)		7 (1%)	1 (1%)			5 (13%)
収穫具	打製石包丁					18 (2%)	14 (10%)	13 (23%)	96 (16%)	7 (7%)	25 (7%)	20 (15%)	2 (5%)
	磨製石包丁					4 (0.4%)	2 (1%)	1 (2%)	1 (0.2%)				
	石鎌			1 (0.2%)	2 (5%)	7 (1%)						1 (1%)	
調理具	磨石類	80 (20%)	13 (8%)	46 (10%)		47 (5%)	8 (6%)	1 (2%)	45 (7%)	4 (4%)	5 (1%)	11 (8%)	
伐採・加工具	縄文系伐採等	8 (2%)	1 (1%)	2 (0.4%)	1 (2%)								
	太形伐採斧					3 (0.3%)	3 (2%)	4 (7%)	10 (2%)		17 (4%)	4 (3%)	
	柱状加工斧						3 (2%)	4 (7%)	14 (2%)		4 (1%)	4 (3%)	
	扁平加工斧					1 (0.1%)		4 (7%)	2 (0.3%)		4 (1%)	2 (1%)	
	石錐	4 (1%)	1 (1%)	1 (0%)	4 (9%)	12 (1%)	6 (4%)		10 (2%)	7 (7%)	11 (3%)	5 (4%)	
	削器類	168 (43%)	64 (41%)	139 (31%)	4 (9%)	667 (75%)	69 (50%)	18 (32%)	170 (27%)	9 (8%)	7 (2%)	10 (7%)	9 (24%)
	砥石	1 (0.3%)				7 (1%)	1 (1%)	1 (2%)	10 (2%)		1 (0.3%)	11 (8%)	2 (5%)
紡績具	紡錘車					2 (0.2%)	1 (1%)						
祭祀具	環状石斧石棒等	1 (0.3%)		1 (0.2%)					9 (1%)	1 (1%)	2 (1%)		
不明		1 (0.3%)											
合計	(比率)	393 (100%)	155 (100%)	445 (100%)	44 (100%)	889 (100%)	138 (100%)	57 (100%)	619 (100%)	107 (100%)	378 (100%)	134 (100%)	38 (100%)

2）B地区

柱穴3、土坑2基を検出した。埋土はいずれも暗褐色系で弥生土器片を包含する。土坑1は側壁の立ち上がりが急で一部オーバーハングする箇所もある。いわゆる袋状土坑である可能性が高いが、深さ20cmほど残存するのみで削平が著しく、本来の形状は明かでない。櫛描文の甕形土器片が出土していることから、大溝1中層・上層に並行するものである。遺構面は東に行くほど浅くなっており、微高地の中心が当該調査区の東に位置することを示している。



第28図　B地区遺構配置図

第4章　ま　と　め

今回の発掘調査は、従来より実態が不明瞭とされていた五条遺跡の内容の一部が明らかになった点で貴重なものであった。

確認した遺構は大溝3条、溝2条、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物1棟、土坑3基、柱穴多数である。ほとんどが弥生時代前期後半から中期初頭に位置付けられる。

調査面積は370㎡と狭いが、現地表の高低に対応して遺構が分布する傾向が認められ、五条遺跡の広がりを推定する重要な手がかりとなるとともに、大溝については五条遺跡集落の環濠である可能性も考えられる。この点については、後に詳しく触れる。

今回出土した弥生土器は従来より知られていた土器群とほぼ同じ様相を示す。ただし、大溝1と大溝3は土器相にやや違いが見いだされ、編年研究上意味のある資料群となりえるものである。従前の土器群は五条。Ⅱ類～Ⅲ類に分類され、時期差を示すものと解釈されていた。今回の資料によって、この従前資料に補充、修正を加え改めて形式分類を行なう必要性がでてきたといえる。

また、大溝1より出土した石器群は主要な器種が揃う良好なセットと考える。縄文時代から弥生時代に至る生業活動の変化を石器の変遷を通して考察する上で、重要な資料である。

以上、提起されたテーマのうち、遺跡の広がり・石器組成ついて、さらに深く検討し今回の調査のまとめとしたい。

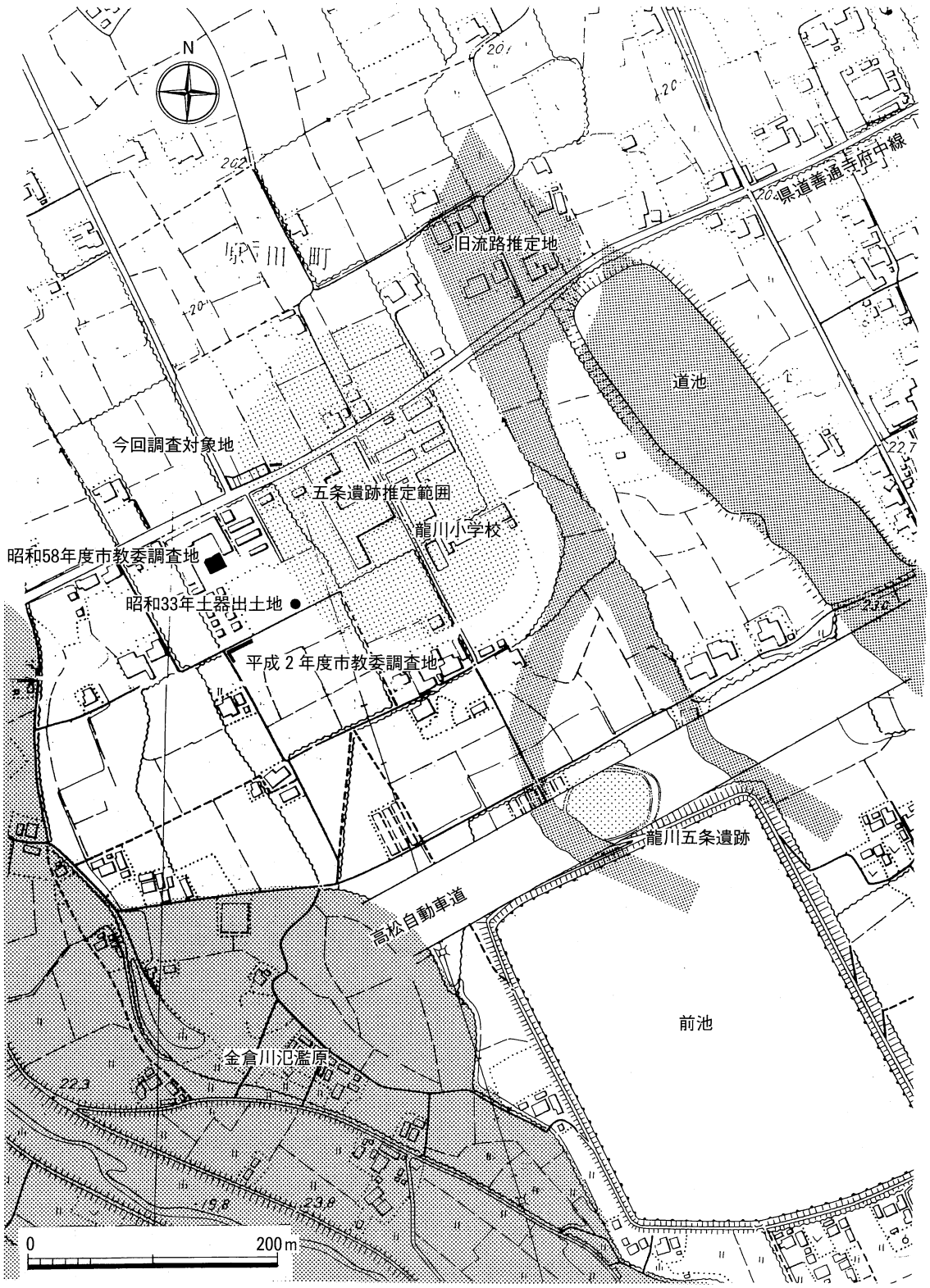
周辺地形と五条遺跡の広がり（第29図）

当遺跡が金倉川東岸の標高20m前後の北への緩やかに傾斜する扇状地上に立地することはすでに述べたところである。周辺は四国横断自動車道建設に伴う龍川五条遺跡の発掘調査など既往の調査事例があり、その成果と地形の復元を検討することにより、今回確認した遺構の性格および五条遺跡の広がりを推定する。

（流路の推定）

四国横断自動車道建設に伴う龍川五条遺跡、龍川四条遺跡の発掘調査は周辺の地形を推定する重要な手がかりである。また、周辺の地形図から読み取れる等高線、航空写真の観察などから周辺の旧流路の復元が可能である。

調査地から西に200mの地点には金倉川の氾濫原が広がっている。これは比高差約2mの段丘崖を伴っており、少なくとも弥生時代以降の新しい時期に形成されたいわゆる『完新世段丘』と考えられる。したがって、弥生時代の当該地の地形はすでに消滅して存在しないということ



第29図　五条遺跡既往調査地および旧地形復元図

になる。

前池の北側に位置する龍川五条遺跡の調査では2条の環濠をもつ環濠集落が検出されている。集落の東西に流路が北流しており、その2本の流路に挟まれた細長の微高地を利用して営まれた集落と考えられる。流路はそこから約120mほどで合流し、さらに北流するものと推定され、県道善通寺府中線付近で道池から来る流路と合流するものと考えられる。道池との間の微高地は、四国横断自動車道の調査結果では居住遺構等は確認されておらず、土地利用は積極的になされていない。

以上の3本の流路群と金倉川氾濫原との間が広大な微高地と推定される。

（微高地）

周辺では昭和58年に善通寺市教委による調査が行なわれ、土器溜まり等の遺構が検出されている。また平成2年に市教委の調査で流路や土坑等が検出されている。昭和33年、当遺跡が確認されるに至った土器群出土地点は、聞き取り等の調査によって図の位置であることが判明した。

微高地上の等高線を辿ると、旧流路に近い側は龍川五条遺跡から北へ伸びる微高地の延長上にあるが、今回の調査地より西側は金倉川の氾濫原にむかって緩やかに傾斜する地形が読み取れる。また、調査地周辺の最も高い箇所は現在の龍川小学校付近であることがわかる。さらに龍川五条遺跡の西側を流れる流路は、その微高地を避けて東に大きく迂回する状況が現地割りの上で観察できる。

ふたたび、既往調査例をみると昭和58年調査地は近世頃の攪乱が地表下約60cmまで及び、その下の黄褐色シルト層において弥生時代前期の落ち込み状の遺構が検出されている。遺構埋土中からは土器片、石器片が多量に出土しているが、居住遺構ではないようである。今回の調査地が地表下20cmほどで遺構面に達していることから推定すると、昭和58年の調査地は今回の調査地と比べかなり標高が下がっていたものと推定される。すなわち、集落域の縁辺部の凹地状の遺構である可能性が考えられる。

今回の調査地においてもA地区に比べB地区がかなり標高が高くなっていることをすでに述べた。微高地の中心的位置はやはり今回調査地の東側に考えるのが妥当である。

しかし、平成2年度に行なわれた調査地は、調査地の西側を中心として土坑等の遺構が検出されている。これら土坑群の性格については明確でないが、地表下それほど深くない層位で遺構が検出されていることから考えると、この付近にも微高地の存在を推定できる。この地点から金倉川氾濫原に至る幅200mの範囲はこれまで調査が行なわれておらず、実体は不明である。ほかに微高地が埋もれている可能性は考えられる。

以上、周辺の地形と調査事例から居住域として利用されたと推定される微高地は前池北側の龍川五条遺跡が立地する微高地と、その200m北側の龍川小学校を中心とする微高地の二箇所に加え、若干の低地を隔てて、金倉川氾濫原までの間で想定される微高地が相当する。

なお、微高地の面積としては、龍川五条遺跡に比べ、龍川小学校を中心とした微高地がより広い面積を有している。

（大溝）

今回検出した大溝は、前項の推定から龍川小学校を中心とした微高地の西側縁辺部に相当する。遺構断面の観察から、人工的に掘削されたことは疑いなく、その後さらに意図的に埋められた形跡を残す。溝の東側は基盤の標高が高くなるとともに、検出される遺構が柱穴や土坑に限られる。掘削された位置と、微高地の関係からこの大溝は集落を取り巻く環濠の可能性が高いと考える。

大溝１については遺構説明で述べたようにやや東にカーブを描きながら走行する。微高地の北限を推定する手がかりとなる。

昭和33年に発見された土器群は位置的には今回の調査地と同様に微高地の縁辺にあたる。ここにおいても、多量の土器を出土したことからみて環濠の一部であった可能性が考えられる。微高地の南限と東限については東側の流路が推定の手がかりとなる。龍川五条遺跡では自然の流路を一部取り込んで居住域を区画しているが、この微高地における居住域も南・東は環濠を掘削せずに流路を取り込んでいる可能性も考えられ、今後注意して確認する必要がある。

（遺跡広がりと遺跡の消長）

以上の推定により、龍川小学校を中心とした南北約270m、東西200mの微高地上には集落遺構が埋没する可能性高い。昭和33年の土器群発見を契機として存在が推定されてきた五条遺跡の本体はこの箇所に存在したものと考えてよいだろう。今後、周辺の開発等にあたっては十分注意する必要がある。

環濠と目される大溝は前期後半段階で掘削され、その後埋められる。大溝１は若干埋められたのち、大量の前期末～中期初頭の遺物が包含されることから、大溝上面の窪地に近接して居住が行なわれたものと推定される。大溝３は完全に埋められ、居住遺構の基盤となっている。

環濠の機能停止については、人口増加による居住域の拡大などさまざまな原因を考える必要があるが、今回の狭い範囲の調査ではそれに言及する材料が整わない。龍川五条遺跡では環濠がほぼ全掘されており、このあたりの研究が可能となろう。本報告が待たれる。

石器組成の特徴と生業活動について（第30図）

今回出土した石器の組成上の特徴として以下の3点をあげた。

・スクレーパー類が多い

・石斧類が少ない

・打製石斧が一定量存在する

ここでは、県内の縄文時代後期から弥生時代を通じて石器組成が把握可能ないくつかの資料を抽出し、その変化を辿ることにより、当遺跡の石器組成の特性を明らかにする。

（永井遺跡）

縄文時代後期～晩期の資料は善通寺市中村町の永井遺跡出土資料が良好である。低地性の遺跡で、自然河川より出土した資料であるが、層位的に後期中葉、後期後葉、晩期前半に分類可能である。後期から晩期にいたる石器組成の変化は、打製石斧と磨石・石皿類の増減に顕著にあらわれる。打製石斧は時期が下るに連れてその比率を増し、晩期前半は全体の46％を占めるにいたる。それに対して磨石・石皿類は後期中葉において20％程度を占めていたものが、10％以下に落ち込む。磨石・石皿類は縄文時代に普遍的な堅果類採集に伴う調理具と評価され、打製石斧は根茎類の採取に伴う土掘具と評価される。堅果類採集型の生業活動を継続しながら地下植物獲得型の生業活動が盛んになる様相を読み取ることができる。

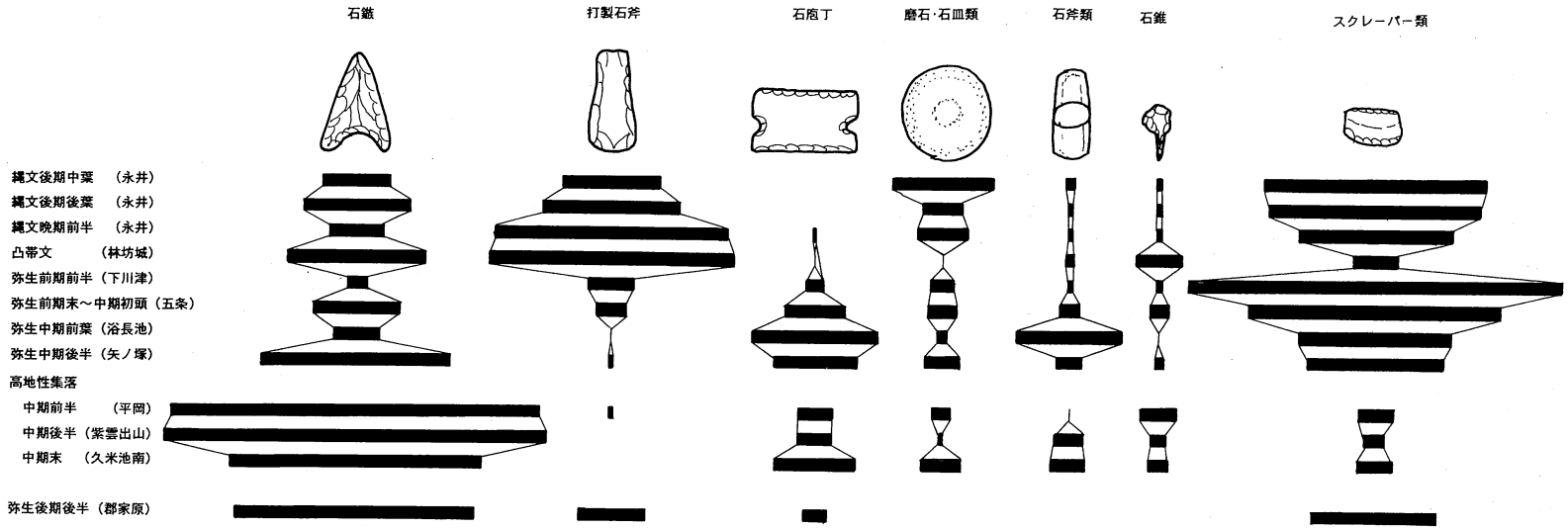
なお、磨製石斧類や、石錐は低比率を保っている。

（林・坊城遺跡）

凸帯文期の遺跡として、高松市林・坊城遺跡があげられる。流路出土資料であるが、多量の土器と、木製農具を伴っている。農具は弥生時代に特徴的な形態を持つものがあり、水稲耕作を行なっていたことは間違いないであろう。しかし石器組成をみると、永井遺跡でみられた打製石斧の増加傾向が引き続き展開し、48％を占めるに至っている。磨石・石皿類に関しては殆ど確認されず、また収穫具たる石庖丁も皆無である。あくまで縄文時代後期以降の石器組成変化の延長線上にある。この組成は、凸帯文段階の稲作が縄文的生業活動のなかに部分的に受け入れられたものであった可能性を示唆しているものといえよう。

（下川津遺跡）

弥生前期古相の坂出市下川津遺跡出土資料は石庖丁が本格的に出現し、スクレーパー類が多くなる。在地産の打製石庖丁の定形化がまだ十分でなく、スクレーパーでこれを代用したことも当然考えられる。打製石斧は急激に減少し9％となるが、縄文的石器が1割程度残存することは注意する必要がある。地下植物獲得型の生業活動は依然継続している。磨製石斧類は引き続き低率である。



第30図　縄文時代～弥生時代 石器組成の変化

（五条遺跡）

当該五条遺跡においても同様の傾向が読み取れる。石庖丁は次第に増加し、その定形化が進むにつれてスクレーパーはやや減少する。打製石斧はやや減少するが依然一定量存在する。

（浴長池遺跡）

中期前葉の高松市浴長池遺跡に至り石庖丁が20％程度の安定した組成を持ち、打製石斧を払拭するに至る。縄文的地下植物獲得型の生業活動がこの段階で終焉を向かえる。石斧類は浴長池遺跡の場合は豊富に存在する。ただ、石斧類の比率の変化は通時的に乏しく、むしろこの遺跡の事例が特異である。石斧類の多寡は遺跡そのものの性格によるところが大きいのかもしれない。

（矢ノ塚遺跡）

中期後半の矢ノ塚遺跡は石鏃の比率が高い。丘陵裾部に立地する条件が影響するものかもしれない。高地性集落の石器組成は圧倒的に石鏃が多く、これは立地条件と、遺跡の性格が反映する好例である。

（郡家原遺跡）

後期後半の郡家原遺跡ではすでに鉄器が普及しはじめた時期と考えられ、石斧類・石錐等が消失し、石鏃、石庖丁が残存している。

（五条遺跡出土石器の評価）

以上の石器組成変化の流れのなかで、五条遺跡出土の石器は縄文時代的要素を若干残しつつ、稲作に伴う石庖丁の定形化と量的増加の傾向が緒についた段階の一群と言えるだろう。中期中葉段階に向けて、石庖丁の増加はともかくとして、打製石斧が終焉を迎える点は重要である。前期末（中期初頭を含む）と中期中葉との間には石器組成のみならず土器様相、集落立地等の面においても画期が存在する。当遺跡が立地する金倉川東岸においても、各集落が一旦途切れ、立地を違えて営みを始める傾向にある。今後、総合的に検討すべき課題である。

図　　版

1－1　調査前状況

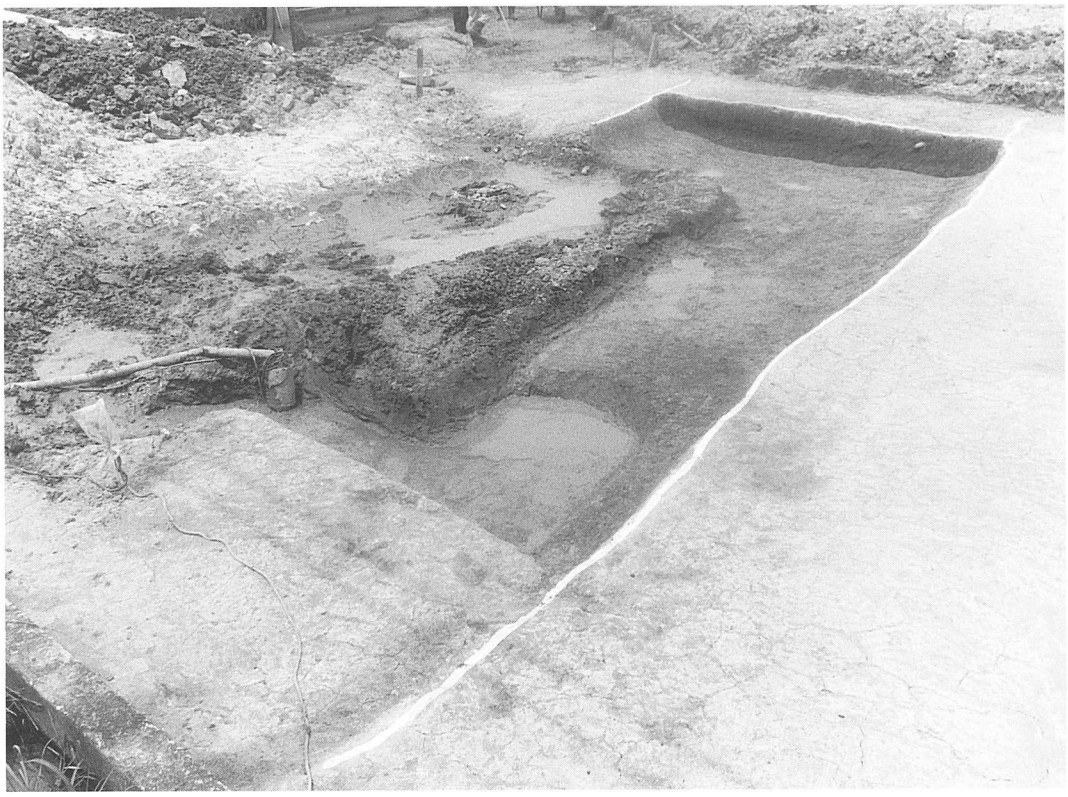
1－2　A地区調査地全景

図版 2

2 － 1　大溝 1 上層

2 － 2　大溝 3 中層遺物出土状況

3 － 1　大溝 1 中層紡錘車出土状況

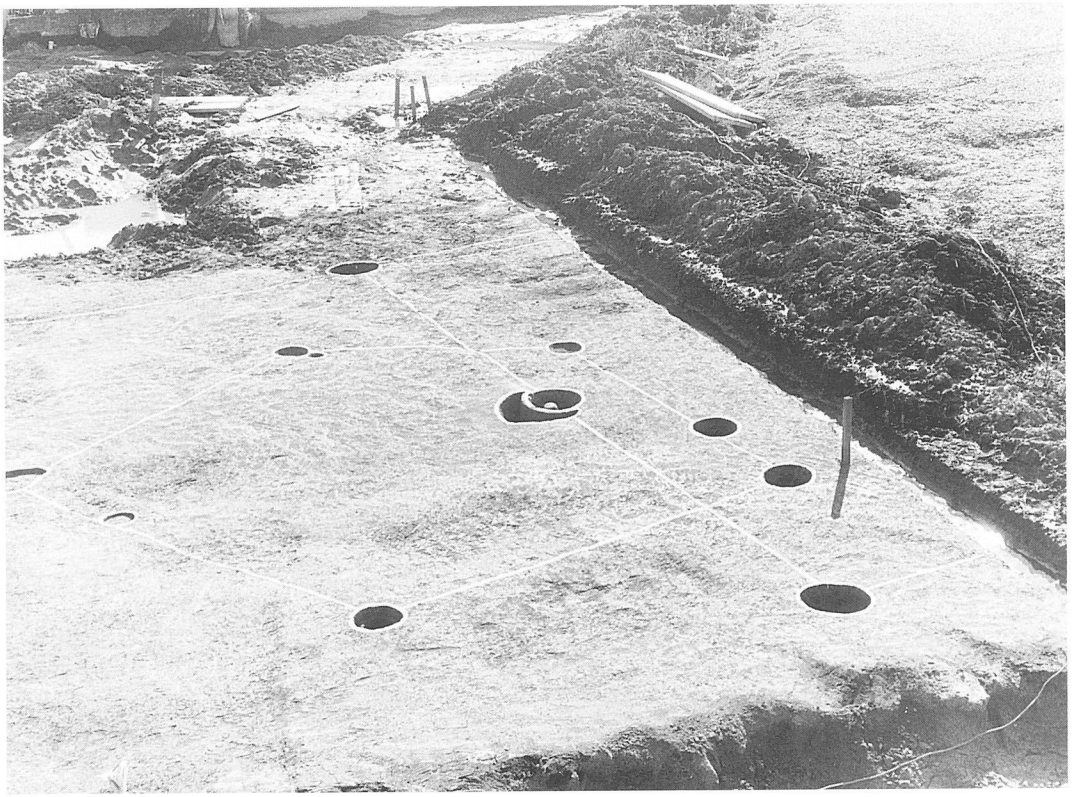


3 － 2　大溝 3

図版 4

4 － 1　大溝 3 断面

4 － 2　A 地区東側



5 － 1　竪穴住居跡・掘立柱建物跡

5 － 2　作業風景

図版 6

6 － 1　B 地区全景

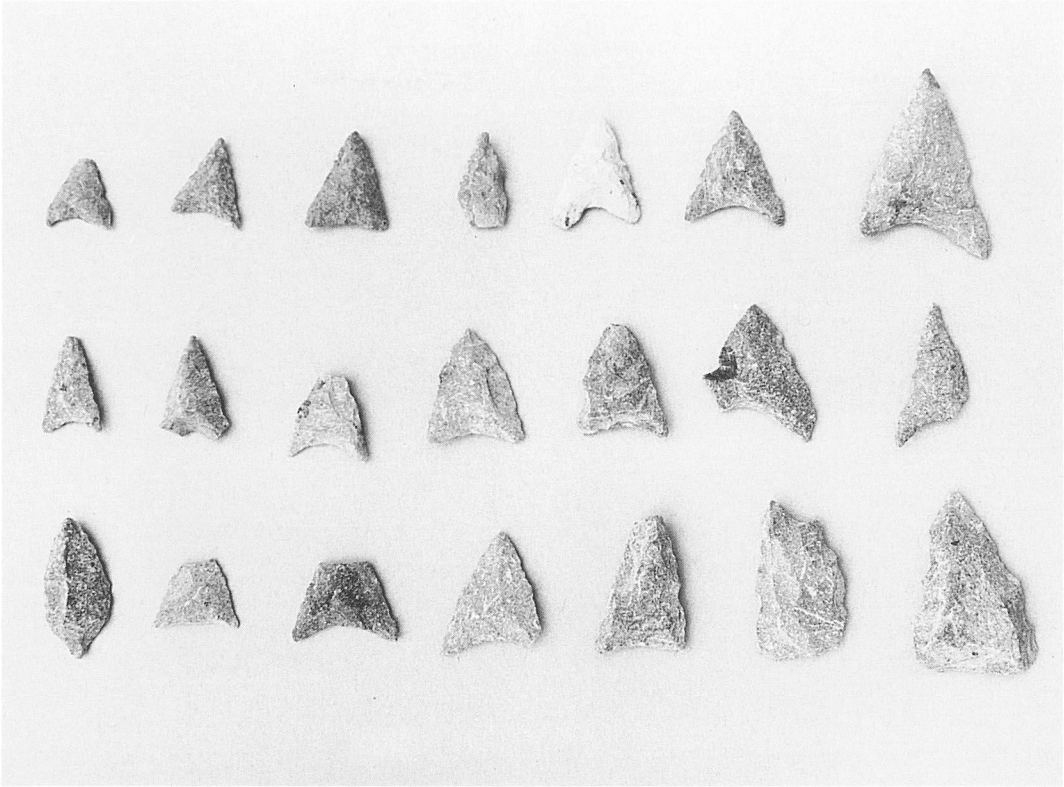
6 － 2　B 地区土坑

7 － 1　大溝 3 出土土器

7 － 2　大溝 3 出土土器

8 － 1　大溝 1 上層出土土器

8 － 2　大溝 1 中層出土土器



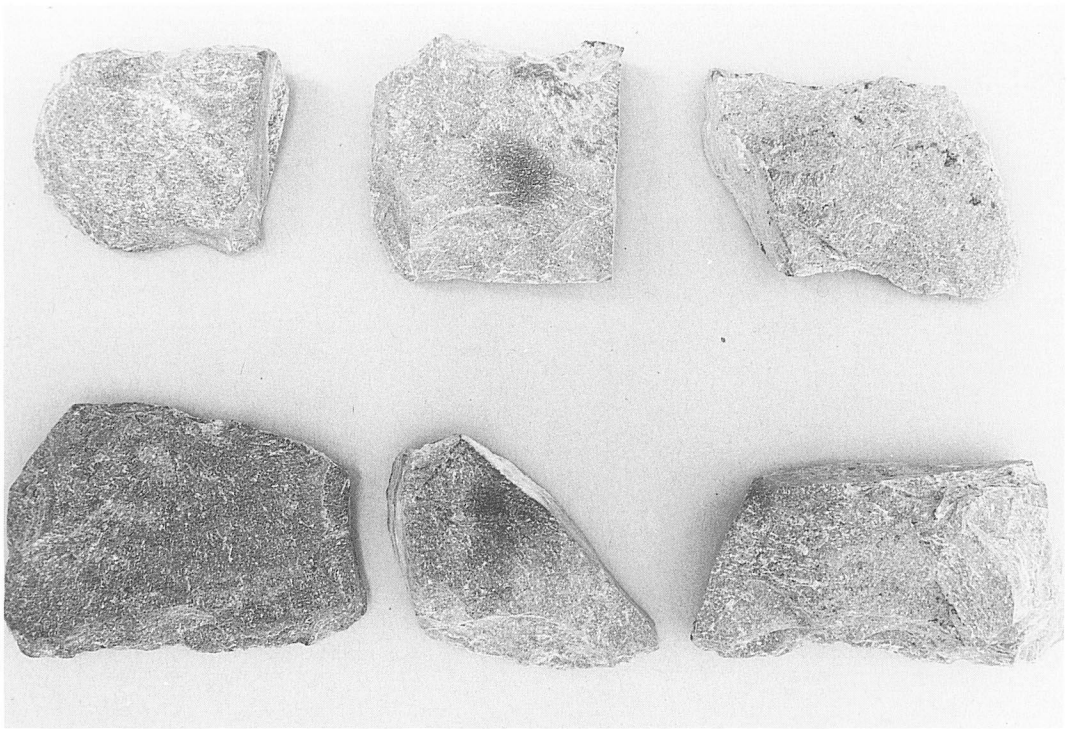
9 － 1　大溝 1 出土石器

9 － 2　大溝 1 出土石器

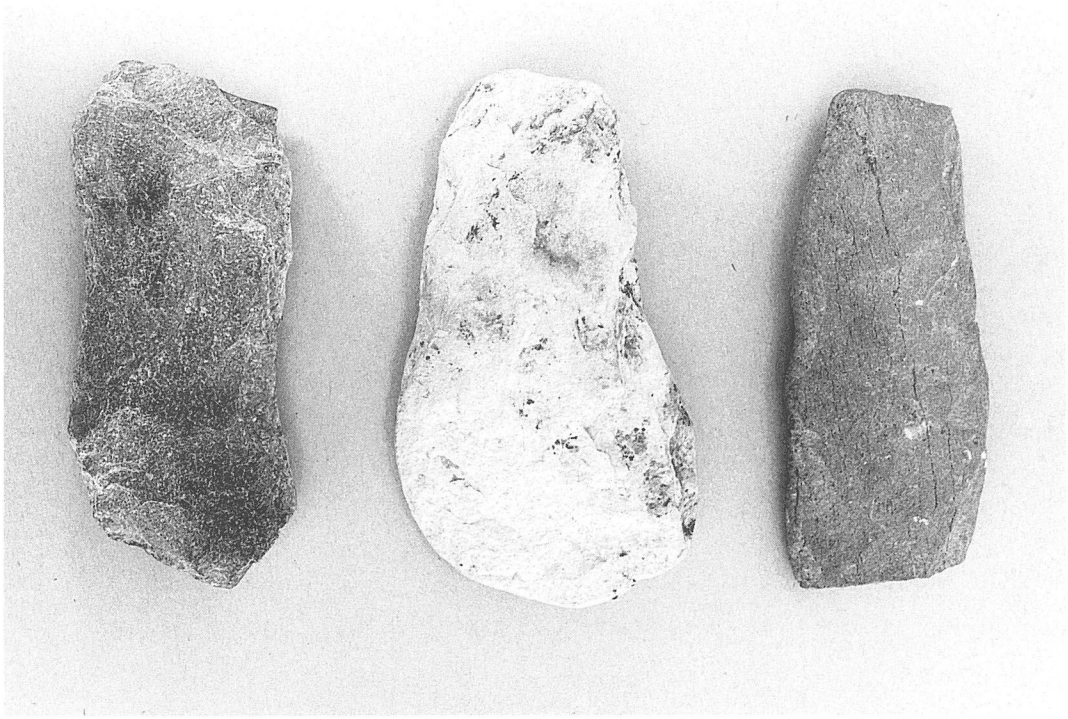
10－1　大溝1出土石器

10－2　大溝1出土石器

11－1　大溝１出土石器



11－2　大溝１出土石器



12－1　大溝1出土石器

12－2　大溝1出土石器

八 丁 地 遺 跡

例　言

1．本書は県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本遺跡は香川県大川郡志度町大字志度字八丁地に所在する。

3．調査は香川県土木部道路建設課より依頼を受け、香川県教育委員会が実施した。

4．調査は文化行政課主任技師國木健司が担当した。

5．本書挿図中のレベル高はすべて海抜、方位は真北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25,000分の1の地形図「志度」を使用した。

6．発掘調査、整理作業を通じて香川県長尾土木事務所、㈶香川県埋蔵文化財調査センター菅原康夫氏、藤川智之氏、白石純氏その他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。

7．本書の執筆、編集は國木が行った。

目　次

第１章　調査に至る経過 …… 1

第２章　調査の方法 …… 2

第３章　立地と環境 …… 4

第４章　調査の結果 …… 6

第５章　まとめ …… 17

挿図目次

第１図　調査区配置図 …… 3
第２図　周辺の遺跡地図 …… 5
第３図　Ｎ－１、２区平断面図 …… 7
第４図　出土土器実測図 …… 8
第５図　ＳＤ02出土土器実測図 …… 9
第６図　Ｓ－４区平断面図 …… 11
第７図　Ｓ－３、４区出土土器実測図 …… 12
第８図　Ｎ－１、２区平断面図 …… 14
第９図　Ｎ－３、５、６区平断面図 …… 15
第10図　Ｎ－８区平断面図 …… 16

図版目次

図版１－１　Ｓ－１、２区全景（西から）
図版１－２　ＳＤ01、02遺物出土状況
図版２－１　ＳＤ01、02完掘状況
図版２－２　Ｓ－３区西半部全景
図版３－１　Ｓ－３区東半部ＳＲ02、03
図版３－２　Ｓ－４区全景
図版４－１　Ｓ－４区ＳＲ05全景
図版４－２　Ｓ－５区南壁土層
図版５－１　Ｎ－１、２区全景（西から）
図版５－２　Ｎ－１区ピット群
図版６－１　Ｎ－３～８区全景（西から）
図版６－２　Ｎ－５区溝、ピット群
図版７－１　Ｎ－６区ピット群
図版７－２　Ｎ－８区全景（西から）
図版８－１　Ｎ－８区西端ピット群
図版８－２　Ｎ－10区全景
図版９　遺物写真

第１章　　調査に至る経過

近年高松市と東讃地域を結ぶ大動脈である国道11号線は大渋滞が続きその緩和のための道路新設が本県にとって大きな課題とされてきた。県道高松志度線建設はその一環として計画された路線で、本県の重要施策の１つとしてその整備が急がれることになった。

全長約6.5㎞に及ぶ建設予定地のうち高松市内区間は平成４年度の分布・試掘調査により弥生時代を中心とする集落遺跡の所在が確認され、現在その事前調査が実施されている。さらに５年度に至り志度町区間が事業化されることになり、県教育委員会は平成５年５月に予定地内の分布調査を行い、山丘部を除く延長約260ｍの水田地区について試掘調査が必要と判断した。その所見に基づき平成５年９月21日から31日にかけて試掘調査を行ったところほぼ全域でピット、溝等の遺構とともに縄文時代から中世にかけての遺物が出土したため、約4800㎡の範囲について事前の保護措置が必要と認められた。

以上の結果に基づき事業課である道路建設課、長尾土木事務所と保護措置の方法等について協議を行った。重要施策の１つであり工事も急がれることから平成６年度に事前調査を行うこと、事前調査は（財）香川県埋蔵文化財調査センターに委託して行うこと等で調整がまとまった。しかしながら、道路と民地との境界については６年度の作付に間に合わせるため水路・擁壁等の構造物を５年度内に構築する必要があったため、この工事部分については早急な調査が必要となった。

道路南辺には現在の水路を付け替える工事（以下「南辺水路」と呼ぶ）、北区には民地との境界に擁壁を設置する工事（以下「北辺擁壁」と呼ぶ）が計画されていた。前者は延長約200ｍ、幅２ｍ、後者は延長140ｍ、幅１ｍの掘削工事が予定されており、合計540㎡については５年度中に事前調査を実施しなければならないことになった。調査体制については小規模な工事であること、緊急に対応する必要があることから文化行政課の直営事業として実施することにした。

工期が約３か月の期間を要することから調査は年内に実施する必要があったため直ちに調査の準備に入った。こうして平成５年11月10日から12月10日までの予定で上記事業に伴う事前調査を実施することになった。調査結果については６年度に本体部分の本調査が予定されているが、できる限り早い段階での遺跡内容の公表が不可欠と考え、今回の調査結果を第１次調査と位置付け概報の形で報告することにした。整理作業期間は平成５年12月15日から６年３月31日までである。

第2章　調査の方法及び経過

1．調査区の設定

今回の調査対象地は道路南辺の農業用水路及び北区の擁壁構築部分である。南辺水路部分は延長140m、掘削工事幅2mを対象とした。北区擁壁構築部分は延長140m、掘削工事幅1mを対象としている。以下南辺水路部分をS区、北辺擁壁構築部分をN区と呼ぶ。なお、南辺水路は№109＋13の位置で折分かれし、また№112の位置で北に屈曲していずれも現水路に取り付く工事計画となっているためこの部分も調査対象に含めている。ただし両工事部分とも南半部は現在の水路をほぼ現位置で改修するものであるため、実質調査を行えたのは北半部のみである。位置的にN区に近い位置の調査となったため、調査区はN区に含めている。以上の調査対象地の総面積は540㎡である。

道路両側を帯状に調査するというものであるが、調査区については今後の本線部分の調査を整合させることが可能となるように設定する必要がある。そこで調査区の設定に際しては道路本線部分のセンター杭を基準にすることとした。道路は№108以東の部分で北にカーブする計画となっているため、主軸線は調査対象地西端の№106～№107のラインに求めた。従って№108以東については調査区の主軸線は道路のセンターラインより南にずれるものとなっている。

調査区は現況地割によって第1図のとおり細分した。S区については1～5区、N区については1～10区に細分している。以下報告に際してはS－1区、S－2区…という呼称を用いる。

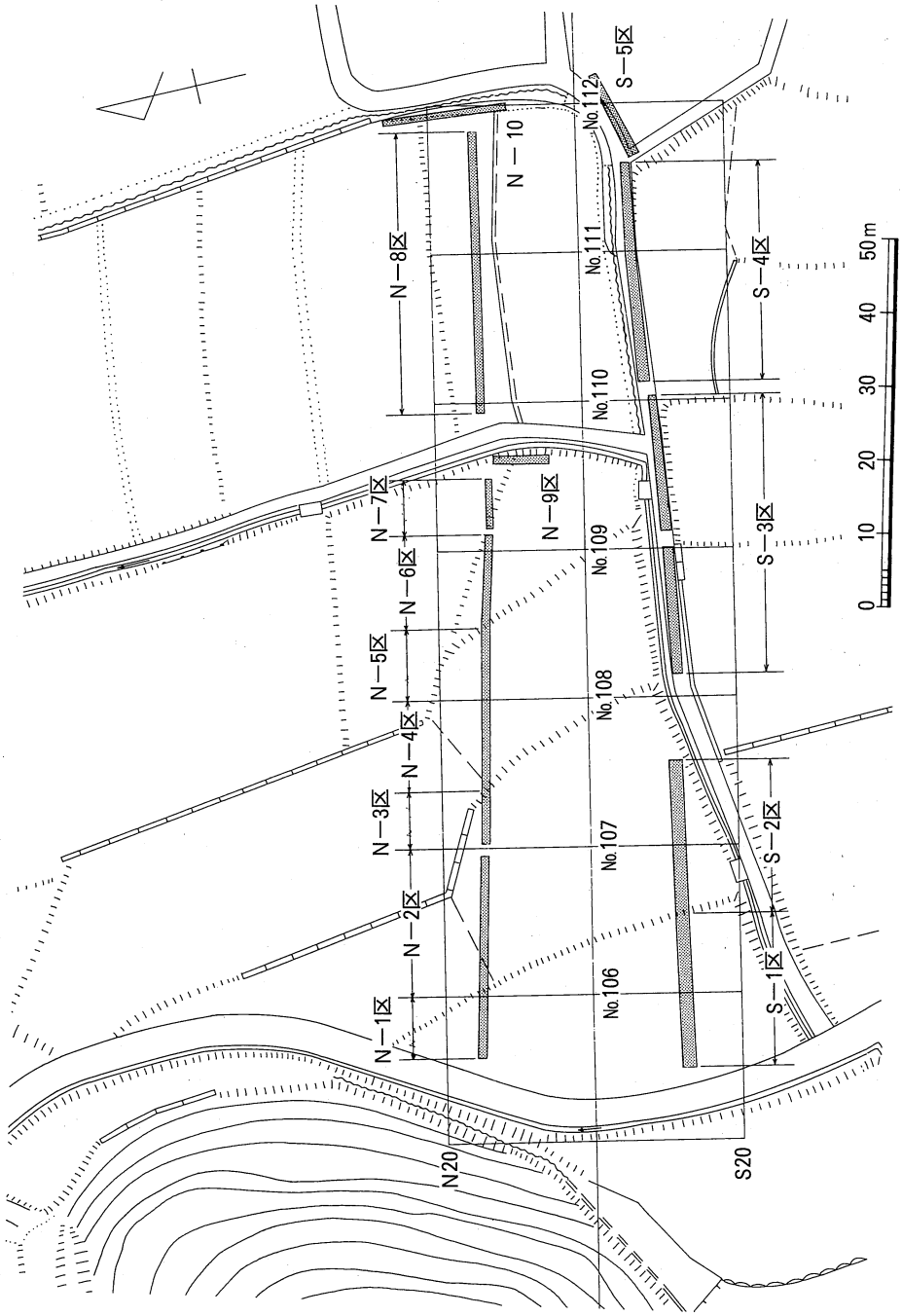
2．調査の経過

既に試掘調査によって耕作土下に遺物をほとんど含まない厚い茶褐色系の砂層堆積が確認されたため、この間の層位については重機により掘削した。同層下にはほぼ全域で遺物包含層を確認した。包含層は弥生時代後期と古代末～中世の2時期に大きく分けられ、調査区によって形成状況がめまぐるしく変化するという傾向がある。また、包含層上面でも遺構を確認した調査区もあったため、包含層はできる限り人力発掘を行った。

調査はS－1、2区より開始した。S－1区は削平が著しく遺構も検出されなかったが、東端付近で弥生土器包含層を確認している。S－2区では中央付近で弥生土器を多量に包含する溝を2条検出した他、東半部では古代末から中世にかけての包含層の形成が認められた。S－4区では西端付近の微高地上で弥生土器包含層及び古代の土坑等を検出した。中央付近以東は東に向って急激に下る傾斜が確認されたが、この落ちの部分に古代末から中世にかけての遺物

を比較的多く含む黒色粘土が厚く堆積していた。この黒色粘土層については調査の効率化のため重機を用いて掘削し、最下層のみ人力発掘を行った。

N区は１区より順次東に向って調査を進めた。遺構及び遺物包含層ともに局地的に検出・確認された傾向がある。N－１区からN－２区西半部にかけては弥生土器包含層の上下両面でピット、溝等を検出した。N－２区東半部では最下層に古代末～中世の包含層が堆積しており、



第１図　調査区配置図

弥生土器包含層は形成されていない。N－3、4区では遺構は検出しておらず、遺物量も極めて希薄であった。N－5、6区ではピット群、溝等の遺構の他ほぼ全域で古代末～中世の包含層を確認した。東端付近は同層下に弥生土器包含層が形成されていた。N区については幅狭い上に深くまで掘り下る必要があったため、降雨の流入、湧水等が著しく排水に手間どった。

N区の調査終了後工程の最終段階で水道管が埋設されていたことから後回しにしていたS－3区の調査に入った。現在の農道部分であり削平攪乱が著しかったが小規模な流路等を検出している。S－3区の調査後全域埋め戻しを行い全工程を終了した。

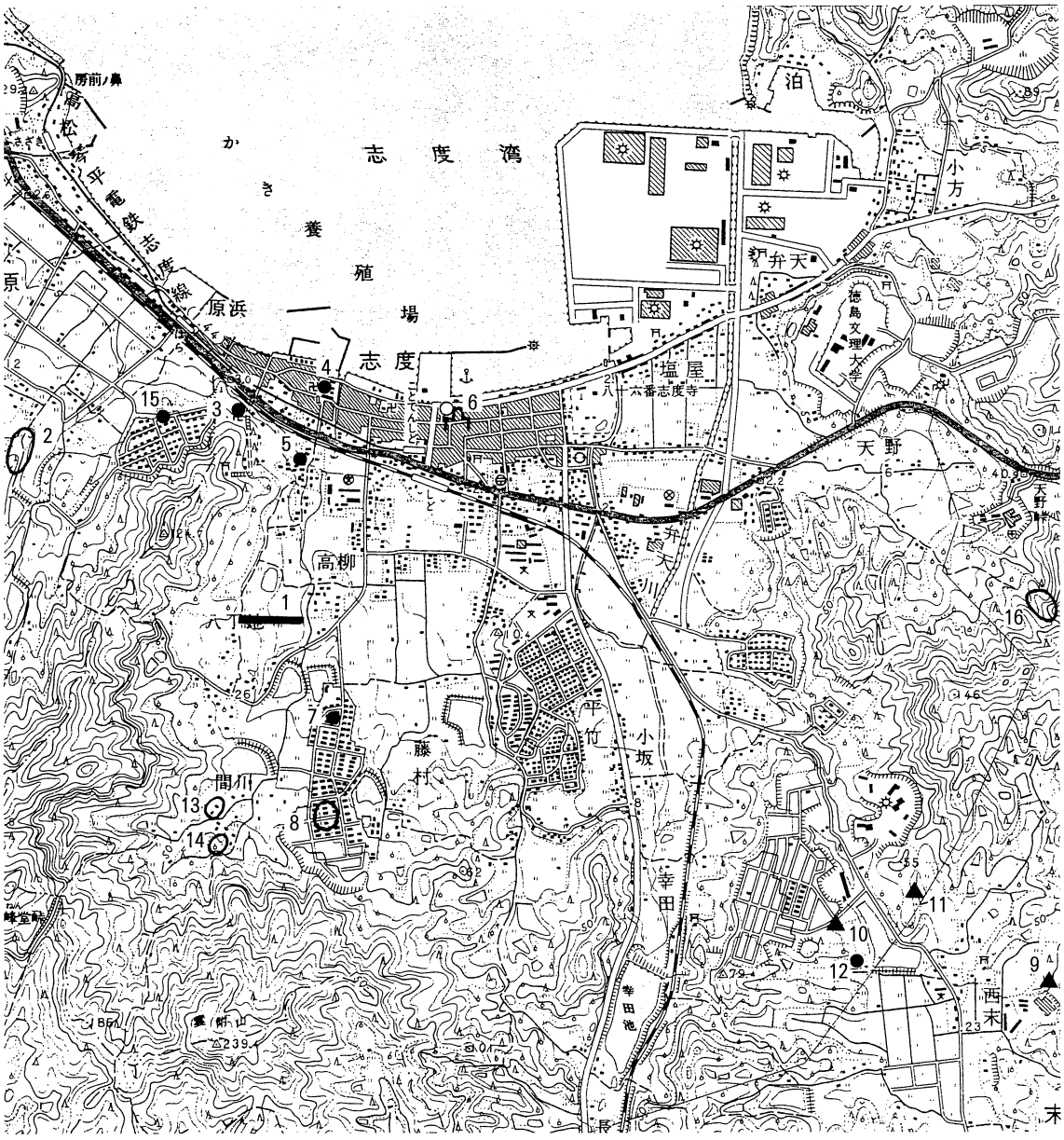
第3章　立地と環境

志度町は県の東端を占める大川郡北西部の海浜部に位置する町である。町西部の志度地区は北方を志度湾に面し他3方を山塊が占める地形で、中央付近三角州状の沖積平野が広がっている。八丁地遺跡は西方丘陵部から東に向って下る緩傾斜部に位置する。

これまで同地区では発掘調査が実施されたことがないため、周辺地域の遺跡所在状況については不明瞭な部分が大きい。特に集落遺跡の所在状況については全く判明していない状態にある。ただ、八丁地遺跡南方の間川地区の丘陵部には弥生土器の出土を伝える地点も所在しており八丁地遺跡と同様の遺跡が所在している可能性はある。志度地区東方の丘陵部では天野地区の比較的高所にある丘陵部には、弥生時代中期後葉の土器が多量に出土した天野遺跡が所在している。弥生時代後期を中心とする遺跡は八丁地遺跡が初見という状態であるが、今後弥生時代の集落遺跡が発見される可能性は極めて高い。

平野部を見下ろす丘陵部には多和神社古墳、越窓古墳、茶臼山古墳等の古墳が所在していたが、既にほとんどが削平され消滅している。築造時期が判明しているものも知られていない。町南部の末地区には古墳時代終末期を中心とする時期の須恵器窯跡である末窯跡群が所在しており、新たな生業の展開を示しているものとみなされる。

八丁地遺跡は周辺に関連する遺跡の所在が知られていないため現時点では明確な意義を与えがたい状態にあるが、丘陵を挟んで西に隣接する牟礼町には同様の地形上に展開する弥生時代後期後半の原遺跡が所在しており相互の関連が注目される。



1　八丁地遺跡（今回調査）
2　原遺跡（弥生後期集落）
3　多和神社古墳
4　岡の松遺跡（中世墳墓）
5　越窓古墳（消滅）
6　志度城館跡
7　茶臼山古墳（消滅）
8　間川遺跡Ｃ（弥生）
9　末１号窯跡
10　末２号窯後
11　末３号窯後
12　西末古墳
13　間川遺跡Ａ
14　間川遺跡Ｂ
15　丸山古墳（横穴式石室、消滅）
16　天野遺跡（弥生中期末）

第２図　周辺の遺跡地図

第4章　調査の結果

1．基本層序

S区、N区ともに東西に細長い調査区であるため、調査区によって基本的な土層序は多少異なる部分もある。また、出土遺物が稀少であった地区も多く各層位の帰属時期についても不明瞭なところが多い。断片的な資料からではあるが、大きく5層に区分しうるものと考えられた。

最上層のⅠ層は耕作土及び床土である。Ⅱ層は茶褐色系の砂層で濃淡等により何層かに細分は可能であった。削平が著しいS－1区南半部、S－3区等では同層の堆積は認められなかった。Ⅱ層中からは中世以降の土師器細片、弥生土器片等が極少量包含されていたにすぎず、細分した各層の形成時期等は明確ではない。

Ⅲ層は古代末～中世遺物を包含する灰褐色あるいは灰黒色土である。同時期の遺構、流路の埋土も基本的には同様のものである。調査区によって砂層あるいは粘質土層等土質に相違がみられるが、埋没・形成過程の違いによるものと考えられる。流路あるいは落ちの部分の中位以上の層位は中世遺物を少量含み土質はⅡ層に近似するものである。なお、Ⅲ層は調査対象地の大半の範囲で形成が認められたが、弥生時代後期の遺構・遺物を多く検出した地区については形成が顕著でない。

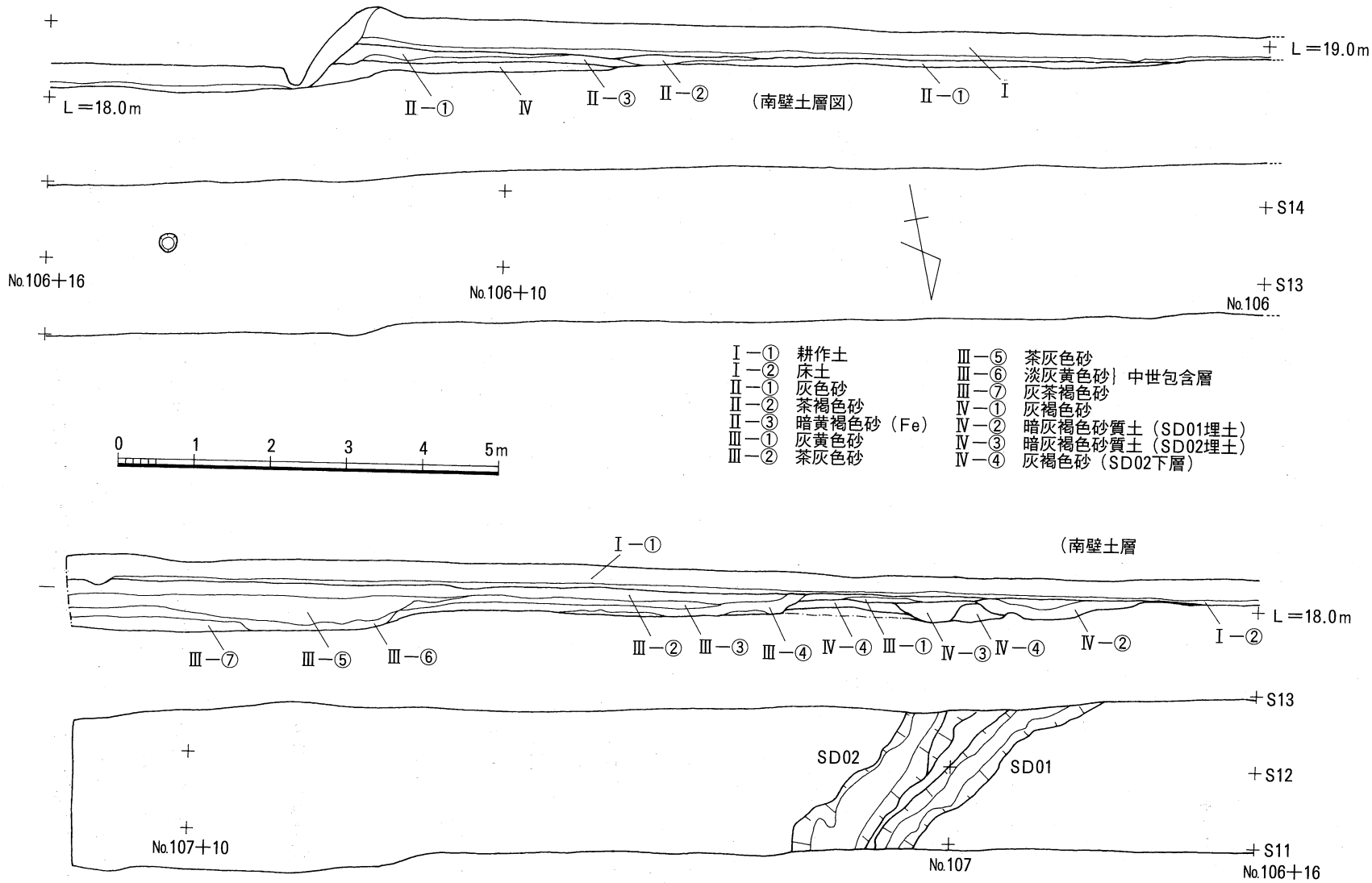
Ⅳ層は弥生時代後期の遺物を包含する暗灰褐色砂層である。同層の堆積が確認されたのはS－1、2区の一部、S－3区東端付近、N－1、2区であり、局地的に形成されている感がある。N－6区東端付近では鉄分が濃密に沈澱した茶褐色砂層中に弥生土器片が比較的多く含まれている。土質は異なるがⅣ層に含めてよいであろう。遺構はN－1区ではⅣ層の上下両面で検出している。

Ⅴ層は弥生時代及び古代末～中世のベースとなる黄灰色系の砂層である。同層中には遺物の包含は認められなかった。

2．各調査区の概要

(1)、S－1、2区

S－1区は大半の部分で削平が顕著であったため遺構は検出していない。ただ路線中央付近の試掘調査ではピット群を検出しており、N－1区の遺構検出状況からみても本来の集落域に近い位置であったことは確実である。1区東端付近では最下層に弥生土器を比較的多く含むⅣ層の形成が認められたことはそのことを傍証するものであろう。



第３図　Ｎ－１、２区平断面図

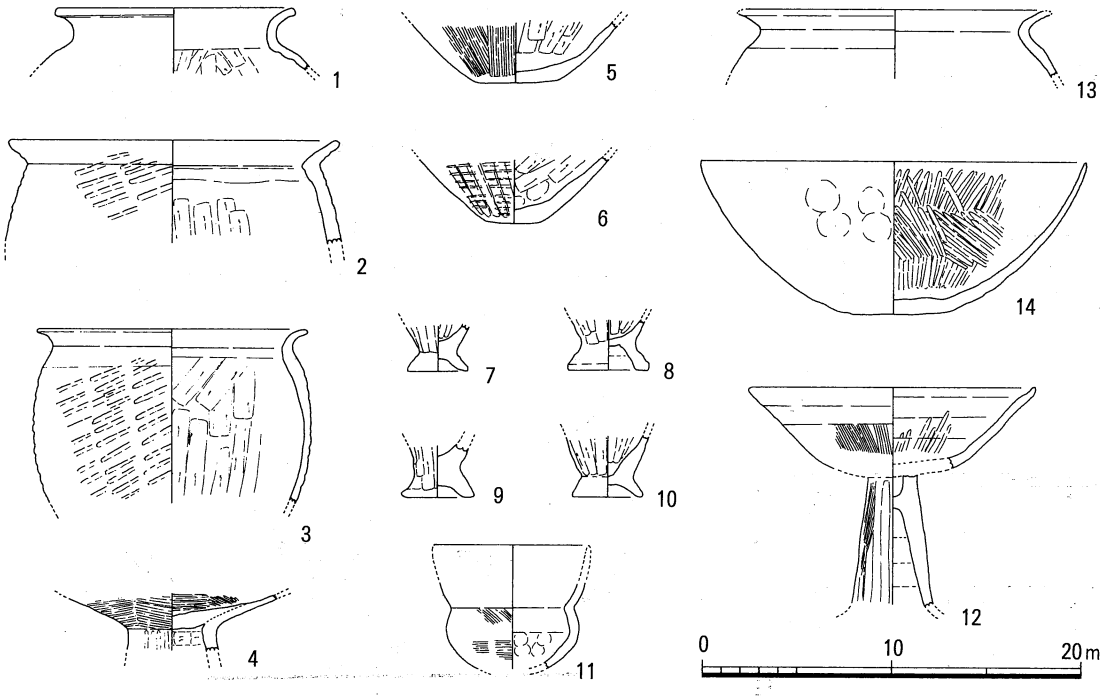
S－2区では西端付近でピットを検出した他、№107付近で溝2条を検出している。SD01は調査区に斜行して走る幅40～60cm、深さ23cmをはかる小規模な溝で、埋土は暗灰褐色砂層土である。散漫な状態ではあるが、弥生土器が比較的多く出土している。

SD02はSD01の東側に隣接してほぼ同じ方向に走る幅40～80cm、深さ20cmの溝で、埋土はSD01に近似する。SD01との切り合い関係は明瞭でなく、同時期に並存していた可能性もある。南端付近では同溝に切られる形でさらに古い段階の溝と思われる落ちが確認された。SD02は下層溝を再掘削したものと思われるが出土土器に明確な型式差は認め難い。SD02、下層溝のいずれも最上層部に帯状に連なる土器溜りを形成している。

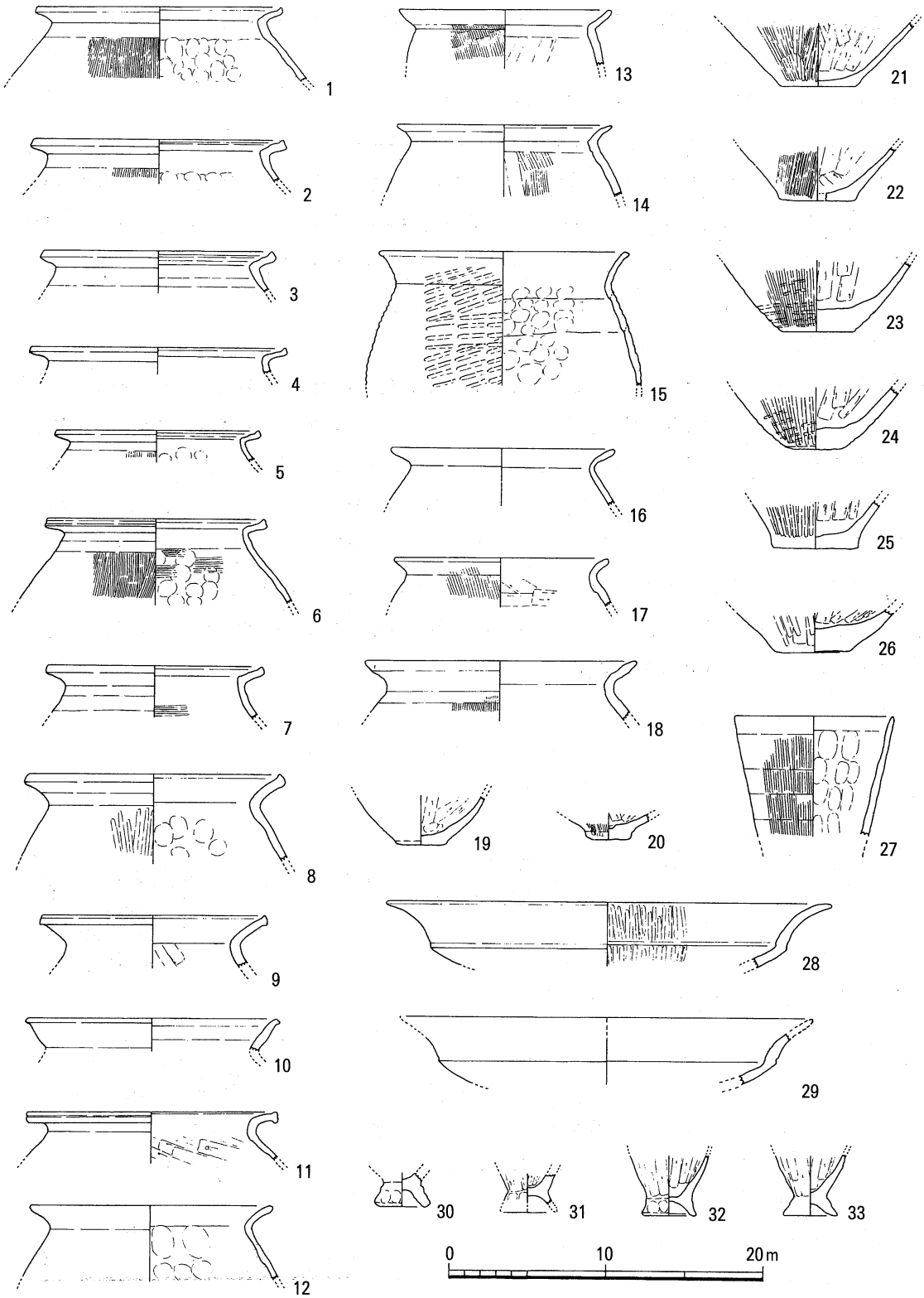
（SD01、02出土土器）第4図1～10、第5図

SD01から出土した土器は甕、高杯、製塩土器である（第4図3～10）。3は口径14.4cmをはかり、口縁部は大きく外反する。外面はタタキ後ハケ、内面はケズリ調整を施す。4は高杯で杯部の内外面ともに断続ヘラミガキを顕著に施している。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整、円盤充填法による成形が行われ、角閃石を胎土に含む下川津B類土器である。5、6は底部片でいずれも痕跡的に平底を留める。7～10は製塩土器脚部である。形状は異なるがいずれも下川津B類土器で、体部の内外面ともヘラケズリを施している。

1、2は甕でSD01、02いずれに伴うものか不明である。1の口縁部は大きく外反し、2は体部から鋭く折れ真直ぐに外傾する。



第4図　出土土器実測図



第５図　ＳＤ02出土土器実測図

第５図はＳＤ02から出土したものである。１～18は甕である。口縁部形状は端部を上方に摘み上げるもの（１～８）、上下に拡張するもの（９、11）、下方に拡張するもの（10）、丸くおさめるもの（12～18）に大別される。１～５は胎土中に角閃石を含む下川津Ｂ類土器である。口縁部内面はヨコナデによる凹凸がみられるものとみられないものの２種がある。体部の外面にハケ調整、内面には指頭痕が明瞭に残る。６、７は胎土中に角閃石は含まれないが器形、調整ともに下川津Ｂ類土器に近似するものである。色調も淡灰褐色と異なっている。８は胎土もやや粗く、口縁部も大きく外反する。外面調整はヘラミガキである。

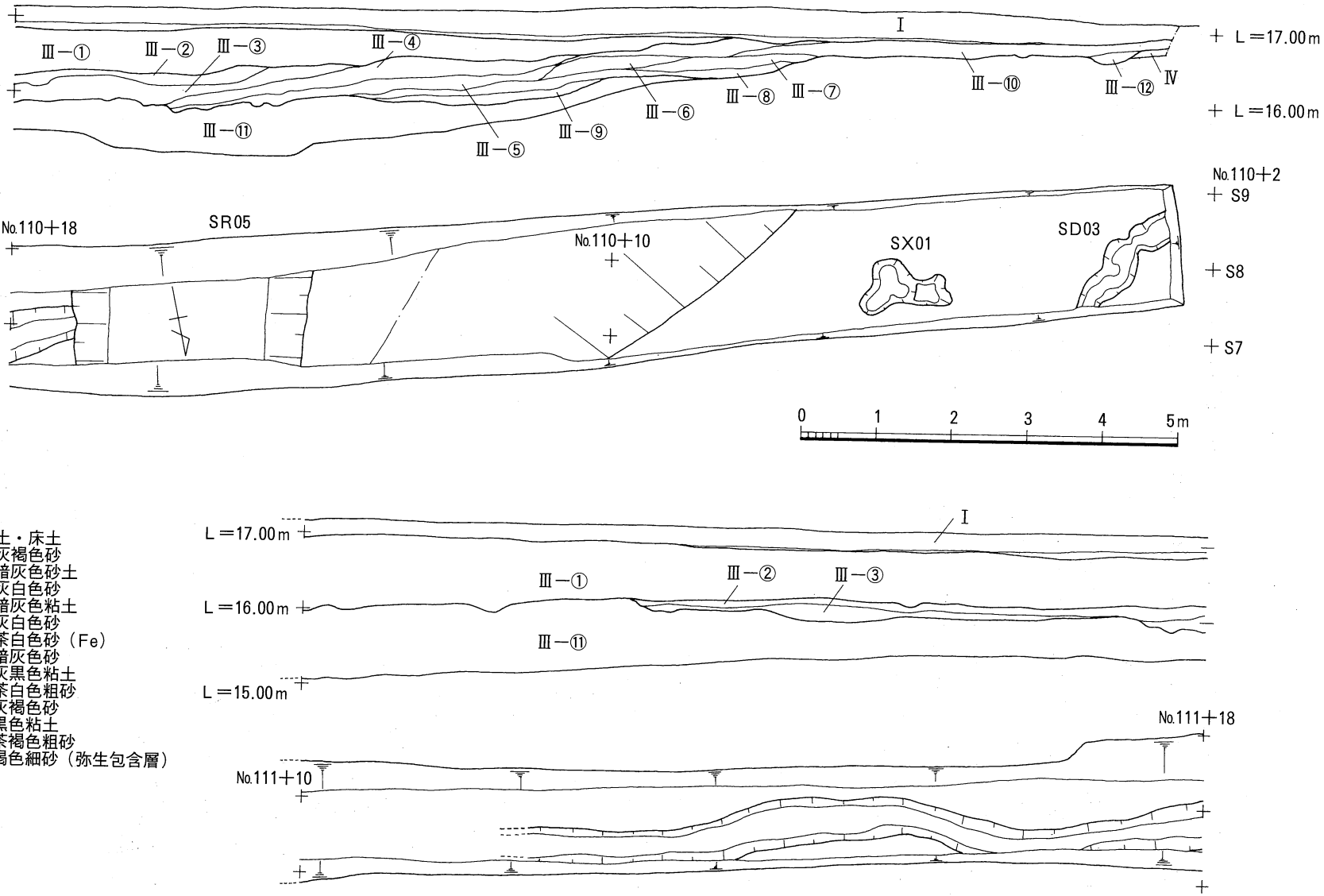
１～７の一群に比べ９～18は胎土に大型の砂粒、石英、長石を含むもので形状、色調、調整ともにバラエティに富む。19～26は底部片で平底を明瞭に留める。21、22が下川津Ｂ類土器である。27～33は全て胎土中に角閃石を含む。27は細頸壺で頚部は直線的に開くものである。外面調整はハケの後ヨコナデ、内面には指押さえが残る。28は大きく外反する口縁部をもつ高杯である。口縁部の内面に凹凸はみられない。28は高杯、口縁部とも内面に丁寧なヘラミガキを施している。30～33は製塩土器脚部で内外面ともヘラケズリを施す。

(2)、Ｓ－３区

東西２区に細分して調査を行った。いずれも現在農道として利用されていた地区である。西区は削平が著しく遺構は検出していない。遺物も土師器片が少量出土したに留まる。東区は調査区に直交あるいは傾行する流路を３条、並行する流路を１条検出した。西端付近で検出したＳＲ01は東端付近が調査区外となるが幅2.5m以上、深さ35cmをはかる。埋土は暗灰色砂で土師器片が少量出土している。ＳＲ０２は東区中央付近を直交方向に走る幅3.5m、深さ60～70cmの流路である。埋土は黒色粘土で遺物は出土していない。東端付近で検出したＳＲ03は幅５m、深さ45～70cmをはかる。ＳＲ01同様の埋土であり土師質土鍋（第７図16）須恵器片が出土している。ＳＲ01、02間の微高地上では調査区に並行に走る流路（ＳＲ04）の南半部を検出した。ＳＲ01、02に切られるため先行する流路である。土師器杯（第７図16）が出土しており古代の時期と推定される。ＳＲ03以東にはＳ－４区西端付近まで幅８m程の微高地が所在しているがこの部分は最下層に弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての土器溜（第４図11、12）が形成されている。

(3)、Ｓ－４区

西端付近はかなり削平を受けており耕作土直下が弥生時代の遺構ベースとなる。部分的にＳ－３区から続く土器溜が残存していた。この微高地上からは溝１条（ＳＤ03）、不定形土坑１（ＳＸ01）を検出している。ＳＤ03は西端土器溜下から検出したもので幅20～50cm、深さ15～30cmをはかる。底面は平坦ではなく凹凸がみられる。弥生土器片が比較的多く出土している。ＳＸ01は平面プランに規格性がなく底面も凹凸が著しいもので、深さは最大で18cmをはかる。埋土中から須恵器、瓦器等（第７図13～15）が出土している。



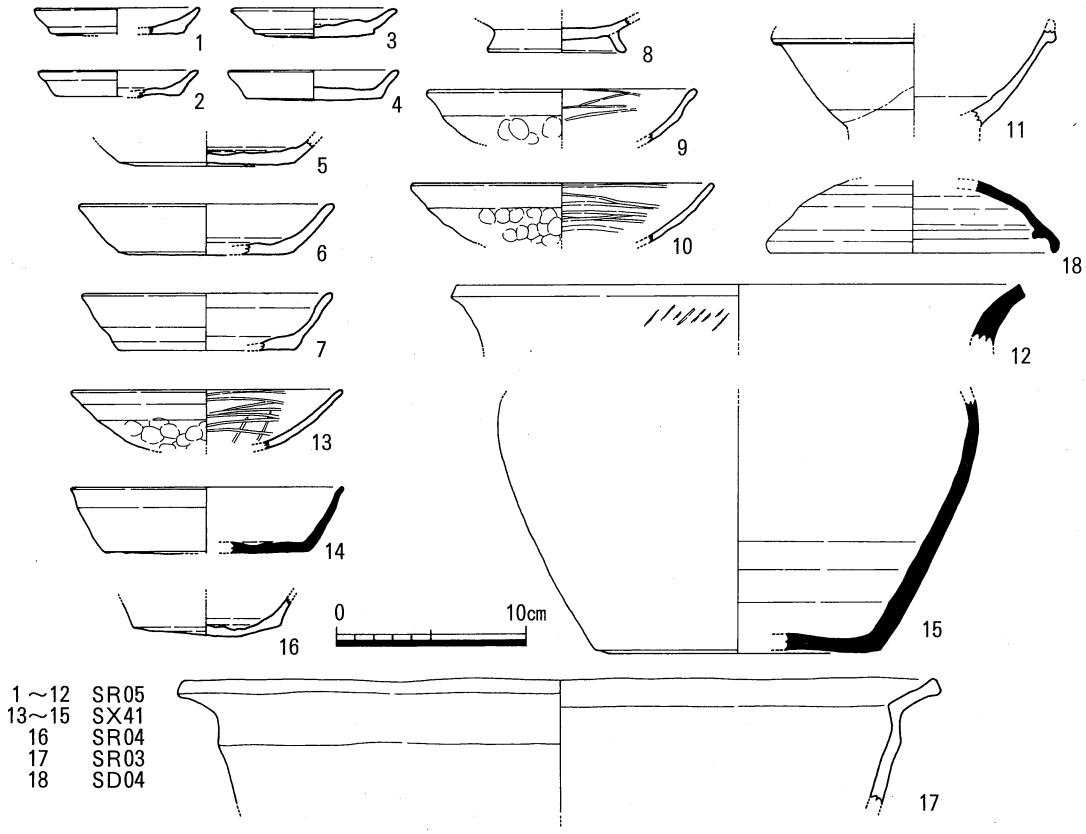
Ⅰ　耕作土・床土
Ⅲ－①　灰褐色砂
Ⅲ－②　暗灰色砂土
Ⅲ－③　灰白色砂
Ⅲ－④　暗灰色粘土
Ⅲ－⑤　灰白色砂
Ⅲ－⑥　茶白色砂（Fe）
Ⅲ－⑦　暗灰色砂
Ⅲ－⑧　灰黒色粘土
Ⅲ－⑨　茶白色粗砂
Ⅲ－⑩　灰褐色砂
Ⅲ－⑪　黒色粘土
Ⅲ－⑫　茶褐色粗砂
Ⅳ　暗灰褐色細砂（弥生包含層）

第6図　S－4区平断面図

№108＋８以東は急激に下る深い落ちとなる。西の肩は斜行する。深さ約1.2mの落ちの埋土は中位以下が黒色粘土、以上が灰色系の粗砂と粘土の互層である。下層の黒色粘土層はＳ－５区では同様に認められたが、Ｎ－８及び９区では検出していない。Ｓ－４、５区付近を斜行する流路と考えられよう。

この流路（ＳＲ０５）は西端付近で一端深くなり東に向って緩やかに下る平坦底面をもつ。下層の黒色粘土中から須恵器、土師器、瓦器等（第７図１～12）が比較的多く出土しており古代末～中世初頭にかけての時期に埋没したものと考えられる。

流路の底面からは調査区にほぼ並行に走る幅40～60cm、深さ10cm以下の浅い溝（ＳＤ04）を検出した。暗灰色粗砂の埋土であるため、ＳＲ05の埋土とは明確に区別される。埋土中から弥生土器、土師器、須恵器（第７図18）が出土しており、７世紀後半頃に上限を求められる。



第７図　Ｓ－３、４区出土土器実測図

(4)、N－1、2区

N－1区はほぼ全域で弥生土器を包含するⅣ層の堆積が確認された。層位関係は不明であるが縄文土器片も少量出土している。Ⅳ層上にはⅢ層の形成はみられずⅡ層が東に向って次第に厚く堆積している。遺構はピット群等をⅣ層の上下両面で検出している。幅の狭い調査区であるため建物復元はならなかった。

N－2区は西半部でⅢ層及びⅣ層の形成がみられたが、東半部ではⅣ層を欠いている。遺構は散漫であるが、西端付近で溝1条、東端付近でピット群等を検出している。やはり東に向って次第に厚くなるⅡ層の堆積が顕著である。

(5)、N－3～7区

3区～4区にかけての範囲は厚いⅡ層下に厚いⅢ層の堆積が認められたのみで遺構は検出されなかった。

5区から6区の範囲は比較的多くの遺構が検出され、また6区東端付近ではⅢ層下にⅣ層の形成がみられるなど出土遺物量もかなり多い。ＳＤ06は調査区に斜行する幅40cm前後、深さ5～7cmの浅い溝である。ＳＤ07は調査区に直交する幅2～3m深さ15cmの溝で、埋土はⅢ層と同じである。浅い落ちあるいは流路に相当するのかもしれない。ピット群も比較的多く検出しているが、いずれもⅢ層下のベース直上を遺構面としている。これらの遺構は層位関係から古代末～中世に概ね属するものと考えられる。

6区東端付近の7mほどの範囲ではⅢ層下に弥生土器をかなり多く含むⅣ層の堆積が認められた。3～5cm程度と薄い包含層であるが、鉄分の沈殿が著しく遺物の保存状態は不良である。第4図13が同層中出土の甕である。

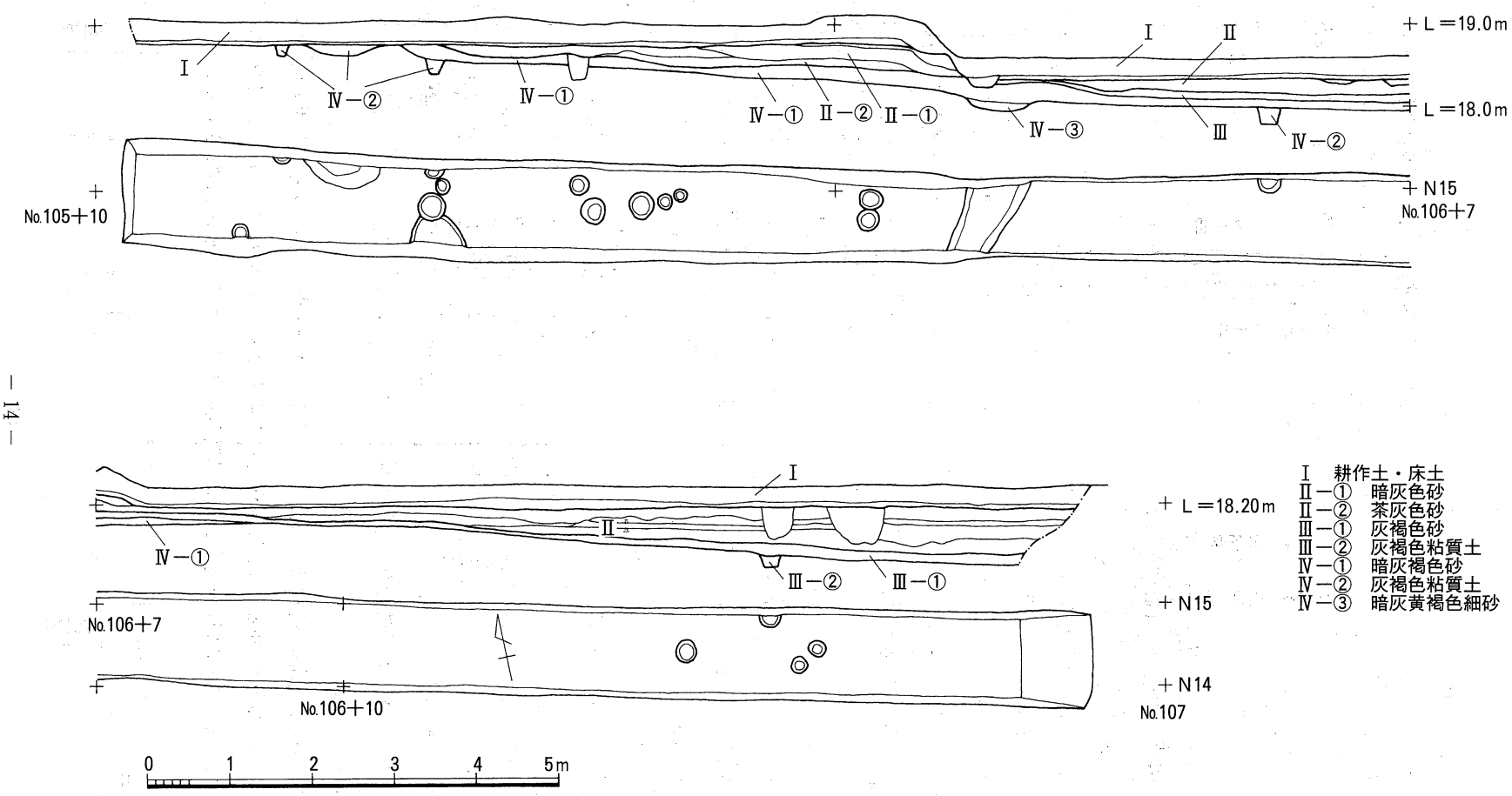
7区は削平が著しく厚さが20cmのⅡ層直下がⅤ層となり、包含層の形成も認められなった。

(6)、N－8区

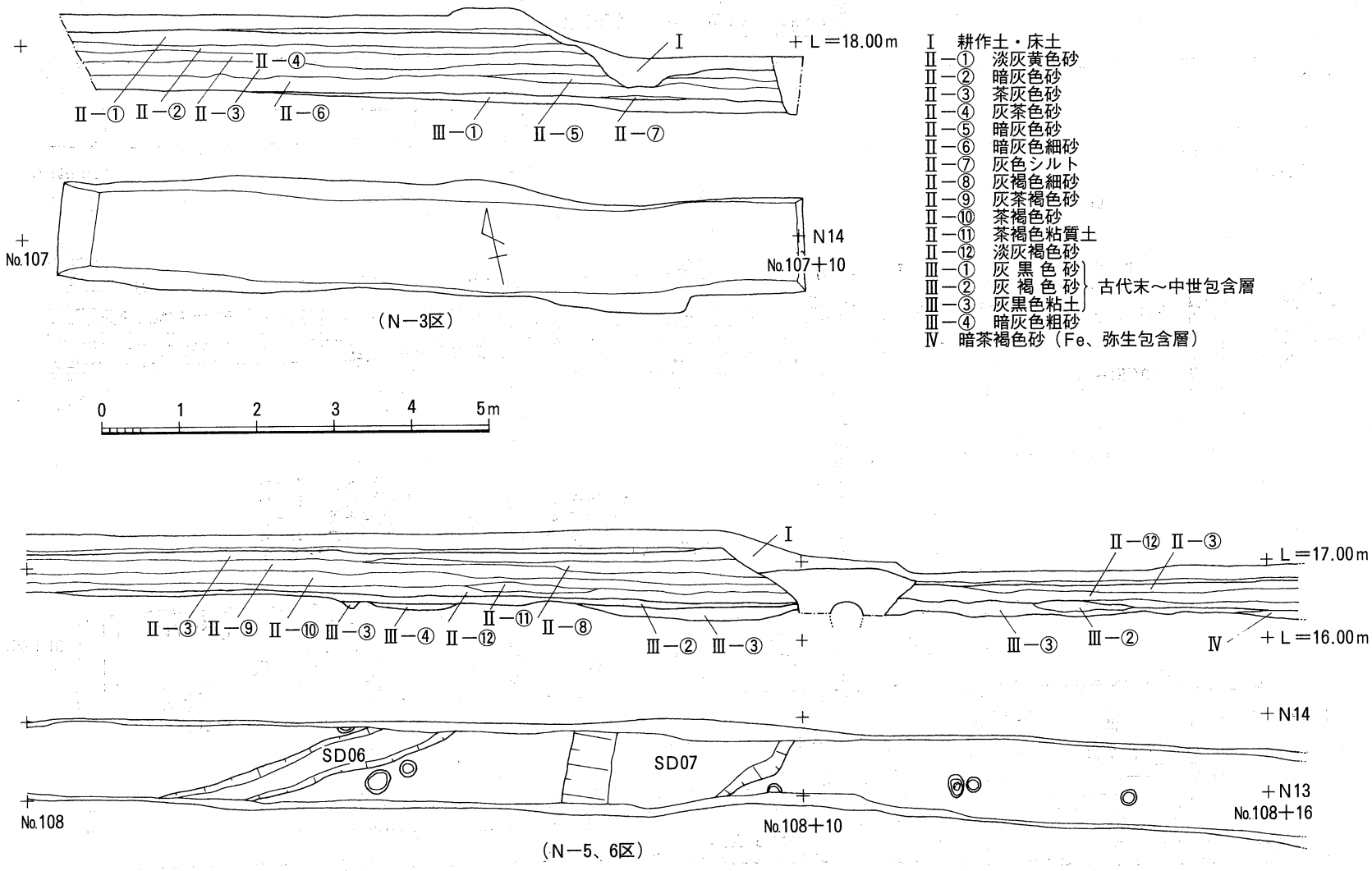
各層位毎の出土遺物が極めて少なく他地区との層位対照が困難であった。西半部はほぼ一様にN－6区東端付近と同様の鉄分沈殿層が広がっており同層がⅣ層に対応する可能性がある。東半部は最下層が淡灰黒色粘質土であり土質からⅢ層に対応するものと考えられる。遺構は西端付近でピット群、東半部で溝1条等を検出している。

(7)、N－9、10区

N－9区からは遺構、遺物とも検出していない。N－10区は中央付近で東西方向の溝を1条検出している。幅20～40cm、深さ10cm程度の小規模なものであり、埋土中からは鉢（第4図14）が出土している。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての所産と推定される。

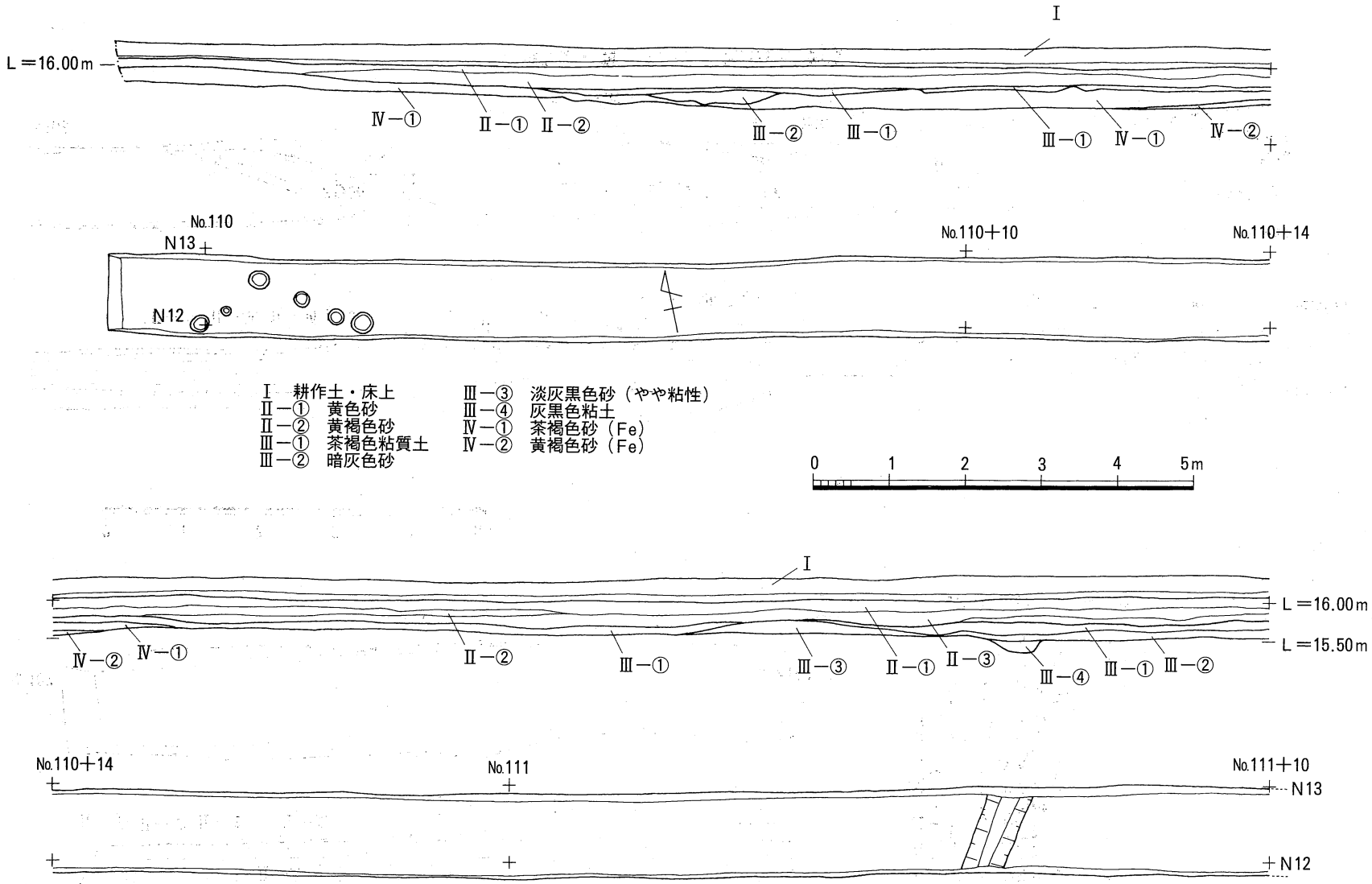


第8図　N－1、2区平断面図



Ⅰ　耕作土・床土
Ⅱ－①　淡灰黄色砂
Ⅱ－②　暗灰色砂
Ⅱ－③　茶灰色砂
Ⅱ－④　灰茶色砂
Ⅱ－⑤　暗灰色砂
Ⅱ－⑥　暗灰色細砂
Ⅱ－⑦　灰色シルト
Ⅱ－⑧　灰褐色細砂
Ⅱ－⑨　灰茶褐色砂
Ⅱ－⑩　茶褐色砂
Ⅱ－⑪　茶褐色粘質土
Ⅱ－⑫　淡灰褐色砂
Ⅲ－①　灰黒色砂
Ⅲ－②　灰褐色砂
Ⅲ－③　灰黒色粘土
Ⅲ－④　暗灰色粗砂
古代末～中世包含層
Ⅳ　暗茶褐色砂（Fe、弥生包含層）

第９図　Ｎ－３、５、６区平断面図



第10図　N－8区平断面図

第5章　ま　と　め

今回の発掘調査により八丁地遺跡が縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明したが、水路・擁壁部分を対象としたもので調査区が幅狭であったことから遺構の全体像は把握できていない。とはいえ、遺物等に注目すべき特徴がみられたので以下それらについて簡単にまとめておきたい。

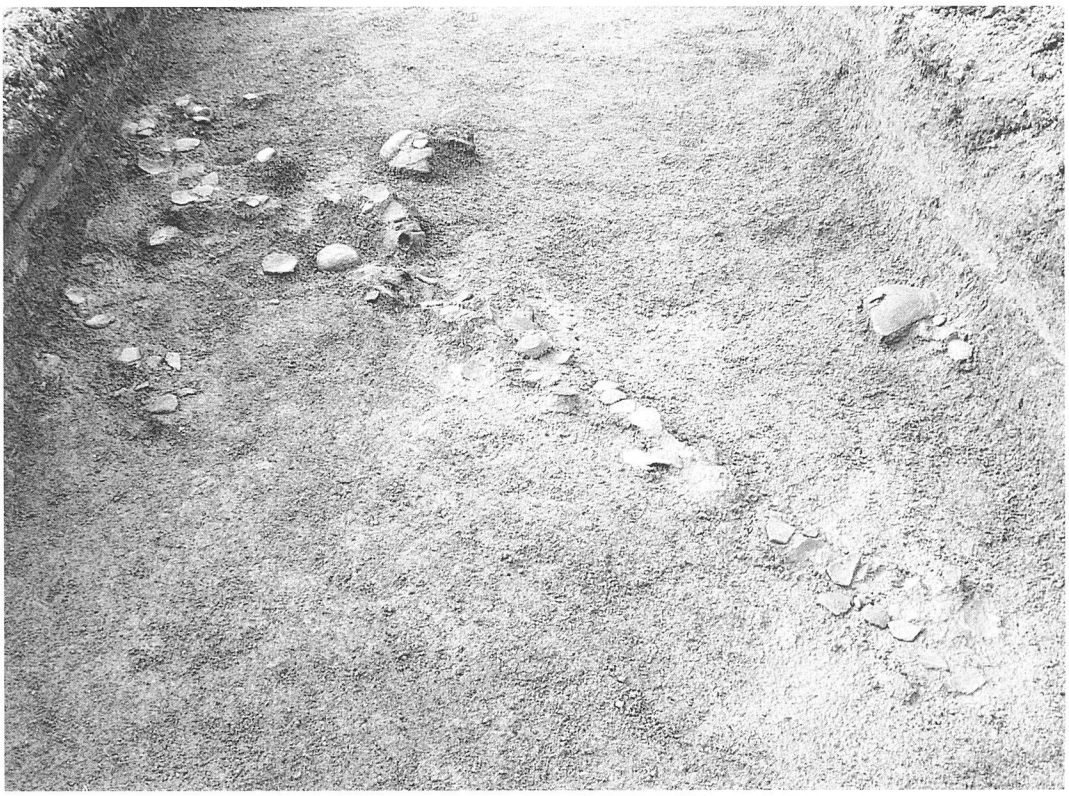
遺跡は南西から北東方面に緩やかに下る斜面部に形成されたもので、かつては大きく湾入していたであろう瀬戸内海を眼前に望む位置にある。今回の調査対象地東半部には中世以降小規模な流路が斜行して走っていたものと考えられるが、弥生時代以前に遡る流路の存在は確認されなかった。

居住関係の遺構は西半部を中心に検出されたが、弥生時代後期後半段階と古代末から中世段階のものに大別される。前者についてはほとんどがN－1、2区から検出され、集落域の範囲を限定できそうである。また、竪穴住居を検出していない点も特徴的である。弥生時代の遺物についてはＳＤ01、02出土土器が注目される。器種的には甕を中心に細頸壺、高杯、製塩土器等が出土しいてるが、甕以外の器種が全て胎土中に角閃石を含む下川津Ｂ類土器で構成されている点に特徴がある。甕についても3分の1程度が同類であり、胎土は異なるものの器形・調整ともに下川津Ｂ類土器を模倣したと考えられる一群も存在している。地理的に近い位置にある志度町鴨部南谷遺跡、寒川町石田高校校庭内遺跡、大川町寺田大角遺跡等では同類土器がほとんど出土していないことと比較すると、その構成比率は極めて特異な傾向とみなされ、遺跡自体が東讃地域にあって異質な性格をもっている可能性をも示唆している。高松平野西部地域との密接な交流関係は容易に推定されるが、さらに弥生時代後期後半に最盛期を迎える同遺跡の展開と発展の要因についても充分検討する必要があろう。

詳細は本線部分の調査に期待したいが、今後さらに周辺の調査が進めば八丁地遺跡が東讃地域内での集団関係を検討する上で重要な位置を占めるものとなってこよう。また、同様の傾向が大内町仲善寺遺跡でも伺えることからみて、巨視的には東讃地域あるいは阿波地域をも含めた東四国地域内での政治的関係にまで言及しうる可能性をもつものと思われる。

図　　版

１－１　Ｓ－１、２区全景（西から）



１－２　ＳＤ01、02遺物出土状況

図版 2

2－1　ＳＤ01、02完掘状況

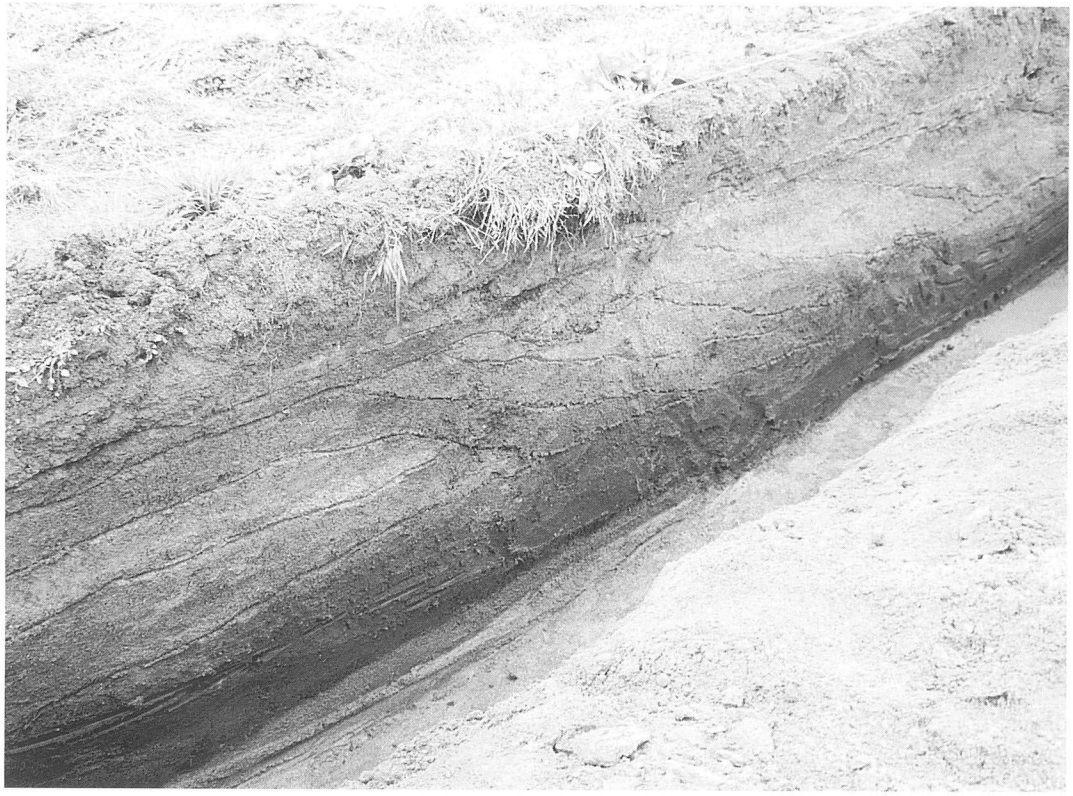
2－2　Ｓ－３区西半部全景

3－1　S－3区東半部SR02、03

3－2　S－4区全景

図版４

４－１　Ｓ－４区ＳＲ05全景



４－２　Ｓ－５区南壁土層

5－1　N－1、2区全景（西から）

5－2　N－1区ピット群

図版 6

6－1　N－3～8区全景（西から）

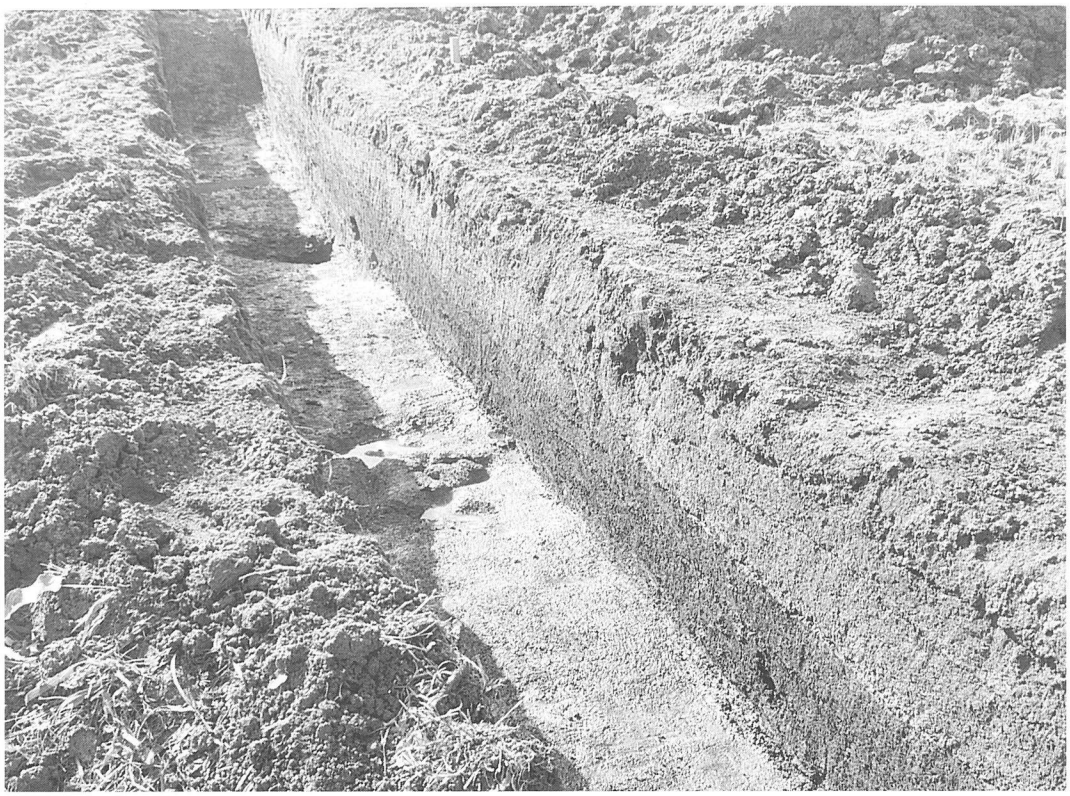
6－2　N－5区溝、ピット群

7－1　N－6区ピット群

7－2　N－8区全景（西から）

図版 8

8－1　N－8区西端ピット群



8－2　N－10区全景